観 音 林 遺 跡

(第九次発掘調査報告書)



(観音林遺跡出土、朱ぬり壺形土器)

1991.3.30

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

狐野遺跡

1968 津軽·前田野目窯址

第 2 集 1974 原子遺跡

1979

集

9 集

第 3 集 1975 観音林遺跡

(1)

第 5 集 1980 狐野製鉄遺跡 (2)

(1)

第 6 集 1983 福泉遺跡

7 集 1984 観音林遺跡 2

8 集 1985 観音林遺跡 1986

(3)

観音林遺跡 第 10 集 1987 観音林遺跡 (4)

第 11 集 1988 観音林遺跡 (5)

第 12 集 1989 観音林遺跡 6 (7)

第 13 集 1990 観音林遺跡 (8)

第 14 集 1991 観音林遺跡 (9)

序 文

五所川原市教育委員会

教育長 釜 萢 裕

農耕のない時代、生活の必要条件は近くに水があり、日の当たる場所、 そして食物となる動物や植物が豊富なところとされている。

太古の人たちにとって観音林遺跡はこの条件を満たしてくれるに充分な 場所であったようです。

発掘するたびに数千年前の縄文時代後期、晩期の多数の土器が出土するだけでなく石器類や竪穴式住居跡も確認されており同遺跡は先人が私たちに残してくれた貴重な遺産であります。

早いもので観音林遺跡発掘調査報告書も第九次を発行することとなりました。

私たちは、先人が残した文化遺産を大切に保存し、子孫に伝える責務が あります。

この報告書が市民のみなさんをはじめ関係者の方々に読まれ、その役目 を果してくれるものと信じます。

終りになりましたが、地主の長尾良治氏、そして長年にわたり発掘調査の陣頭指揮をとってこられた新谷雄蔵先生をはじめ、発掘担当者の北奥文化研究会のみなさん、地元松野木の発掘作業員のみなさん他ご協力をいただいた方々に心から感謝申しあげます。

平成3年3月

- (1) この報告書は、五所川原市教育委員会が、平成2年7月23日~8月24日にわたって (実働21日) 実施した「観音林遺跡」の第9次発掘調査の記録である。
- (2) この報告書のうち出土した「骨類」の調査は、早稲田大学 金子浩昌氏の調査によるものである。ここに記して感謝申し上げる次第である。
- (3) 出土した石器、石製品の調査は、調査員 伊藤昭雄が担当した。また、地学に関する 事項は、川村真一が作成した「基本層序」をベースに調査員 伊藤昭雄が記述を担当し た。
- (4) 遺構の実測、及び、セクション図の作成は、調査員 永沢秀夫、新谷雄蔵が分担して 担当した。また、図面のトレース、及び、土器の実測図、トレースは、荒谷順子、葛西 みつが担当した。 (☆土器の実測と図面のトレース等の指導助言は、鈴木克彦氏の指導 をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。)
- (5) 出土した土器、土製品の復原は、浅木全一が一手に引き受けて復原した。ここに記して感謝申上げる次第である。
- (6) 出土した土器の分類、写真の撮影、その他は新谷雄蔵が担当し、遺構の記述は、永沢 秀夫が担当執筆した。
- (7) 出土した遺物は、総て五所川原市教育委員会が保管し、市立歴史民族資料館に展示して歴史研究の資料に資する。
- (8) おわりに、発掘を許可され、土地の造成を延期し続けられた地主 長尾良治氏に感謝 申上げる次第である。
- (9) 図面の縮尺は、原則として、20分の1を基本としたが、必要なものには、縮尺をいれてある。また、石器の総数には、浮石製品の数は入れないで、パーセントを計算したことをお断りする。
- *また、この報告書は、第1次~第9次報告書をとおして、一貫して出土土器の記録を重点に編集してある。この方針は、第10次発掘調査まで続ける予定である。
- (10) 目次を見るとわかるように、 $A \cdot P \cdot L \cdot 1 \sim 3$ には、袖珍土器及び土製品を掲げている。 $A \cdot B \cdot L \cdot 4 \sim 88$ には、復原、完形土器を示してある。また、 $B \cdot P \cdot L \cdot 1 \sim 5$ には、遺構に伴って出土した土器を、 $B \cdot P \cdot L \cdot 6 \sim 17$ には、縄文時代後期の土器を示し、 $X \cdot P \cdot L \cdot 1 \sim 40$ には、縄文時代晩期の土器を掲げてある。
- * さらに、 $S \cdot P \cdot L$ 1 ~13には、出土した石器、石製品を示し、 $b \cdot P \cdot L$ 1 には、出土した骨類をかかげてある。(以上)

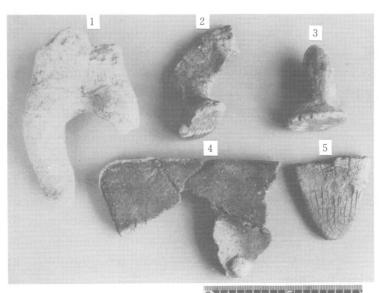
観音林遺跡第9次発掘調査出土〔土偶〕







(H X V 出土大洞 C 2 式)



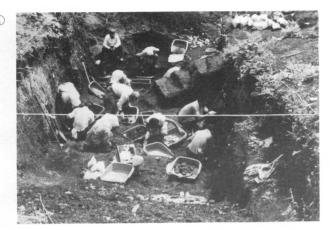
- 1 土偶下半)
- 2 土偶脚部 } 十腰内 I 式
- 3 土偶脚部
- 4 土偶上半→中期末~後期初頭
- 5 土偶下半→十腰内Ⅰ式
- ☆ (4・5) は板状土偶の残欠

目 次

-t- but	
表。紙	
序 文	
例	
口絵(土偶、大形壺形土器一朱塗)	
目 次	
	1
図 版	
第1図 遺跡付近地形図	9
第2図 観音林遺跡付近航空写真	10
第3図 観音林遺跡 基本層序図	11
第4図 (a)グリット配置図(第1~第9次グリット配置図) (b)グリット配置	12
明細図	
第5図 ASC区、G9・10E壁セクション図	14
第6図 ASC区、G39・40S・E壁セクション図	15
第7図 A地区 H1·H2·Hx·W壁セクション図	17
第8図 ACF区、遺構平面図 ·······	19
第 9 図 1 号住居址平面図	21
第10図 1 号住居址、E・S壁セクション図	24
第11図 1号井戸、平面図・断面図	25
第12図 5 号住居址平面図	27
第13図 4 号住居址平面図	29
第14図 1 号異形遺構及びカマド址実測図	31
第15図 1 号土壙平面図	33
第16図 ASC区、平面図	35
第17図 2 号住居址平面図	39
第18図 3 号住居址平面図	4 0
[Ⅰ] 調査経過(第 Ⅰ ~第 🛚 次)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	41
[∐] 第9次発掘調査	47
(a)調査要項	47
(b)発掘日誌 ·····	48
(c)グリットの設定について	55
〔Ⅲ〕遺跡周辺の地学的環境	57
(1)位置、地形	57
(2)地質、層序	59
〔Ⅳ〕検出遺構	61
(a)第1~第9次発掘調査で検出した遺構	61

[表1] 青森県内出土、土器編年表(1985~1989年調査を中心として)	72
[表 2] 観音林遺跡、第 1~第 9 次発掘調査出土、土器編年表	74
[表 3] 観音林遺跡、第 9 次発掘調査検出、遺構、及び、Pit(柱穴)内出土、土器	
一覧表•••••	7 5
[表4] 観音林遺跡、第9次発掘調査出土、土器(袖珍土器、その他) 一覧表	79
[表 5] 観音林遺跡、第 9 次発掘調査出土、完形、復原土器一覧表	83
[表 6] 観音林遺跡、第 1 ~ 9 次発掘調査検出、遺構一覧表	89
[表7] 観音林遺跡、第9次発掘調査出土、石器、石器品等一覧表	90
[表8] 観音林遺跡、第9次発掘調査出土、石器総括表	100
[表9] 観音林遺跡、第9次発掘調査出土、石器、岩質分質分類表	100
[表10] 観音林遺跡、第9次発掘調査出土、骨類調査表	
(b)第 9 次発掘調査で検出した遺構·····	
(1)住居跡	
(2)カマド址	
(3)土壙	
(4)溝状遺構	
(5)異形遺構	
(6)Pit (柱穴) ······	
(7)井戸	
[V] 出土遺物 ·····	
(1)土器、土製品	
(2)石器、石製品	
(3)土師器、須恵器	
(4)陶器、磁器	
(5)骨類	
[Ⅵ]]考察	117
参考文献	
資料	
$A \cdot P \cdot L_1 \sim A \cdot P \cdot L_{88}$	
・袖珍土器・その他A・P・L 1 ∼A・B・L 3 ···································	121
・復原・完形土器 A・P・L 4 ~ A・P・L 88	124
$B \cdot P \cdot L_1 \sim B \cdot P \cdot L_{17}$	
• 遺構に伴なって出土した土器B・P・L 1~5	209
後期の土器 B · P · L 6~17 ····································	214
• 晩期の土器 X ・ P ・ L 1 ~40 ·······	226
• S · P · L 1 \sim S · P · L 13 ······	266
b · P · L 1 ······	279

[発掘スナップ] 写1



☆H1・H2・Hxの発掘スナップ

☆児童・生徒もがんばる。(H2区)





☆高・中学生の発掘実習 (H₁)

〔検出遺構〕グリットの状況 その1

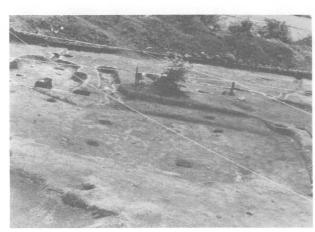
☆グリット (1~8·36~34) の完掘近 い状況。

☆人物のいる地区(第9次)の精査状況。 (1号住居址付近)





(東方より)

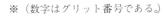


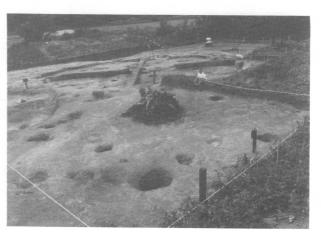
☆写真下、第8次検出の2・3号住居址。☆左上方、G43・42付近と異形遺構。

(北東より)

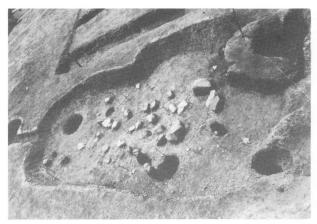
☆ (G1・2・5・6) の状況と (G36 ・35・41~38) の状況、(1号住居址が 見える。

☆ (G1・2・5・6) は、第8次検出





[検出遺構] その2



☆異形遺構の状況. 1

(東方より)

☆異形遺構の状況. 2



(南方より)



(東南より)

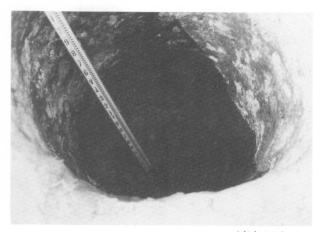
☆異形遺構の状況. 3 (内部の遺物分布の状況)



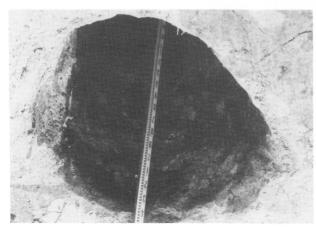
☆ 3 号井戸のようす. 1 (井戸の上面)

(西方より)

☆3 号井戸のようす. 2 (底面付近)



(南東より)



☆3号井戸のようす.3(井戸の層序の状況)

(南西上方より)

☆1号住居址の完掘直前の状況. 1



(北東より)

☆1号住居址の完掘直前の状況. 2



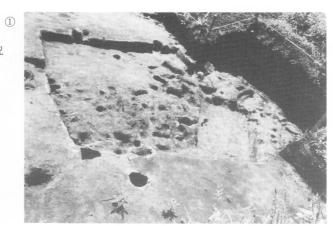
(東南より)

☆1号住居址の完掘直前の状況. 3



(北東より)

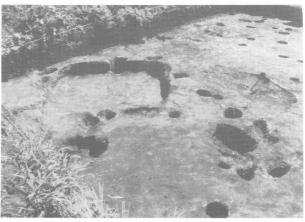




☆同上、2号住居址とG10の柱穴のよう す。(北東より写す)



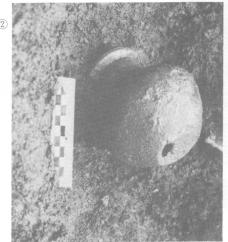
☆G9北西部検出の小形3号住居址と柱 穴群の状況(東方より写す)



☆H1N出土、注口土器



☆H2Ⅲ出土、壺形



☆H2Ⅲ出土、壺形



☆HxV出土の壺形・台付鉢形土器

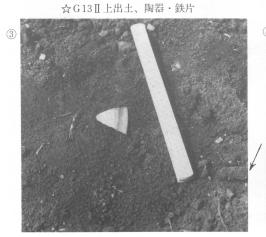


①
☆G38V出土、土師器(坏)



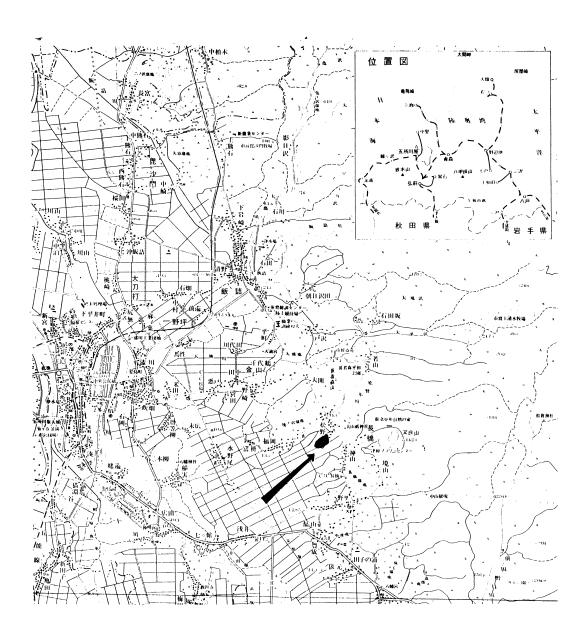


☆3号井戸内出土、土師器(坏)





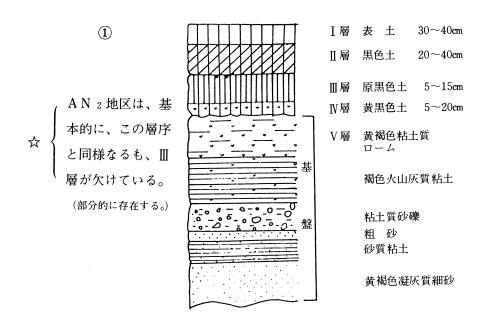
[第 1 図] 観音林遺跡付近地形図 $S = \frac{1}{50000}$



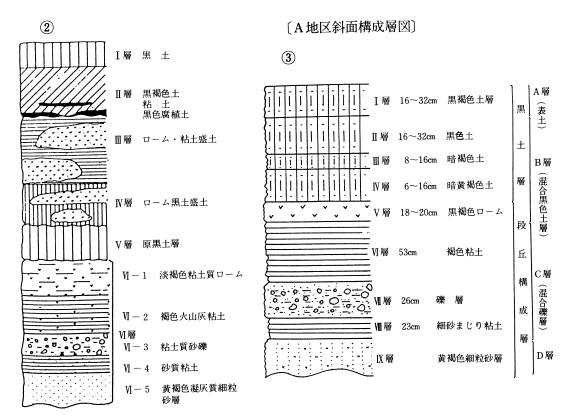
[第2図]観音林遺跡・付近航空写真 約 $\frac{1}{2000}$



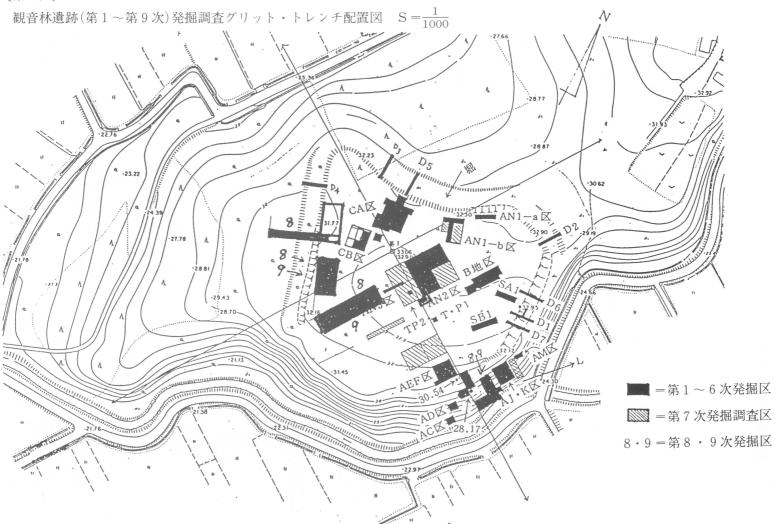
[第3図] 観音林遺跡・基本層序図



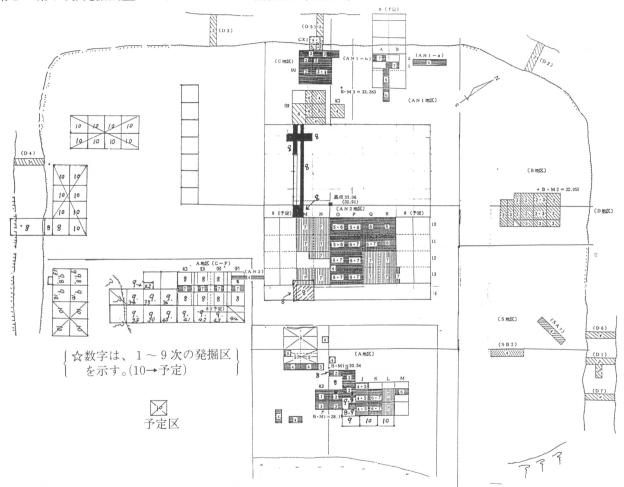
[D地区堀状遺構基本層序]



[第4図]—a

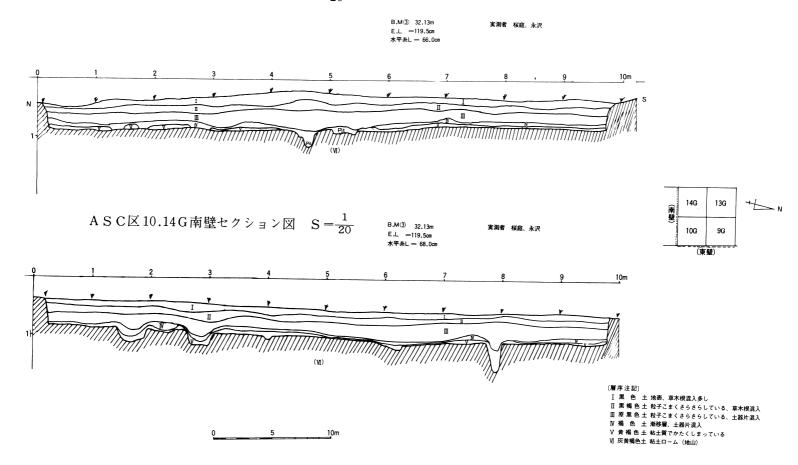


観音林遺跡(第1~第9次)発掘調査グリット・トレンチ配置図 (明細図)



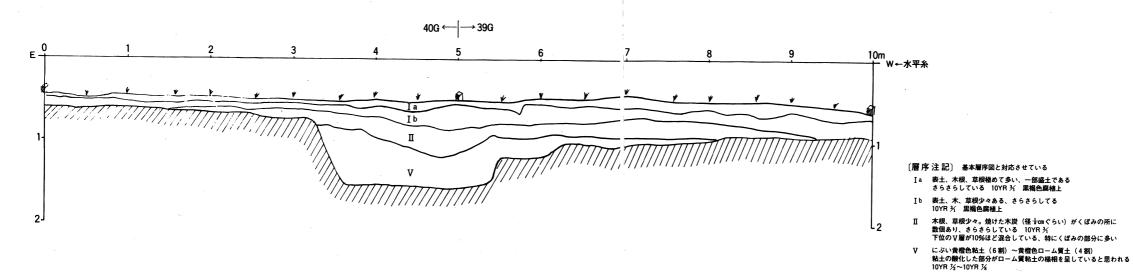
- 13 -

[第5図] ASC地区9.10G東壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$



〔第6図〕 $AC \sim F \boxtimes 39 \sim 40 G$ 南東壁セクション図 $S = \frac{1}{20}$

実測者 伊藤、新谷



 $AC\sim F区 43G北東壁セクション図 S=\frac{1}{20}$

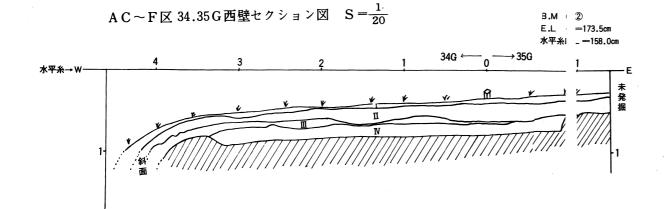
B.M ②
E.L =138.0cm
水平糸L = 58.0cm

水平糸L = 58.0cm

N

1 2 3 4 5m
S ←水平糸

[層序注記]
I 10VR ※ 照機色原植土
木根、耳 に根変しっている。ロームも混入した腐植土
木根、耳 に根変じっている。ロームも混入した腐植土
II 間層 1 0VR ※ におい黄檀色
原植土乳 記じりローム、概念である
N 7.5YR ※ 権色 粘土質ローム
木根、耳 に根あり、多孔質、水分を含む所は粘土質

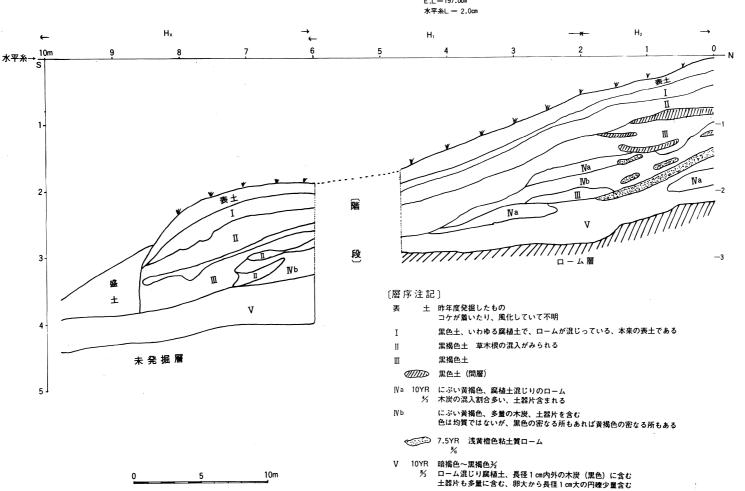


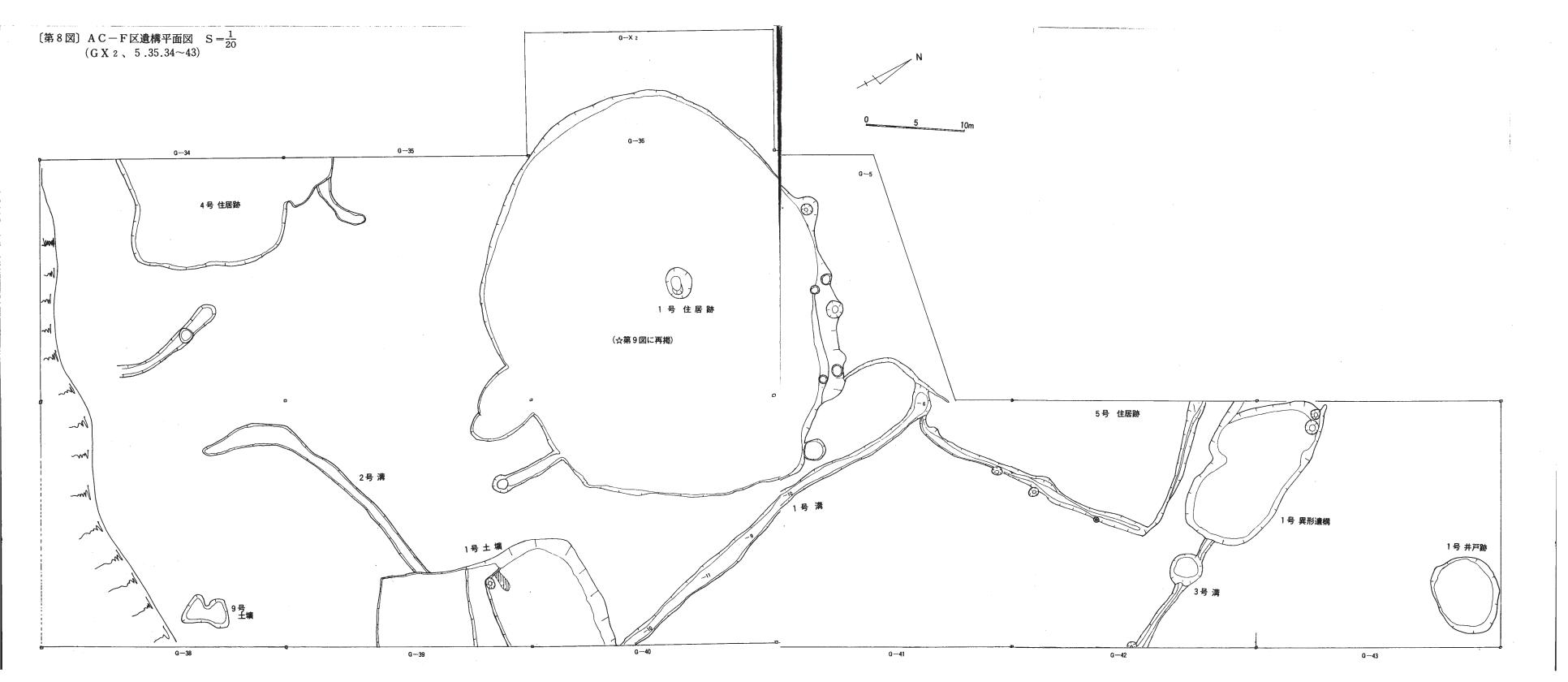
実測者 桜庭、伊藤、永沢

(層序注記)
I 黒色原植土 10YR // 表土、草木根多し
II 黒褐色腐植土 10YR // 装貫表り、森密
III 黒褐色腐植土 10YR // 草根あり、上位2層より黒い
IV 褐色ローム 10YR // 褐色ローム混じり腐植土
(ローム50%、腐植土50%) 木根あり、やわらかい、多孔質

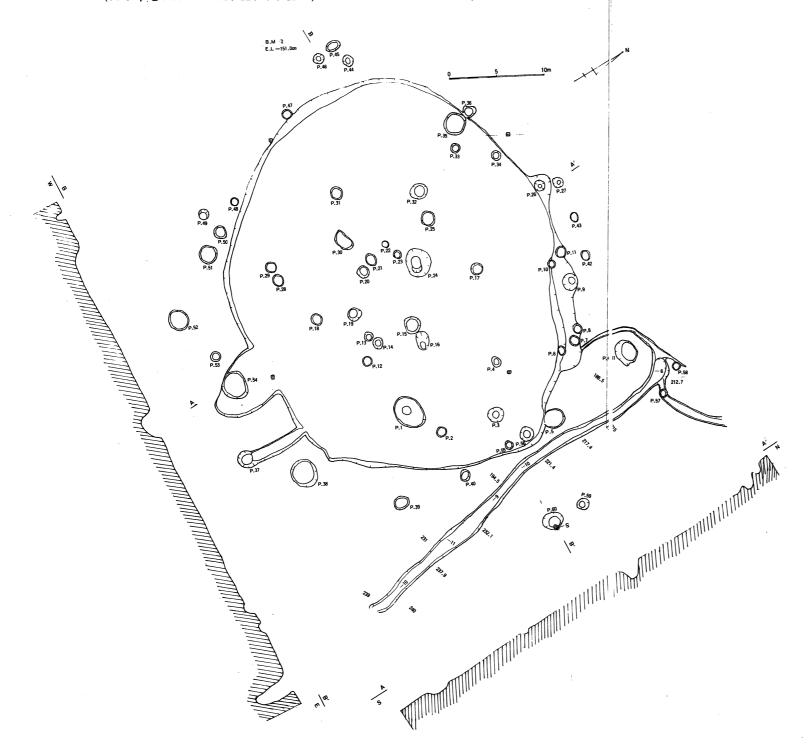
B.M @ 33.01m E.L = 197.0cm

実測者 桜庭、永沢





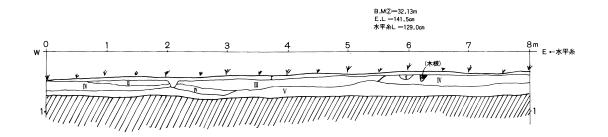
(第9図) 1号住居跡平面図 S = 1/20
 (36G中心.35.39.40.41.5.X2)

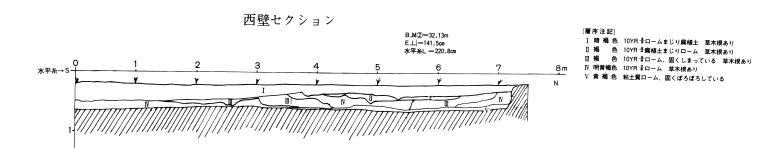


観音林遺跡(第9次) 1号住居跡ピット計測表

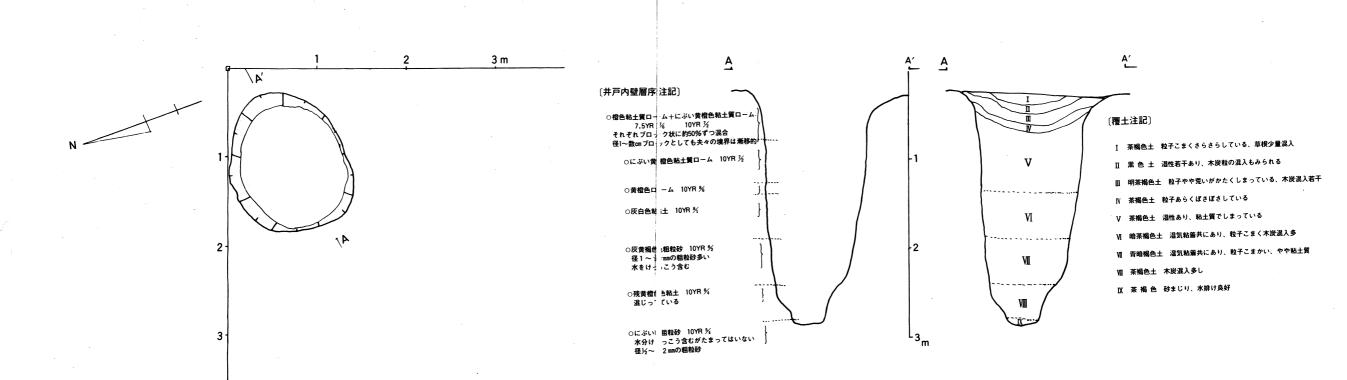
Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	長円	7 4 × 5 6	1 8	
2	円	2 1 × 2 0	1 1	
3	"	3 5 × 3 3	5 1	
4	"	2 3×1 7	1 1	
5	"	4 6 × 3 9	2 6	
6	"	1 9 × 1 5	2 2	
7	"	23×23	1 6	
8	"	2 2 × 2 0	1 1	
9	"	3 6 × 3 4	4 7	
1 0	"	1 8 × 1 6	1 6	
1 1	"	2 3 × 2 0	1 0	
1 2	"	2 1 × 2 0	1 0	
1 3	"	1 9 × 1 7	9	
1 4	"	2 3 × 2 1	9	
1 5	"	3.6×3.6	3 4	
1 6	"	3 9 × 2 5	2 1	
1 7	"	2 3 × 2 2	1 4	
1 8	"	2 3 × 2 1	1 1	
1 9	"	29×25	8	
2 0	"	2 5 × 2 5	9	
2 1	"	2 7 × 2 1	2 0	
2 2	"	1 3×1 3	2 1	
2 3	"	1 6 × 1 6	1 7	
2 4	"	6 0 × 5 3	2 8	
2 5	"	3 2 × 2 9	1 4	
2 6	"	2 3 × 2 3	4 1	
2 7	"	2 3 × 2 1	1 7	
2 8	"	2 6 × 2 3	2 0	
2 9	"	2 2 × 2 2	1 7	
3 0	不整円	4 5 × 2 6	1 0	
3 1	円	2 6 × 2 6	2 3	

3 2	円	3 6 × 3 3	3 3	
3 3			33	
	"	2 1 × 1 9	1 1	
3 4	"	2 0 × 1 9	2 0	
3 5	"	4 6 × 4 6	1 5	
3 6	不整円	2 7 × 2 5	1 0	
3 7	円	3 6 × 3 6	1 9	
3 8	"	5 8 × 5 6	1 2	
3 9	長円	3 2 × 2 7	1 3	
4 0	円	2 4 × 2 0	9	
4 1	"	5 4 × 4 5	2 6	
4 2	"	2 2 × 2 0	2 1	
4 3	"	2 0 × 2 0	1 9	
4 4	"	2 5 × 2 1	3 8	
4 5	長円	3 2 × 1 8	3 7	
4 6	円	2 5 × 2 1	1 8	
4 7	"	2 2 × 2 0	7	
4 8	"	1 5 × 1 4	1 4	
4 9	"	2 2 × 2 2	2 6	
5 0	"	2 7 × 2 6	2 0	
5 1	"	4 0 × 4 0	2 3	
5 2	"	4 6 × 4 4	1 5	
5 3	"	2 3 × 2 1	1 4	
5 4	楕円	6 2 × 5 1	1 0	
5 5	円	1 7 × 1 5	6	
5 6	"	2 9 × 2 8	6	
5 7	"	1 5 × 1 4	1 0	
5 8	"	1 6 × 1 4	1 5	
5 9	"	2 4 × 2 3	6 1	
6 0	"	4 1 × 3 2	8 7	





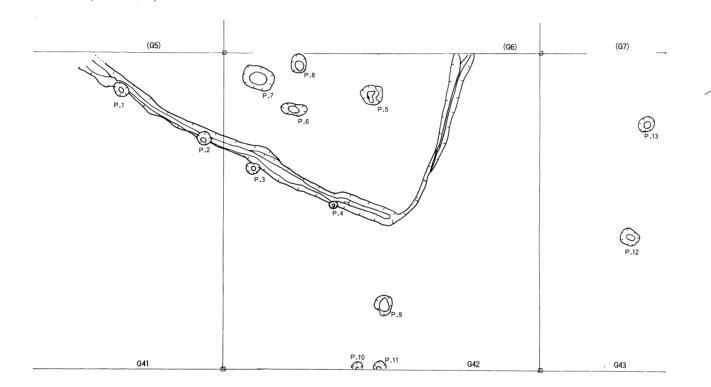


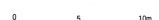


B.M② E.L=169.0cm 水平糸L=151.0cm 実測者 桜庭、永沢、伊藤

0 5 10m

BM ② E.L =166.0cm



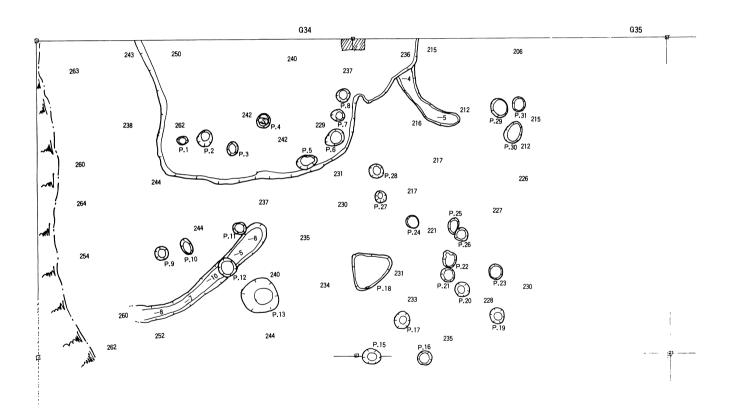


観音林遺跡(第9次) 5号住居跡ピット計測図

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備	考
1	長円	2 6 × 2 2	1 0		
2	円	2 2 × 2 2	1 2		
3	"	2 2 × 1 6	4		
4	"	1 3 × 1 0			
5	不整円	3 4 × 3 2	2 5		
6	長円	4 2 × 1 4	2 1		
7	方形	4 9 × 3 7	1 5		
8	円	3 0 × 2 4	1 6		
9	不整円	3 0 × 2 6	3 8		
1 0	円	1 4 × ?	4		
1 1	"	2 2 × ?	1 0		
1 2	"	3 0 × 2 4	1 4		
1 3	"	2 3 × 2 3	3 3		







- 29 **-**

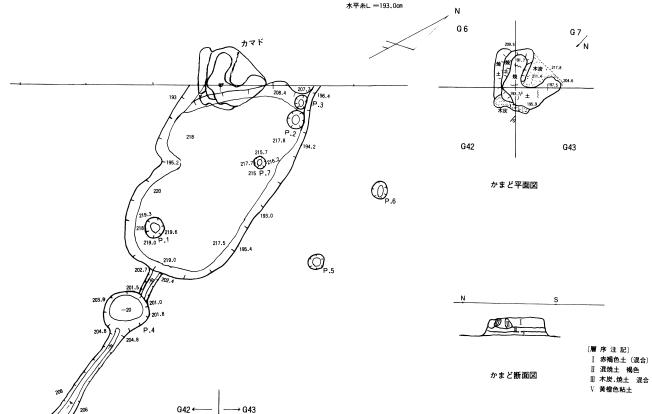
観音林遺跡 (第9次) 4号住居跡周辺ピット計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	長円	1 8 × 1 4	1 2	
2	円	2 6 × 2 3	2 2	
3	長円	2 3 × 1 4	1 4	
4	円	2 3 × 2 1	6	
5	長円	3 3 × 2 1	2 6	
6	"	$3 3 \times 2 4$	1 8	
7	円	2 2 × 1 8	1 6	
8	"	2 2 × 2 0	1 0	
9	"	2 2 × 2 2	7	
1 0	長円	2 6 × 1 4	8	
1 1	"	2 1 × 2 1	1 3	
1 2	"	$3 0 \times 3 0$	1 5	
1 3	"	6 0 × 5 4	1 5	
1 4		欠		
1 5	円	2 9 × 2 4	8	
1 6	"	2 3 × 2 3	1 6	
1 7	"	2 8 × 2 6	1 4	
1 8	方形	7 0 × 5 8	8	
1 9	円	24×22	1 5	
2 0	"	$2 3 \times 2 1$	3 0	
2 1	"	2 3 × 2 2	8	
2 2	不	2 7 × 2 2	1 1	
2 3	円	2 3 × 2 2	1 1	
2 4	"	2 1 × 2 0	1 0	
2 5	長円	2 5 × 1 4	1 0	
2 6	円	2 2 × 2 2	1 6	
2 7	"	1 8 × 1 8	1 2	
2 8	"	2 2 × 2 1	1 1	
2 9	"	3 0 × 2 6	7	
3 0	長円	3 4 × 2 7	7	
3 1	円	2 3 × 2 0	7	

31



水平糸L =193.0cm



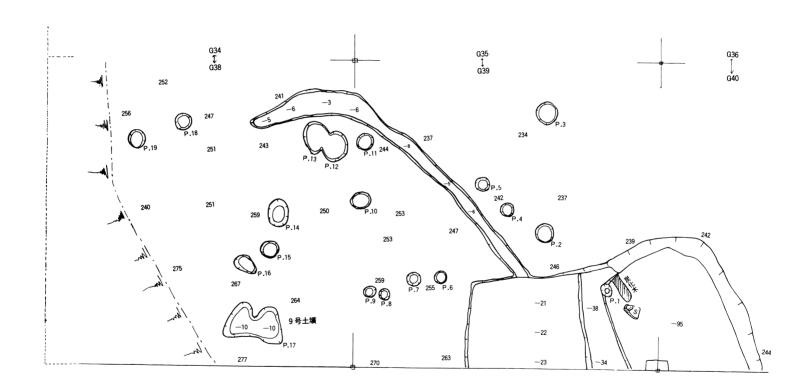
10m

観音林遺跡(第9次) 1号土塩ピット計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備	考
1	円	3 0 × 2 8	3 3		
2	"	2 6 × 2 6	4 4		
3	"	2 2 × 1 9	1 9		
4	"	6 6 × 6 2	2 0		
5	"	2 4 × 2 3	1 3		
6	"	2 3 × 2 3	3 4		
7	"	1 8 × 1 8	2 4		

- 33 -



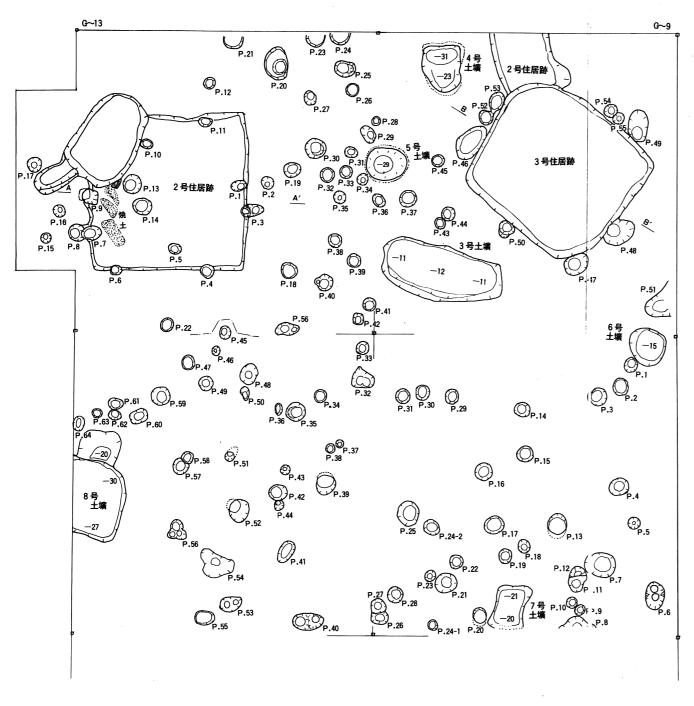


5 10m

観音林遺跡(第9次) 2号土壙ピット計測値

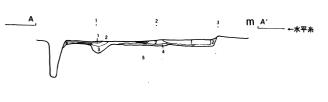
Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	楕円	2 3 × 1 4	1 0	
2	円	2 9 × 2 8	1 1	
3	"	3 5 × 3 3	1 2	
4	"	2 1 × 2 1	1 2	
5	"	2 4 × 2 4	1 3	
6	"	1 8 × 1 8	1 1	
7	"	2 2 × 2 2	1 3	
8	"	1 8 × 1 7	9	
9	"	2 1 × 1 8	9	
1 0	"	3 3 × 2 6	1 3	
1 1	"	2 9 × 2 6	6	
1 2	"	5 0 × 4 3	7	
1 3	"	5 3 × 4 2	1 0	
1 4	楕円	4 5 × 3 3	1 6	
1 5	円	3 0 × 2 8	1 7	
1 6	不整円	3 8 × 2 5	1 8	
1 7	不整円	9 5 × 5 3	1 0	9 号土壙
1 8	円	2 5 × 2 5	1 3	
1 9	"	3 0 × 2 6	5	

[第16図] AS-C区 平面図 $S = \frac{1}{20}$ $(G-9\cdot 10\cdot 13\cdot 14)$





G13 2号住居跡覆土セクション図 $S = \frac{1}{20}$



BM ③ EL =118.3cm 水平糸L =147.5cm

順序注記 1. 黒色土 草木根混入 粒子細く、水はけ良好 2. 黒色土 木炭粒若干混入 粒子やや葱く、さらさらしている 3. 褐色土 粒子こまく、さらさらしている 4. 茶褐色上 黄色粘土ブロック混入 5. 灰黄色粘土 (ベース)

G 9 3 号住居跡覆土セクション図 $S = \frac{1}{20}$



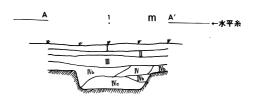
BM ③ EL =118.3cm 水平糸L =157.5cm

層序注記 1. 黒色土 草木根混入多 粒子ごまかく、水はけ良好 2. 茶橋色土 銀指大の橋色ブロック混入 3. 黄褐色土

新土質のブロック混入多い 4. 橘色土 砂質を粒子荒い、水はけ良好

G14 8 号土壙 覆土セクション図 $S = \frac{1}{20}$ (西壁)

BM = ③ EL =119.5cm 水平糸L =92.5cm



層序注記I 黒色土 表土 草木根混入多
I 黒褐色土 数子こまかくさらさらしている、草木根混入
II 原葉色土 粒子こまかくさらさらしている、土器片混入
IV 褐色土 親指大の砂質ブロック混入 †
IVb ・ ・ ・ ・ ・ +以上

0 5 10m

観音林遺跡 (第9次) G9、13ピット計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	長円	2 5 × 1 4	6 0	
2	円	2 2 × 2 0	1 3	
3	円	3 8 × 2 0	15, 10	段あり
4	円	2 2 × 2 2	2 2	
5	"	2 2 × 1 7	1 0	
6	"	1 6 × 1 6	2 0	
7	長	3 4 × 2 3	1 1	
8	円	2 8 × 2 8	2 0	
9	方	2 8 × 2 4	6 2	
1 0	円	2 0 × 1 6	1 2	
1 1	長	2 2 × 1 6	1 2	
1 2	円	1 8 × 1 8	1 8	
1 3	"	3 1 × 3 1	2 4	
1 4	"	3 1 × 2 8	1 7	
1 5	"	1 8 × 1 8	1 8	
1 6	"	1 9 × 1 8	9	
1 7	"	23×23	1 1	
1 8	"	2.6×2.6	9	
1 9	"	26×24	1 4	
2 0	円	5 3 × 4 0	3 7	段あり
2 1	円	3 2 × ?	1 6	
2 2	長円	2 4 × 1 8	2 0	
2 3	円	3 2 × ?	1 0	
2 4	"	3 2 × ?	2 8	
2 5	長円	3 6 × 2 6	1 9	
2 6	円	2 2 × 2 2	3.0	
2 7	"	25×20	1 5	
2 8	"	1 4×1 3	1 6	
2 9	不整円	2 7 × 2 0	3 2	
3 0	円	3 4 × 3 4	2 1	
3 1	"	2 2 × 2 0	1 5	

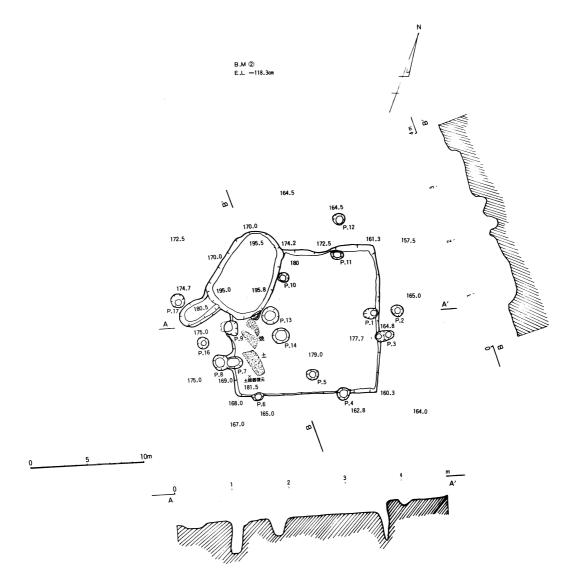
3 2	円	0.4.4.0.4	1.0	
	' '	$2 4 \times 2 4$	1 6	
3 3	"	2 1 × 2 1	7	
3 4	"	1 8 × 1 8	1 1	
3 5	"	2 0 × 2 0	9	
3 6	長円	2 4 × 1 8	1 4	
3 7	円	2 9 × 2 8	2 2	
3 8	"	2 3 × 2 2	13.	
3 9	"	2 1 × 2 1	1 4	
4 0	不整円	$3 0 \times 2 7$	1 4	
4 1	円	2 2 × 2 2	5	
4 2	方	1 9 × 1 8	6	
4 3	円	1 9 × 1 8	1 2	
4 4	"	2 2 × 2 1	1 8	
4 5	"	2 0 × 2 0	1 5	
4 6	長円	6 6 × 4 0	1 1	
4 7	"	4 3 × 3 6	2 7	
4 8	"	5 4 × 3 8	9 7	
4 9	"	5 4 × 3 3	2 0	
5 0	不整円	2 6 × 2 6	2 0	
5 1	"	4 3 × ?	3 0	
5 2	円	2 5 × 2 4	1 5	
5 3	長円	3 3 × 2 5	2 6	
5 4	円	2 2 × 2 2	8	
5 5	"	1 7 × 1 7	1 2	
5 6	不整円	4 0 × 2 0	8	

観音林遺跡 (第 9 次) G10、14ピット計測値

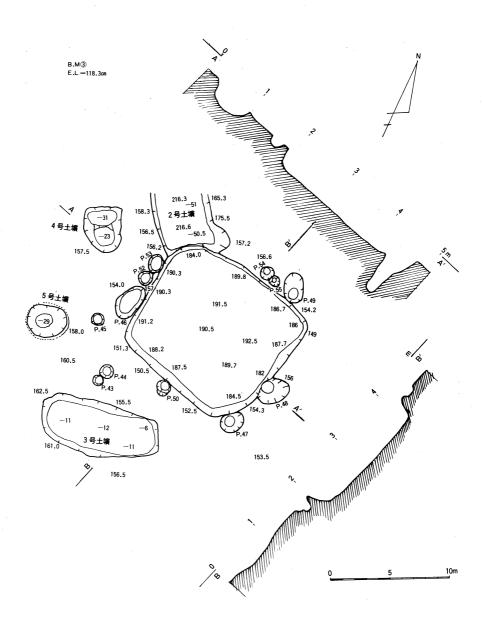
Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	2 3 × 2 2	2 3	
2	"	2 8 × 2 4	6	
3	"	2 8 × 2 8	1 3	
4	"	3 2 × 3 0	3 5	
5	"	2 0 × 2 0	7	
6	長円	4 5 × 3 1	1 7	
7	円	4 6 × 4 0	1 5	
8	不整円	5 4 × ?	2 7	
9	円	1 8 × 1 7	6	
1 0	"	1 6 × 1 6	1 3	
1 1	不整円	2 8 × 2 4	2 0	
1 2	"	2 8 × 1 3	4 1	
1 3	円	3 5 × 3 2	2 7	
1 4	"	2 6 × 2 6	1 1	
1 5	"	2 6 × 2 5	1 6	
1 6	"	2 9 × 2 8	1 6	
1 7	"	3 3 × 3 0	3 3	
1 8	"	2 2 × 2 0	1 1	
1 9	"	2 4 × 2 0	2 1	
2 0	"	2 5 × 2 2	2 1	
2 1	"	3 5 × 3 2	6 6	
2 2	"	2 2 × 2 2	2 7	
2 3	"	2 0 × 1 8	1 1	
24-1	"	1 6 × 1 6	8	
24-2	"	2 7 × 2 4	2 3	
2 5	"	4 0 × 2 8	2 5	
2 6	"	2 8 × 2 6	1 3	
2 7	"	2 6 × 2 6	1 1	
2 8	"	2 5 × 2 5	2 6	
2 9	"	2 3 × 2 2	1 2	
3 0	"	2 3 × 2 3	1 5	

31 円 23×22 12 32 不整円 36×36 21 33 円 20×20 23 34					
33 円 20×20 23 34	3 1	円	2 3 × 2 2	1 2	
34	3 2	不整円	3 6 × 3 6	2 1	
35	3 3	円	2 0 × 2 0	2 3	
36 長円 21×11 11 37 円 13×12 6 38	3 4	"	2 1 × 2 0	8	
37 円 13×12 6 38	3 5	"	3 0 × 3 0	3 4	
38	3 6	長円	2 1 × 1 1	1 1	
39	3 7	円	1 3×1 2	6	
40 不整円 52×26 10 41 楕円 38×24 9 42 円 28×24 20 43 ° 17×16 11 44 ° 18×16 18 45 ° 20×18 20 46 ° 16×15 5 47 ° 22×22 22 48 長円 34×28 15 49 円 25×24 26 50 長円 24×14 20 51 円 15×15 19 52 ° 37×34 71 53 長円 36×23 10 54 不整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 ° 20×20 12 59 ° 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 ° 23×18 8 62 ° 21×16 10	3 8	"	1.6×1.6	6	
41 楕円 38×24 9 42 円 28×24 20 43	3 9	"	3 1 × 3 0	5 5	
42 円 28×24 20 43	4 0	不整円	5 2 × 2 6	1 0	
43	4 1	楕円	3 8 × 2 4	9	
44	4 2	円	2 8 × 2 4	2 0	
45	4 3	"	1 7 × 1 6	1 1	
46	4 4	"	1 8 × 1 6	1 8	
47	4 5	"	2 0 × 1 8	2 0	
48 長円 34×28 15 49 円 25×24 26 50 長円 24×14 20 51 円 15×15 19 52 ッ 37×34 71 53 長円 36×23 10 54 不整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 ッ 20×20 12 59 ッ 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 ッ 23×18 8 62 ッ 21×16 10	4 6	"	1 6 × 1 5	5	
49 円 25×24 26 50 長円 24×14 20 51 円 15×15 19 52 37×34 71 53 長円 36×23 10 54 7整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 7整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 20×20 12 59 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 23×18 8 62 21×16 10	4 7	"	2 2 × 2 2	2 2	
50 長円 24×14 20 51 円 15×15 19 52 % 37×34 71 53 長円 36×23 10 54 不整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 % 20×20 12 59 % 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 % 23×18 8 62 % 21×16 10	4 8	長円	3 4 × 2 8	1 5	
51 円 15×15 19 52 % 37×34 71 53 長円 36×23 10 54 不整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 % 20×20 12 59 % 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 % 23×18 8 62 % 21×16 10	4 9	円	2 5 × 2 4	2 6	
52 " 37×34 71 53 長円 36×23 10 54 不整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 " 20×20 12 59 " 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 " 23×18 8 62 " 21×16 10	5 0	長円	2 4 × 1 4	2 0	
53 長円 36×23 10 54 不整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 20×20 12 59 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 23×18 8 62 21×16 10	5 1	円	1 5 × 1 5	1 9	
54 不整円 58×36 15 55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 20×20 12 59 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 23×18 8 62 21×16 10	5 2	"	3 7 × 3 4	7 1	
55 長円 33×22 49 56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 " 20×20 12 59 " 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 " 23×18 8 62 " 21×16 10	5 3	長円	3 6 × 2 3	1 0	
56 不整円 32×30 21 57 円 24×24 28 58 20×20 12 59 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 23×18 8 62 21×16 10	5 4	不整円	5 8 × 3 6	1 5	
57 円 24×24 28 58 " 20×20 12 59 " 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 " 23×18 8 62 " 21×16 10	5 5	長円	3 3 × 2 2	4 9	
58 " 20×20 12 59 " 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 " 23×18 8 62 " 21×16 10	5 6	不整円	3 2 × 3 0	2 1	
59 " 31×31 13 60 長円 30×20 16 61 " 23×18 8 62 " 21×16 10	5 7	円	2 4 × 2 4	2 8	
60 長円 30×20 16 61 * 23×18 8 62 * 21×16 10	5 8	"	2 0 × 2 0	1 2	i
6 1	5 9	"	3 1 × 3 1	1 3	
6 2	6 0	長円	3 0 × 2 0	1 6	
	6 1	"	2 3 × 1 8	8	
6 3 円 1 6×1 6 8	6 2	"	2 1 × 1 6	1 0	
	6 3	円	1 6 × 1 6	8	
6 4 長円 2 4×19 11	6 4	長円	2 4 × 1 9	1 1	

[第17図] G13.2 号住居跡平面図 $S = \frac{1}{20}$



[第18図] G 9.3 号住居跡平面図 $S = \frac{1}{20}$



[I] 調査経過

(1) 第1次~第8次発掘調査に至るまでの経過

●観音林遺跡は、昭和49年度に第一次試掘調査が行なわれ、わずか4m×4mの試掘区 (A地区)から、縄文時代晩期の土器群が大量に出土した。(1.5㎡拡張区あり)

これらの土器は、大洞C2式土器が主体で当遺跡が縄文時代晩期の一大遺跡であることが判明した。

- ・その後、昭和58年度になって、地主である長尾良治氏の御好意により、近い将来において開発計画があるとの連絡があったため、五所川原市教育委員会では、発掘調査の計画を 策定し、第二次発掘調査を実施した。
- 第二次発掘調査では、遺跡の所在する舌状台地を、A地区(南斜面)、B地区(遺跡の東部)、C地区(遺跡の北部)、D地区(掘状遺構)、中央区(台地の中央部)の各区に分け、A地区、B地区、C地区およびD地区の側辺を調査区として選定し発掘調査した。

すなわち、遺跡の中央部を残し、東・南・北の三側辺を調査することにした。

●第二次発掘調査では延べ163.8㎡ を発掘したのであるが、第二次調査における各地区の状況を簡略に述べる。

[A地区] →この地区は、縄文時代晩期の遺物が出土する地区である。出土土器は大洞 C 2 式土器を中心に、晩期 B・C, C 1, C 2, A式土器が出土した。

[B地区] →この地区では、土壙群が出土した。土壙群のうち1基は縄文時代晩期のもので、他の8基は縄文時代後期のものである。

これらの土壙内外から獣骨片 (ニホンシカ・イノシシ等) や鳥骨 (ガンカモ) が出土し、いずれも焼骨であることが注目される。

[C地区] →この地区からは、カマド址が検出され、さらに住居址壁面の一部を検出した。すなわち、この地区では、「東北北部の土師器型式」第二型式の土師器を伴う歴史時代(平安期)の遺構が出土した地区である。

[D地区] →この地区は、既述したように、空掘の状態を調査するための地区である。

D地区では、 D_1 トレンチを一本($1 \text{ m} \times 12 \text{ m}$)掘を切って東西に掘る、その結果堀の形態が特異なため、明年度さらにトレンチを入れ確認することにする。

以上が第二次調査の概要である。

●第三次調査は、昭和59年度に252㎡を発掘調査した。その概要を述べるとつぎのとおりである。

[A地区]→この地区は、第一次・第二次・第三次調査をとおして縄文時代晩期の遺物が多量に出土する。第三次調査においても同様であるが包含層が約3mもあって、これだけの厚さを持つ包含層がある以上、台地上の平地に縄文時代晩期の住居址が存在する可能性が予測される。

[B地区]→ここでは、小土塁に囲まれた5角形に近い遺構が出土した。この土塁は、 第二次調査の項で述べた土壙群を囲んで出土した。また土師器が出土する小土壙1基を検 出する。

[C地区]→この地区では、第二次調査で検出した、カマドを備えた一号住居址(平安時代後葉)の西半分を発掘するも、 I・Ⅱ層が深く、東半分は明年度に発掘することにする。

その結果を検討すると観音林遺跡に所在する空堀は、「箱型堀」であると結論づけた。

●第四次発掘調査は、昭和60年度に実施、発掘面積は212㎡である。

第一次~第四次調査は予備調査としての最終段階である。

[A地区] →さきに述べたとおり、この地区は南斜面で遺跡の中央部南端に位置する。 包含層は深く、第四次調査では、約1 m の深さまで発掘した。(Ⅰ・Ⅱ層→表土、黒土の上半)

この II 層の黒土は、二次堆積層であるが、縄文時代前期・中期・後期・晩期、土師器、 須恵器が混在する。

すなわち、晩期のものが層序の下位に、後期のものが上位に多く、さらに土師器・須恵器、前、中期の土器が混入する状態である。

しかしながら、主体を占めるものは、縄文時代晩期大洞C2式土器である。(正常な地層では、古いものが下位に、新しいものは上層に包含するのが普通である。)

このことから、台地の中央部は平担地をなしており、台地中央部を削平して、その黒土を南斜面・北斜面に二次的に移動させたこと、および遺跡の南端は急斜面をなしていたことによるものと考えられる。このことは、C地区の層序からも推定でき、中央部に黒土層

が殆んどなく、V層に30~40cmの深さで達することからも裏付けられる。

[C地区]→この地区では、歴史時代の井戸を1基、3号住居址のカマドと壁面の一部、および、2号住居址の柱穴と溝状遺構を検出したが完掘せず。

[中央区] →予備調査の最終年度として中央区の一部を発掘した。すなわち、AN1トレンチ、SA1,SB1トレンチである。 (2 m ×10m)

また、舌状台地の中央部に南から北へ、T・P₁, TP₂, TP₃ (2m×2m) を設定発掘した。

その結果、SA1, SB1は遺物の出土はなく、AN1トレンチは、縄文時代後期の遺物が多量に出土することが確認された。

また、T・P3において遺構が存在することが確認できたのである。

●第五次発掘調査は、以上第一次~第四次調査の予備調査を受けて、本格的な調査の第一年次である。五所川原市教育委員会では、この本調査を昭和63年まで続ける計画であるが、3ヶ年では全面調査は無理であろう。第五次~第六次発掘調査の推移を検討しながら、第2期発掘計画を策定する必要があろう。

以下、昭和61年度に実施した第五次発掘調査の状況を簡略に述べる。

第五次発掘調査(本格的調査第一年次)では、計406m²を発掘調査した。

本格的発掘調査3ヶ年計画の第一年目であるため、第一〜第四次調査にわたる試掘調査と予備調査の結果について再検討を加え、あわせて疑問として残った問題点を解明する必要があったのである。

いま一つは、予備調査においては意識的に台地中央部をさけ、遺跡の北・東・南の三方向より遺跡の周辺地区を調査対象として発掘を進めて来たのであるが、本年度からは遺跡の中心部に発掘区を設定する手がかりを把握する必要があった。

すなわち、第一〜第四次調査の総括と本格的調査への第一年度としての発掘区を選定する必要があったのである。

そのため、第四次で発掘した、A地区のE 5 ・ F 5 J ・ K グリット。C地区ではA グリット、X 1 グリット、B グリット。遺跡の中央では、A N 1 ・ A N 3 ・ S A 1 ・ S B 1 のトレンチ、およびT ・ P 1 ・ T ・ P 2 ・ T ・ P 3 の各区を対象とし、これらの発掘区において検出した遺構の完掘とその究明が必要であった。

なお、このうち、SA1・SB1・T・P1・TP2には、遺構・遺物等の出土はなく

第五次調査では除外した。

他の各区では、遺物・遺構の存在を認めたので、このうち、C地区A・Bグリット、T・P3 を含めた A N2 グリット、A地区の J・Kグリット、E5 ・F5 の各グリットを設定して発掘した。

その結果、C地区では、住居址1・2号・1号井戸、およびAN2地区では柱穴群と土 壙、A地区では、大量の後期・晩期の土器群が混合層に含まれて出土した。

以上の結果を得たのであるが、A地区のJ・Kグリットの包含層は厚く、さらに掘り下げが必要であった。また、A地区のE 5 ・F 5 グリットには柱穴群が検出され遺構の存在が予測できた。さらにA N 2 地区では柱穴、土壙が認められたので拡張して調査する必要があったのである。

●第六次発掘調査は、昭和62年度に実施した。第六次発掘は、第一期発掘調査の2年目である。発掘面積は481㎡で、遺跡の中心部に主力を置くことにした。

すなわち、 [A地区] → E 5 · M 1 · M 2 , J 1 , J 2 , K 2 。 [A N 2 地区] → O · P · Q · R ~ 10 ~ 13、および、 [A N 1 b 地区] → X 1 , X 2 , Y 1 , Y 2 の各区である。 既述のように、この調査では、遺跡の中央部である [A N 2 地区] に主力をおき、他の各区は、補強的な意図を持って発掘を進めた。

この第6次発掘調査で検出した遺構は下記のとおりである。

- ① 土 塘 群-AN 2 地区→32基
- ② 住 居 址 A N 2 地区 → 3 · 4 号住居址
- ③ カマド址-AN2地区→5基
- ④ 柱 穴 群-AN 2 地区→240箇所(但し土壙と重複するものあり。) また、出土した遺物の主なものを列挙すると下記のとおりである。
- ① 土製品→土偶・三角形土製品、異形土器。
- ② 土器類→円筒下層, 上層、十腰内 I・II、大洞 B・C, C₁・C₂・C₂ − A (仮称) A、の各型式、土師器・須恵器。
- ③ その他→鉄器、骨類等。
- ④ 石製品・石器→278点

これらの遺構・出土品等については、第1~第6次発掘調査報告書に述べてあるので詳細は省略する。

- ●第七次発掘調査は、昭和63年度に実施した。発掘面積は、444㎡である。その内訳は下記のとおりである。
- A地区→ K₁, K₂ (4 m × 8 m = 32m²) L₁, L₂ (4 m × 8 m = 32m²)
- A $th \times C \sim F$ $(2 \text{ m} \times 3 \text{ m}, 2 \text{ m} \times 2 \text{ m}, 2 \text{ m} \times 2 \text{ m}, 2 \text{ m} \times 3 \text{ m}) = 20\text{m}^2$
- AN 2 地区→M_{10,11,12,13}······ (5 m × 5 m , 5 m × 5 m , 5 m × 5 m) =75m²
- AN 2 地区→N_{10,11,12,13}······ (5 m × 5 m , 5 m × 5 m , 2 m × 3 m , 5 m × 5 m) = 81 m²
- A N 2 地区→Q₁₁····· (5 m × 5 m) = 25m²
- AN 2 地区→O_{12,13}, P_{12,13}······ (5 m × 5 m , 5 m × 5 m , 5 m × 5 m) =100m²
- AN 2 地区→R12,13, S13······ (5 m×5 m, 5 m×5 m, 1 m×5 m) =55m²
- A N 1 b 地区→A · B····· (2 m × 4 m , 2 m × 4 m) = 16m²
- 発掘区外→YZ (2m×4m) = 8 m²

第六次発掘調査以来、遺跡の中央部であるAN2地区に主力をおき、あわせて、遺跡の 西半分を明年度より発掘する計画のため、その手がかりを把握する意図で、グリット・トレンチを設定した。

- ・この第七次発掘調査で検出した遺構については、 [N] に述べてあるので省略する。 この第七次発掘調査で、遺跡の東半分の調査は、補強調査を残して終了した。第八次発掘調査からは、遺跡の西半分へ主力をおいて発掘する予定である。(但し、A地区の南斜面、AH1~3, A地区 i・J・K・Lグリットの南端は継続する。)
- ●第八次発掘調査は、平成元年 7 月26日~ 8 月24日の期間に実施した。発掘面積は、487.6 平方メートルである。

第八次発掘調査では、遺跡の中央部より西南の地区に重点をおいて発掘した。即ち、AC~F区、及び、ASC区である。また、遺跡の南斜面(A地区)では、H1、H2、H3の各グリットを設定して発掘することにした。この第八次発掘調査で検出した遺構は、次のとおりである。

*住居跡 7棟 *土壙 3基、堀 1、柱穴約300、

第一~八次までの発掘調査、及び第九次発掘調査で検出した各遺構については、表6に示してあるので、この項では省略する。また、出土した土器群については、表2に示してある。

*第八次発掘調査では、遺跡の西半分に調査の手を加える最初の発掘であった。即ち、第 九次の発掘調査は、その続きである。

〔Ⅱ〕 第九次発掘調査

(a) 調査要項

※調査目的 個人の所有地で立木の伐採や土取り、及び、開畑によって消滅の恐れがある ため事前に発掘調査を実施し、遺物と記録の保存をはかるための緊急発掘調査である。

- ★調査期間 平成2年7月23日~8月24日(実働21日)
- *整理期間 平成2年8月25日~平成3年3月31日
- *遺跡名 「観音林遺跡」
- * 所在地 青森県五所川原市大字松野木字花笠81番地
- *調査面積 362平方m
- *調査方法 グリット法による。
- *発掘主体者 五所川原市教育委員会

代表 教育長 釜 萢 裕

*主管課 五所川原市教育委員会 社会教育課

課 長 時田武則

課長補佐 蒔 田 弘 次

副主幹 上見 明

係 長 太田弘志

主 杳 小田桐 由美子

*発掘担当者 日本考古学協会会員 新 谷 雄 蔵

*調 查 員 北奥文化研究会会員 永 沢 秀 夫

★調 杳 員 北奥文化研究会会員 小 山 英 治

*調 査 員 (地学担当) 伊藤昭雄

*調査員(復原担当)

青森県埋蔵文化財パトロール指導員

浅 木 全 一

*整理担当員 荒谷順子 葛西みつ

*遺物保管担当(自治公社) 山内清松

- (b) 発掘日誌
- * 7月23日(月) 快晴

発掘第1日目 本日の作業は次の通りである。

- ②、H¹、H²グリットの草刈りと杭打ちを行なう。⑥、AC~F区の草刈りと、その拡張区の草刈り、及び、Xグリットの杭打ちも合わせて行なう。⑥、ASC区の9~16グリットの草刈り、テープ張りを実施する。
- ●AN4区グリット17~19、及び、グリット21~23の草刈り、杭打ち、テープ張りも実施する。(但し、このグリットは発掘せず)
- ●、AN2区-グリット25~32は、機会を見て草刈り杭打ちを行なうことにする。●、本日ベルトコンベアの搬入あり、必要な器材を揃えて明日の準備をする。

発掘予定区は、次の通りである。

- 1) A区H₁、H₂、Hxグリット
- 2) ASC区9·10·13·14·グリット
- 3) AC~F区34·35·36·38~43グリット
- * 7月24日(火) 曇後雷雨

発掘第2日目、本日の作業は、次の通りである。

Hı、H₂の掘り下げ開始、壺形土器、石鏃、皿形土器出土。

- *AC〜F区グリット1〜8の整理を実施、(昨年の発掘区)また、AC〜F区グリット34〜43の荒掘り実施、また、AC〜F区のG・Hの計測を実施、本日の眼高―BM2=32、13mを計測する。また、BM2=28、96m 眼高53.6cm。更に、BM4=33.01m。
- *本日の出土遺物 石鏃、壺形土器、皿形土器、グリット43で、井戸一基検出する。
 - * 7月25日(水) 曇後雨

発掘第3日目 午前8時30分作業開始、本日の作業は次の通りである。

- 1) H₁~H₂の掘り下げ続行
- 2) A C~F区グリット43は、精査の段階、41~42の荒掘り実施
- 3) グリット1~7の整理、及びM14グリット及びTP1の整理を実施、また、グリット8の再検討(混合層の検討)

4) グリット 5 の円形落ち込みと、グリット36、40、41の荒掘りに注意が必要である。 遺構を認める。 BM1 = EL150.0cm BM2 = EL142.0cm

雨のため午後の作業は中止する。

* 7月26日(木) 雲

発掘第4日目、本日の作業は、次の通りである。

1) 雨のため、H₁、H₂グリットの掘り下げは中止とする。 2) AC~F区のX₂グリットの荒掘りを実施する。 3) G_{42、41、40} の荒掘りを続行する。 4) 発掘区の乾燥を待って午後より発掘開始、昨日と同じ配置とする。 5) G₄₃で検出した3号井戸の掘り下げを始める。(3本目の井戸)

BM 2 = EL169,0cm・6) G43・42・41は整理の段階にはいる。1 号住居跡及びAC~ F区の42Gにおいて大形 Pit 2 基を検出し、その半分を掘り下げる。 7) Hi、H2 Gは、第3層を掘り下げる。このグリットは包含層は、約3m程あるもようである。

*本日の出土遺物 土師器 唐津 青磁 大洞A式台付土器。

* 7月27日(金) 曇

発掘第5日目、本日の作業は次の通りである。1) G43~40、35、39の荒掘りを始める。 2) GH1~GH2の掘り下げ続行、土器の出土多し、 3) 1号住居跡の精査と整理を 終わる。 4) G43~41は、精査と整理の段階にはいる。 5) GX1、X2の拡張区を 設定する。

*本日の出土遺物 垂飾品(土錘状) 瓦質土器 線刻石 縄文土器 土師器

* 7月30日(月) 晴

発掘第6日目 本日の作業は次の通りである。 1) CH1、H2の掘り下げ実施、(第3層を掘り下げる。) 2) AC~F区のG40~36の荒掘り続行、 3) 3号井戸の掘り下げ終了する。 3) AC~F区のG38、35の荒掘りも続行、

BM2 = EL173.5cm

BM1 = EL150.3cm

- *明日より大形円形住居跡の掘り下げ実施の予定。
- *本日の出土遺物 壺形土器、浅鉢、甕、土師器、十腰内 Ⅰ 式土器。
 - *7月31日(火) 晴
- *午前8:30分作業開始、本日の作業は次の通りである。

GH1、GH2は、第3層掘り下げ実施、大洞C2式壺形土器出土、

AC~F区検出の3号井戸実測開始、G35~36、39、40にわたる大形円形住居跡の荒掘り終了、午後から精査にかかる。またG34の荒掘り終了、整理にかかる。

1号土壙の精査終了、実測は後日とする。

 $BM_2 = EL169.0cm$

- *GH1~H2は出土土器多く、晩期および十腰内1式土器の出土が多い。
- *本日の出土遺物一壺形土器 石錘 朱塗りの自然石 染付け磁器、なお、大形円形住居 跡の床面より主柱穴、焼土、更に、小ピットも検出する。
 - *8月1日(水) 晴

GH1~H2は昨日に続き掘り下げ続行、(発掘第8日目)

*A地区のGH2南側に、4X5mのグリットを設定し、HXとする。ASC区のG10、 14の荒掘りを開始する。

BM $_2 = 172.7 \text{cm}$ BM $_3 = \text{E L}112.9 \text{cm}$

また、G34、35、38、39の整理に入る。更に、ASC区のGHをBM3で計測する。 (BM4=32、173m)

- *本日の出土遺物 ミニチュア土器、タタキ石 削器
 - *8月2日(木) 晴 発掘第9日目

午前8時30分作業開始、本日の作業は、次の通りである。

- 1) X 2 35、36、40にわたる大形円形住居跡の精査を続行する。
- 2) GH1 H2の3~5層の掘り下げ続行、また、ASC区のG9、10、13、14の精査をおこなう。1号方形住居跡、及び、2号隅丸方形住居跡を検出し、精査にかかる。

BM1=EL150.7cm BM2=EL172.0cm BM3=EL128.5cm *本日の出土遺物一前期 d 1 土師器 須恵器 石斧 石鏃 小型石槍

*8月3日(金) 晴

*発掘第10日目、本日の作業は次の通りである。GH1、H2の掘り下げ続行、ASC区は、G9、13、10、14の精査と整理を行なう。

AC~F区は、雨が乾くまで作業を中止する。 *本日よりHX区(4×5m)の荒掘りにかかる。また、本日でベルトコンベアを返還する。

 $BM_1 = EL153.0cm$

BM $_{3} = E L 127.2cm$

- *また、ASC区のG13S壁より南へEW5XWS1mの拡張区を設定し発掘にかかる。 小型住居跡が、SEW壁に伸びているためである。
- *本日の出土遺物―土師器 縄文土器 (晩期) 須恵器

*8月4日(土) 晴

午前8時30分 作業開始 本日の作業は次の通りである。

GH1~H2は掘り下げ続行、HX区は本日より出土遺物がある模様である。ASC区は遺構の精査にはいる。小型住居跡—2号、3号の精査を行なう。まだ、AC~F区は、乾燥が強く、雨のしめりを待って、精査と実測図を作成する。GHX区は、また、包含層に到達せず、二次堆積層からの出土である。

BM = EL115cm

 $BM_1 = EL65.9m$

- *本日の出土遺物一朱塗り腕輪残欠、(十腰内1式)その他。
 - ***** 8月6日(月) 晴 発掘第12日目

本日の作業は、次の通りである。

1) GH1~H2、HXは掘り下げ実施、ASC区は精査、AC~F区は水系糸張りの準備をする。 (大形住居跡の実測のため)

BM $_{3} = EL118.3cm$

 $BM_1 = EL65.9cm$

BM = EL176.0cm

*BM1 = 28.96m

*本日の出土遺物一GH1~H2、HX、より鉢形土器3個、土偶脚部、穴あき自然石、

及び、軽石、その他。

- *8月8日(水) 晴 発掘第13日目
- *本日の作業は、次の通りである。
- 1) ASC区は、Pit 掘りと実測をおこなう。
- 2) A C~F区は、円形住居跡の実測と、それに伴うPit の実測、また、円形住居跡のベルトのsection の実測も行なう。また、G43~40の実測、及び、G34~39、X2の精査も実施する。 *グリット配置図の作成
- 3) ASC区の実測と、Pit 掘り、GH1~H2、HXの整理と精査をおこなう。
- 4) 異形遺構と、G43N壁のsection 図の作成。

 $BM_2 = EL141.5cm$

水平糸=129.0cm

*本日の出土遺物一壺形土器、5個体、台付き鉢、石棒、石刀、小玉、タタキ石。

*8月9日(木) 晴 発掘第14日目

本日の作業は、次の通りである。 1) $GH_1 \sim H_2$ 、HXの掘り下げ実施、 H_1 は、5 層、 H_2 は、 $3 \sim 4$ 層、HXは、5 層の掘り下げである。

2) AC~F区は、大形円形住居跡のsection 図作成の後、ベルトをはずし1m方眼で水糸を張る準備をする。

BM $_{3} = EL119.5cm$

 $BM_1 = EL176.0cm$

- *本日の出土遺物一台付鉢、壺、皿、石刀、土偶、スクレーパー
- *8月10日(金) 晴後曇 発掘第15日目 本日の作業は次の通りである。
- 1) $GH_1 \sim H_2$ 、HXは、掘り下げ続行。 2) $AC \sim F \boxtimes$ は、ベルトのsection の実測終了、やり方測量の準備をする。 3) $AC \sim F \boxtimes ONE$ (G43) のセクション図を作成する。 4) さらに、 $AC \sim F \boxtimes O$ 放出した遺構を掘り下げる。
- 5) ASC区のPit 掘り終了、2~3号の住居跡実測終了、その他Pit の実測と、W壁、 N壁のsection 図作成。BM 1 = EL176.0cm BM 2 = EL138.0cm BM 3 = EL119.5cm

*本日の出土遺物―碗形土器、台付鉢、石刀、スクレパー、本日出土遺物を市立歴史民族 資料館へ運搬する。教育長、社会教育課長現地に来る。

*8月16日(木) 晴 発掘第16日目

本日の作業は次の通りである。 1) $GH_1 \sim H_2$ 、HXは掘り下げ続行する。 2) $AC \sim F$ 区は、住居跡の床面上の掘り下げと、実測図の作成にかかる。 3) ASC区は、N壁、E壁のセクション図の作成にかかる。

BM $_{3} = E L 123.2cm$

BM = EL152.0cm

BM = EL198.0cm

*本日の出土遺物―スクレーパー、朱塗り壺、浅鉢、石鏃、岩偶、石棒、その他

- *8月17日(金) 小雨 本日の作業は次のとおりである。
- 1) G34~36、40~42の精査、2) 午後からGH1H2、HXの掘り下げ実施、3) AS C区の発掘終了する。4) G43、42の精査開始。1号住居跡の実測終了
- *本日の出土遺物一茸形土製品、石錐、その他。

*8月18日(土) 晴

発掘第18日目、本日の作業は次の通りである。1) C H 1、 H 2、 H X は掘り下げ続行。 2) A C ~ F 区精査と実測。 G 43、42の遺構精査、 G 34のW壁セクション図作成。 5) G 43の実測とセクション図作成。

BM = EL172.0cm

BM = EL197.3cm

*8月21日(火) 曇 発掘第19日目

本日の作業は次の通りである。1) A C ~ F 区 G 43の遺構精査、G 34、35、41~39の実測。2) G 34、35の方形竪穴住居跡の精査と実測。3) G H 1、H 2、H X の掘り下げ続行、及び、W壁のsection 図作成。

 $BM_2 = EL173.5cm$

BM = EL196.8cm

*本日の出土遺物一注口土器、朱塗り壺、鉢、軽石、小形壺

*8月22日(火) 晴

発掘第20日目、本日の作業は次の通りである。 1) A C ~ F 区の G 34、35、41、40、39の実測統行、 2) G 43、42の遺構の実測とカマドの徴細図を作成する。 3) G H 1、H 2、H X の掘り下げ続行とW壁のsection 図の作成。 4) 完了区の写真、スナップを撮影する。

BM = EL177.0cm

B M.4 = E L 197.0 cm

* 8月24日(水) 曇後晴

発掘第21日目、本日の作業は次の通りである。

- 1) A C~F区G43、42のPit、 溝状遺構の実測 2) G H 1、H 2、H XのE壁の、section 図作成。 3) 各区の完掘写真を撮影する。
- 4) テント、器具の撤収、遺物の運搬、環境整理等を終り、遺跡を降りる。暑さが一変 して秋風が吹いている。台風の名残りか、この遺跡を手がけて9年目となる。来年を期し て再会を誓いながら山を下る。

BM = EL166.6cm

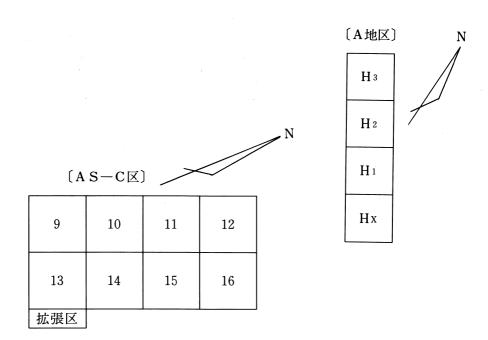
(c) グリットの設定について

*第9次の発掘調査においては、以下の通りグリットを設定した。即ち、第4図aでは、 第1~第9次発掘調査において発掘したグリット及びトレンチを図示してあるが、そのう ち、グリットの中に9と示してあるのが、第9次で発掘したグリットの位置である。

また、第4図のbに図示したのが、第 $1\sim9$ 次にわたって発掘調査したグリットの明細図である。以下、第9次発掘調査のグリット配置に限定して述べることにしたい。

- *第9次発掘調査では、次に述べる各地区の発掘を実施した。
 - (1) A地区—H₁、H₂、HXの3グリット
 - (2) AC-F区-グリット番号34、35、36、38、39、40、41、42、43の各グリット。
 - (3) AS-C区-グリット番号9、10、13、14の各グリットと13グリットの拡張区。 以上の3地区である。
- *A地区は、東西4m、南北4mを基本としたが、HXは、東西4m、南北5mとした。
- ***AC−F区は、各区とも東西5m、南北5mとしてグリットを設定した。**
- *AS-C区も、各区とも東西5m、南北5mとしたが、グリット13は、1m×5mの拡張区を設定して発掘した。なお、AS-C区の9、13は、策8次発掘調査で、遺構の確認をしたが、荒掘りの段階で発掘を終了したものである。次のページに第9次発掘調査の各区の略図を示すことにする。この発掘区の位置関係は、第4図-aで理解されたい。

〔第9次発掘調査発掘区模式図〕



					(AC—	(C-F区)	
			N		X 1		
	7		X 2	1	2	3	4
lu	34	35	36	5	6	7	8
in	38	39	40	41	42	43	44

〔Ⅲ〕遺跡周辺の地学的環境

1. 位置・地形

観音林遺跡は、津軽山地南部の馬ノ神山及び梵珠山を東北東〜東の方角に間近に仰ぎ見ることのできる位置に存する。両山頂までの直線距離はそれぞれ6.75km、5.6kmあ。。Fig.1の地形図を見てもわかるように、本遺跡は南西に突出した舌状の台地上に存し、北方及び南方には松野木川が流れ、山地、丘陵及び台地を細長く開析している。南西には広大な津軽平野が広がり、見渡す限り水田である。

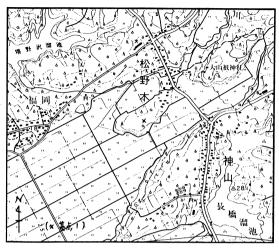
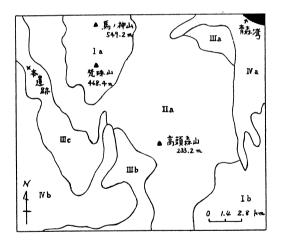


Fig.1 1遺跡付近の地形図 (国土地理院 1/25,000 地形図「大釈迦」による)

本遺跡の海抜高度は最も高い所で33.283m (B・M3)ある。別頁の縮尺1000分の1のグ

リッド・トレンチ配置図を見ると、住居 址の位置する、掘より上の部分の平均海 抜高度は32.5mとみてよい。基点1(標 高33.06m)の位置を基準にすると、南西 から南を通り東南東にかけては傾斜角度 45°の急傾斜地が見られ、用水を隔てて 標高21.5~24.5mの水田に連なる。した がって、遺跡の水田面からの比高は11~ 8 mということになる。一方、西南西か ら西を通り北北西にかけては、11°前後 の比較的緩やかな傾斜地となっている。

Fig. 2の地形区分図にもあるように、 観音林遺跡は前田野目台地の上にある。



I a 梵珠山地 III a 浪館台地 IV a 青森平野IB III b 八甲田火山地 III b 浪岡台地 IV b 津軽平野III a 大釈迦丘陵 III c 前田野目台地 Fig.2 地形区分図(水野・堀田、1982による)

この台地は、津軽平野と大釈迦丘陵の間に帯状に分布する、海岸段丘を中心とした砂礫台地で、海抜高度の違いにより3段に細分されている。すなわち、高度の高い方から、50~70m、30~40m、20~30mとなっている。このうち本遺跡は、高度30~40mの河岸段丘の

Fig. 3 発掘地区概略

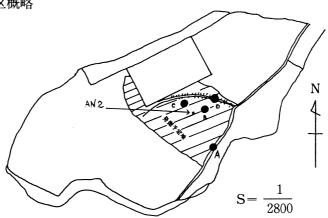
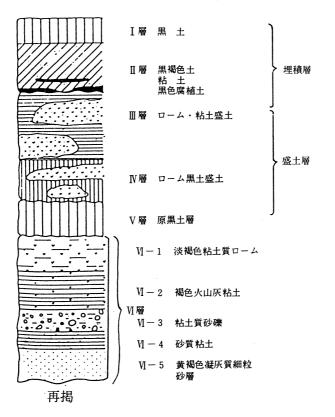
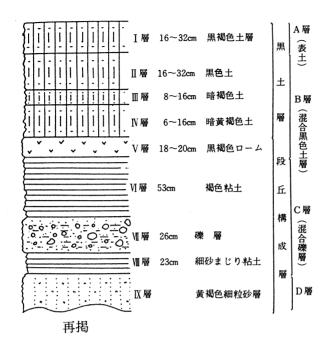


Fig. 4 D地区堀状遺構基本層序 (川村,1985)



上にある。この段丘は青森県全体を通してみた場合、低位段丘に属し、その堆積物は更新 世後期(リス・ウルム間氷期以降)に形成されたものである。また、周辺の水田地帯は松 野木川によって形成された扇状地となっている。

Fig. 5 A地区斜面構成層並びに各層の特徴(川村,1984)



Ⅰ層…黒褐色を呈しており、草木根が多数混入する腐植土で表土を形成する。

∏層…黒色土で粒子が細かく、さらさらしており直径1mm程度の粗砂を混入する。

Ⅲ層…黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈する。

Ⅳ層…ローム層から墨土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐色を呈する。

V層…粘性の強い黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。

Ⅵ層···黄褐色で粘性の強い粘土である。

₩層…粘土、砂および直径数cm程度の主に亜角礫からなる礫層で、段丘礫である。

Ⅷ層···凝灰質細砂まじりの粘土で、下層数cmはオレンジ色を呈する。

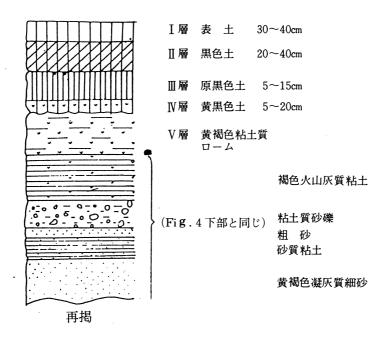
IX層…遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で、黄褐色凝灰質細粒砂層である。

2. 地質・層序

遺跡の基盤は前田野目層と呼ばれる更新統で、未固結堆積物の凝灰質砂を主とし、粘土、シルト、礫を伴う。この上に段丘堆積物の礫、砂等が載っている。表層は腐植質火山灰(黒ボク)で被覆され、その厚さは平均して約20cmといわれている。

D地区、A地区及びC地区の層序については、既に川村真一氏により詳細に報告されており、それぞれFig.6 で示される。第九次発掘調査地区においてもFig.5及びFig.6とほぼ同様である。なお、第六次発掘調査におけるAN2地区では、基本的にC地区基本層序と同様であるが、Ⅲ層の原黒色土が欠けていたり、部分的に存在していたりした。

Fig. 6 C地区基本層序並びに各層の特徴 (川村, 1986)



- Ⅰ層…表土で草木根が多数混入する腐植土である。
- \blacksquare 層…黒色土で粒子が細かく、さらさらしており、直径 1 mm程度の粗砂を混入しており、A 地区の \blacksquare 層と同様である。
- Ⅲ層…原黒色土である。粒子が細かく、粗砂も混入することは、 II 層と同質であるが、 しまりがあり、粘質もややある。
- IV層…黄黒色土で、V層の粘土質ロームも混入しており、III層からV層へうつる漸移層である。
- V層…黄褐色粘土質ロームである。均質ロームで粘性も大である。

土器片等遺物の包含層は、A地区においてはⅡ層からⅥ層まであり、C地区においては 1層からⅢ層までである。柱穴等検出された遺構は全てFig.6のⅤ層すなわち黄褐色粘土 質ローム層を掘り込んでおり、井戸に至ってはさらに粗砂層にまで達している。

(伊藤昭雄)

参考文献

- ①青森県(1982)土地分類基本調査「青森西部」
- ②五所川原市教育委員会(1975~1990)観音林遺跡発掘調査報告書(第一次~第八次)。
- ③中川久夫(1972)青森県の第四系。『青森県の地質』P.71-120.

[IV] 検出遺構 (第1~第18図)

- (a) 第1~第8次発掘調査で検出した遺構
- ●この項では、第1次~第8次に至る発掘調査で検出した遺構について述べる。
- 第一次→小土壙 (土偶、ミニチュア土器を埋蔵していた。) A地区
- ・第二次→焼土遺構、土壙群(7基、うち1基は晩期、6基は後期)、他に不明2基— B地区
- 第三次→小土塁、1号住居址(西側半分) B · C 地区
- 第四次→1号住居址、1号井戸、2号住居址-C地区
- 第五次→溝状遺構、2号住居址(地床炉付)、土塘群(5基)-C地区、AN2地区
- 第六次→土壙群23基(AN2地区)、柱穴群252、2号井戸-AN2地区
 以上、第一〜第六次発掘調査において検出した。これらの個々については、報告書にゆずり、この項では検出した遺構についてだけ記しておく。
- ・以上、述べた各遺構は、縄文時代後期、同晩期、土師器使用の時代に分けられるが、住居址、井戸等は、土師器使用の年代、すなわち、平安時代後葉のものと考えられる。
- また、土壙については、晩期のもの、後期のもの、土師器使用時代のものに分けられる。
- ・柱穴についても同様であるが、Ⅱ層で確認できたもの、Ⅴ層上面で確認したものがあり、 時差がある。(カマド)についても同様であるが、破壊された住居址も認められるので、 三時期に分けられる可能性も残る。
- ・堀については、形態そのものは、ほぼ「箱型」と断定できるが、年代を知る決め手は目下ない状況である。わずかに「カマド」を備えた住居址を切って堀り下げていることから、 土師器を伴う住居址より新しいという事実だけである。
- ◉第7次→第7次発掘調査において検出した遺構は、次のとおりである。
 - a)住居址

住居址は、(4・5・6・7・8号)の8棟を検出した。(1~3号は、C地区で第三 ~六次で検出)

- 4 号住居址は縄文時代のもので、円形〜楕円形プランのものである。出土地点、層位は、 N_{11} V 層上である。年代を知る手がかりはなかった。
- 5 号住居址は、方形プランのもので、カマドを備え、出入口は、南東隅にあるもので、カマドの北東、南西には、わずかに溝状遺構が認められた。出土地点・層位は、AN 2 地

区 $-M_{11}$, 12, N_{11} , 12にわたるもので、V層を堀り込んでおり、4 号住居址を切っている。 1 辺 4 m 75cmの正方形である。なお、この 5 号住居址のカマド右袖には、坏形土師器が密着して出土したので年代を知る好資料と考える。このものは、器形から「桜井第二型式」の土師器坏で、平安時代後期のものと考えられる。

• 6 号住居址→このものは、 R_{12} V 層上面で検出したもので、住居址の壁面は、北東部、 北西部は検出されなかった。この住居址は、出入口に近く、2 号地床炉をもつものである。 なお、東側・北側は、 R_{12} グリットの限界で発掘しなかったので不明である。

この 6 号住居址は、方形プランのもので、土師器使用の時期、すなわち平安時代後葉のものであろう。

• 7 号住居址 \rightarrow 7 号住居址は、 M_{10} , N_{10} の両グリットにわたるもので、V 層上面で検出したものである。

この 7 号住居址は、壁面が注意しなければ見落す程浅いもので、柱穴の配列を追求して 把握できたもので、地床炉または、炉址は無かった。このものは、長径3.7m、短径3.2m の不整円形プランであるが、住居址内に柱穴が多くあるため、かなり破壊されているもの である。

なお、この7号住居址は、第7次報告書の第7図に示すとおり、21号土壙によって切られている。

このことから、7号住居址は古く、21号土壙は新しいのであるが、年代決定は、きめ手がなく、多分縄文時代後期~晩期の住居址と考えられる。

• 8 号住居址 \rightarrow 8 号住居址としたものは、 M_{13} グリットの西南壁に切られている状態で検出したもので、V 層を約25cm程堀り込んでいるものである。未だ完掘していないので、時期等は不明である。

(b) 土壙

土壙は、全部で23基検出した。それを出土グリットごとに示すと下記のようになる。 ☆検出した土壙

- R₁₃ · 12 → 4 · 5 · 7 号土墉= 3 基
- Q₁₂ · 11 → 1 · 2 · 3 · 8 号土坊 = 4 基

• N₁₂ · 11 · 10→
$$\left\{\begin{array}{c} 10 \cdot 16 \cdot 17 \cdot 18 \\ 19 \cdot 20 \cdot 25 \end{array}\right\}$$
 号土壤= 7基
• M₁₂ · 11 · 10→ $\left\{\begin{array}{c} 9 \cdot 12 \cdot 13 \cdot 14 \\ 15 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 23 \end{array}\right\}$ 号土壤= 9基 $\left\{\begin{array}{c} 1123 \pm (6 \cdot 11 \times 1) \\ 123 \pm (6 \cdot 11 \times 1) \end{array}\right\}$

以上23基である。他に柱穴状の小土壙が認められるが省略する。

検出した確認面は、第 V層 としたベースの上面である。

本遺跡は、V層上面に縄文後期、晩期、および土師器使用時代の遺構があり、柱穴等も 同レベルで検出されるため、年代的把握が困難である。

以下、土壙についての発掘所見を述べる。

●1・2・3・4・5・7号土壙について

これらの土壙は、Q12, R13・12のV層上面で確認したものである。

このうち、3・4・5・7号は、ベルトまたは壁面に接するものもあり未完掘である。 なお、1号土壙は、半分は破壊されているものである。

これらの土壙からは、縄文時代後期・晩期の土器、土師器等の出土があり年代は不明である。但し、未完掘ではあるが、3・4・7号土壙のうち、7号は新しく、4号は、V層下に黒土層があって、土師器を埋納した土壙である。このグリットのV層としたローム層は貼り床の可能性がある。なお8号土壙(Q11 V層)は、貯蔵穴かも知れない。

●9・16号土壙について、この両土壙は、5号住居址に近接しており、特に9号土壙は、この住居址に属するもののようである。但し16号土壙は、壁面に接しているため形態は不明である。これらの土壙は、Ⅱ層とした黒土が覆土となっており、その覆土中から、土師器・縄文土器(後・晩期)片の出土がある。

なお、9号土壙の底面に密着して土師器坏形破片の出土がある。

- ●10・12・13・14・15号土壙について
- •10号土壙(N_{11} , M_{11})は、これも 5 号住居址に切られているものである。したがって、住居址より古いものと考えられる。この土壙の底面に密着して、第 4 群土器とした縄文後期「十腰内 I ・ II 式」の中間型式の土器片が 4 片出土した。この10 号土壙は縄文後期のもののようである。
- •12号土壙(M11 V)は、M11グリットの北壁に接しているもので、7号住居址、21号土 壙と切り合いになるものらしい。ベルトのためその切り合いの状況は不明である。この土

壙内の覆土からは、土師器片・縄文晩期大洞C2式土器が出土したが、年代決定のきめ手とすることはできない。時期不明としておく。

•13・14・15号土壙 (M11 V)、この3つの土壙は、相互に接しているもので、発掘所見では、切り合い関係は無いように観察される。

このうち、13号土壙は、M11の西壁に接しており、その形態は不明である。

この3つの土壙は、土壙内に柱穴状ピットをもつ点が、1号土壙と共通するところである。この柱穴状ピットが、13・14・15号土壙それぞれに付属するものか、別個のものかについては、発掘所見では、付属するものと捉えた。

その根拠は、どのピットも土壙を破壊していないからである。

出土した遺物は、須恵器甕形破片、土師器片であるが土壙を埋める黒土(Ⅱ層)中からである。このⅡ層とした黒土は、うごいているので、土壙の時期を判定する資料にはならない。

•17・18・19号土壙(N 10 V)、この17~19号とした土壙は、それぞれ、N 11の東壁、北壁に接しているもので、そのプランは不明である。

このうち、18号土壙は、その南側に、5号カマド址に接しており、土壙の南側、すなわちカマドに接する部位は、焼土であった。一応土壙としたが、カマドを備えた住居址の可能性もある。出土した遺物は、土師器(坏・甕形破片)で、18号土壙は、土師器(第二型式)の年代を与えることができる。

- •19号は、両土壙とも、壙内にピットをもつもので、土壙内からは出土遺物はない。
- 20・23・24・25・26号土壙(N 10・M 10 V)のうち、20号は、小土壙、25号土壙は、プランが変形したものであろう。

両者とも、15~18cmと浅いものである。また、両者とも遺物の埋納はなく、その周辺から土師器片(甕形)が出土した。

23・24・26号土壙のうち、24号土壙は、26号土壙によって一部切られている。したがって、26号土壙は新しく、24号土壙は古い。

この26号土壙は、深さが75cmと深く柱穴とは考え難い。23・24号とも柱穴状ピットをもつ点は、他の土壙とも共通する。

これらの20・23~26号土壙の覆土内から、須恵器片・土師器片・縄文土器片(後期・晩期)の出土があったが、土壙の年代を決定する資料にはならない。

• 22・21 号土壙 (M10・N10 V) この両土壙は、7 号住居址を切っており、21号土壙は、

12号土壙とも切り合うことは既に述べた。

したがって、7号住居址は古く、21・22号土壙は新しいものである。残念ながら、両者とも年代を決定する遺物は無い。22号土壙内のⅡ層とした黒土、21号土壙内のⅡ層には、後期「十腰内Ⅰ式」、晩期「大洞С2式」および土師器片(甕形)破片が出土したが年代決定の資料とはならない。

以上、1号~26号の23基の土壙について述べたが、時期を決定する遺物が少ないのが残 念である。

ⓒ 2 号井戸

この 2 号井戸は、 P_{13} ・12 , Q_{13} にわたって出土したものである。確認面は、V 層上面であった。(1 号井戸は、C 地区 X_1 グリット V 層上面で、第四次~第五次調査で完掘した。)

この2号井戸は、不整な四角形を二段に造り、その後垂直に掘り下げたものである。 第7次の(第7図)は、井戸の周囲にあった盛土を除去した後の実測図である。

外側の1辺が約2.25m~1.50m、二段目の不整四角形は、長辺約1.5m、短辺1.1mで、円形の垂直面上端は、径1.2m~1.5mのものである。また、深さは、危険防止のため1.2mで掘り下げを中止し、ボーリング棒で底面の深さを調べたのであるが、約50cm下で礫群があることがわかったが、それ以深は、約30cm程度で井戸底に達するもののようである。

すなわち、確認面である V層上面から井戸底まで、約2mの深さのものである。

井戸内の覆土中からは、獣骨・焼けた小骨片、土師器 (甕形片)、須恵器片 (甕形)、縄文 土器 (大洞C2式)等の出土があったが、井戸底の遺物は不明である。

以上、2号井戸の使用期を決定する手がかりは無いが、館址であること、空堀がめぐっている点を考慮すると、館址との関連で考えることが可能であろう。

d)地床炉

地床炉は、 $1\sim5$ 号の5 基を検出した。この5 基の出土グリット、出土層を示すと、つぎのとおりである。

- 1 号地床炉 R₁₃ V
- 2 号地床炉 R₁₂ V (6 号住居址に伴う)
- 3 号地床炉 M13 V
- 4 号地床炉 N 13 V
- 5 号地床炉 N 10 V

以上、すべて第V層上面で検出したものであるが、2号地床炉を除き、他は、何に付属する遺構かは不明である。

しかし、3 号地床炉は、8 号住居址、5 号地床炉は、7 号住居址の屋外炉の可能性も否定できない。特に7 号住居址は、炉址が見当らないものである。また、8 号住居址としたものは、未完掘なので、3 号地床炉との関係については、不明である。

(e)カマド址

- 1号カマド址 Q11 V
- 2 号カマド址 N₁₂ V (5 号住居址)
- 3 号カマド址 N₁₀ V (18号土壙)
- 4 号カマド址 (AN 1 b A 2 ■)

カマド址は、以上の4基を検出した。

このうち、1号としたものは、カマド址のみ残っていたもので、南方を向くものである。 このカマド址は梵口部が北側にあって、焼土が梵口部周辺に広がっていたが、住居址の 壁面、床面とも無く起伏があって破壊されていた。

• 2号カマド址は、5号住居址のカマド址でやはり南向きである。

既述したように、この2号カマド址の右側に、底面に「糸切り痕」のある坏形土師器が 密着しており、5号住居址の時期判定に役立つものである。

• 3 号カマド址は、18号土壙に付属するもので、既に述べたとおり、18号土壙としたものは、住居址の可能性がある。

この3号カマド址も形状は崩れているが、南向きのものである。

• 4 号カマド址は、未だ完掘せず、カマド址と見られる。このものも南向きと考えられる。

(f) 溝状遺構

この溝状遺構は、全部で7本検出した。それを例記すると、つぎのとおりである。

- 1 号溝状遺構 M13 V
- 2号 / M₁₂·₁₃ V
- 3 号 ∥ M₁₃ V
- 4号 / Q 12·13 V
- 5号 / Q11V
- 6号 / P 13·12 V
- 7号 / N 13 V

以上の7本であるが、このうち、5号としたものは、曲っているもので、また、3号と したものも曲線をなすものである。

これらのものは、幅20~30cm、深さ10~30cmの浅いものであるが、6 号溝状遺構は、幅約30cm、深さ30~40cmと深く、2 号井戸に、4 号溝状遺構とともに接続している。

また、5号としたものは、その西端に柱穴状ピットがある。

- 1 号としたものは、浅く3号地床炉と、焼土堆に接する。
- 2 号溝状遺構は、5 号住居址の付属施設の可能性がある。
- ・ 3 号としたものは、12号土壙につながるもので、7 号としたものは、深浅があって短い。以上、 $1\sim7$ 号溝状遺構は、その性格・機能等は、残念ながら不明であるが、すべて V 層を掘り込んでいるもので時期的には同一時期のものと考えられる。

(g)柱穴群

柱穴状ピットは、約280個検出した。これらの柱穴群を、遺構に付属するもの、縄文期 (後期・晩期のもの)、土師器・須恵器時代のもの等々、識別する力が不足であることが残 念である。今後さらに学習をつづけ、力をつけていきたいと願うところである。

これらの柱穴群、その他の遺構を含めて、すべてⅤ層上面で検出される。

すなわち、縄文時代後期、同晩期、土師器使用期の各期の遺構が、V層上面に所在したことだけは明らかである。

そして最も顕著なものは、土師器時代の遺構であると言うことができる。それは、遺跡 全体から考えて間違いないところと考えている。(以上、第1~第7次発掘調査報告書)

(b) 第8次発掘調査で検出した遺構

第 $1\sim7$ 次発掘調査で検出した遺構については、(a) において既述したとおりであるが、 つぎに、第 $8\cdot9$ 次発掘調査で検出した遺構を加え一覧表にまとめてみると〔表6〕のよ うになる。

1)住居址

検出した住居址は、いずれもベースであるV層を掘りこんだ状況で検出されたものであるが、このうち、6号・7号は、完掘せず明年度に残したもので、6号は、 $AS\sim C$ 区、グリット93で検出、7号は、D8区(掘)で、堀の中から検出されたものである。この6・7号については、省略する。(第9次で完掘の予定)

☆(1号住居址)

この住居址は、AN2区、 $M13 \cdot M14$ グリットのV層上面で検出した。なお、M13は、第7次に発掘してあるので第8次でM14を発掘して検出したものである。

この住居址は、プランが円形で、西側に出入口を備えた住居址である。

この住居址の年代を決定する資料の出土が無いのであるが、覆土中から出土した土器片は、土師器片・縄文土器片であるが、縄文土器は「大洞C1式」鉢形土器、西側のT・P1からは、「多頭石斧」の出土等があった。

すなわち、断定は控えるが、プランと出土土器・石器から、縄文時代晩期のものと思われる。

☆(2号・3号住居址)

この2号・3号とした住居址は、上下に重復して検出されたものである。

すなわち、AC~F区、②③⑥⑦グリットのV層上面で検出した。

プランは、長方形のもので、カマド址は、2号・3号住居址とも、南東壁下に上・下に 重複して出土した。

最初に3号住居址を検出し、これを精査する過程で検討した結果、2・3号としたものである。

すなわち、3号住居址が古く、2号住居址が新しいものと判断した。

- $2 \cdot 3$ 号とも、北側の壁面は共通であり、床面は、約 $10\sim15$ cmの厚さで上下に重複するもので、判断は、きわめて困難であったが、「カマド」も上・下に2 基検出されたので判断が可能であった。
- 2 号住居址は、焼失家屋とみられるもので床面全体に木灰が観察され、炭化材(板材)が倒れた姿で認められた。

この2号住居址の床面上、および覆土からは、須恵器が多量に出土した。

•特に、2号住居址の床面、北西部からは、須恵器がまとまって出土したが、「甕」長頚 (細口) 壺は器形によって分類できた。

このことから、「2号住居址」は、須恵器を生活用品としていたものであろう。

「甕」や長頚(細口)壺は、いずれも家屋の焼失による火熱をうけたものらしく、二次的に火を浴びた痕跡が認められる。

出土した須恵器は、大形のものが多く、坏形が1片もないので、床面上出土の遺物を検

討すると、「土師器坏形」が、小片で出土している。

すなわち、土師器坏形を加え、生活用具としていたように思われる。

・3号住居址は、床面が前者より下層にあり、出土遺物は、須恵器片と土師器片であったが、「カマド」址が、やはり下層となっており、年代差を知ることができたが、「2・3号住居址」は、年代的には、あまり違いがないと考えられる。すなわち、10~11世紀の幅で捉えることが可能であろう。

☆ (4 号住居址)

この住居址は、AC~F区、348グリットのV層上面で検出した。

これらのグリットは、(2・3号住居址)のあるグリットより約30~20cm高く、南に向って、ゆるい斜面をなす地形である。

4 号住居址は、やはり南西壁隅にカマドを備えた住居址で、そのプランは、長方形である。床面は、2・3 号住居址より約30~40cm高くなっているが既述したように地形が傾斜を持っているためと思われる。

また、2・3号住居址の東北に接して4号住居址が所在するが、両者の切り合い関係はない。

そのため、両者の新・旧関係については不明であるが、 $2 \cdot 3$ 号住居址は V層を深く掘り込んでおり、4 号住居址は、前者に比して浅い。

深さによって考えると、2・3 号住居址が古いように考えられるが、出土した土師器・ 須恵器等の遺物は、同時期であり、地形を考慮に入れると、ほぼ同時期の住居址と考えて もよいのであろう。すなわち、土師器は、「東北、北部の土師器型式」第二型式、須恵器 は、「前田野目」「持子沢」窯址出土のものと類似する。したがって、平安時代後葉の住 居址と考えてよいのではないかと思われる。

☆ (5 号住居址)

5 号住居址としたものは、 $AC \sim F \boxtimes$ 、①⑤グリットV 層上面で検出したものである。 $2 \circ (1) \cdot (5)$ グリットも、①が高く、⑤が低い地形である。

5 号住居址は、グリット⑤を中心に検出したものであるが、プランは、円形のものらしいが、住居址の東側は、2・3 号住居址の西壁によって切られており、南側は、⑤グリッ

トの南側にのびるものらしい。

そのため、完掘していないものである。主柱穴と思われる柱穴も認められるが、炉址も 未検出であって、明年度に期待したいと思う。

床面上に時期を決定する遺物の出土はないが、覆土中からは、土師器・須恵器片、および縄文時代後期「十腰内I式」土器が出土している。

• プランが円形であること。「十腰内 I 式」土器が覆土中から出土していること等から、 縄文時代後期の住居址ではないかと疑っているが結論は、明年度にしたいと思う。

2) カマド址

第8次発掘調査において検出した「カマド址」は、2号住居址に伴うもの、3号住居址に伴うもの、および、4号住居址に伴うものの3基である。

既述したとおり、3号住居址のカマドと、2号住居址のカマドは、上・下に重複しており、2・3号住居址の決定要素になったことは、既に述べた。4号住居址のカマドは、かなり破壊されており、煙道部の一部が残っている程度であった。

• この、三つのカマドは、いずれも南向きになっており、方向が一定している。

また、カマドの位置は、3 号住居址では、南・東壁隅、2 号住居址でも3 号住居址のカマドと同様である。4 号住居址では、南・西壁隅に位置する。このように、A C ~ F区で検出した「カマド」の位置は、住居址壁面の角に位置するという共通性が認められる。

• (表 6) に示したように、当遺跡で検出した住居址は、全部で17棟検出しているが、カマドを備えたものは、 6 棟である。壁面の角にカマドを備えたものは出土していないのである。

したがって、2・3・4号住居址のカマド址の位置は特異である。このことについては 今後さらに追求していきたいと思う。

3) 土壙

土壙は、全部で3基検出した。このうち、1号土壙は、D8(堀)のV層上、2号土壙は、 $AC\sim F$ 区、②グリットV層上、3号土壙は、 $AC\sim F$ 区 ⑤グリットV層上で検出したものである。

• 1 号土壙は、D地区D 8 グリットにおいて検出したもので、堀は、この土壙を破壊して 造られていた。したがって、そのプランや時期等は不明である。

- ・3号土壙としたものは、 $AC\sim F区$ 、② グリットの北壁に接して、約半分程検出したもので、平面プランは、円形と思われる。この土壙内には、炭化材が埋まっていた。出土した遺物は、土師器片。縄文土器片が覆土(II層)内にあったが年代等の決定資料には不適である。(X1 グリットを設定したが発掘せず)
- 2 号土壙は、⑤グリットの 5 号住居址の西側壁面下で検出したが、 5 号住居址に付属するもののようである。

しかし、5号住居址そのものが未完掘であるため結論はだせない。

第8次発掘調査で検出した土壙は、わずか3基で、いずれも性格、年代等は不明であるが、縄文時代の可能性があることを付記しておくことにする。

(表6)に示したとおり、土壙は全部で41基を検出したが、年代的には、縄文時代後期のもの、同晩期のもの、および、土師器・須恵器の使用時代のもの等に分けられるが、縄文時代後期のものが多く、つぎに晩期のものが多いが、土師器・須恵器使用時代のものが少数である。

4) 堀について

第8次発掘調査に至るまで。堀は、D地区として、調査対象としてきた。

第7次までに、 $D_1 \sim D_7$ トレンチとして、堀の東・北・西に、 $1 \text{ m} \times 12 \text{ m}$ トレンチを設定し、調査を進めてきた。

その結果は、結論的に「箱型」堀であることがわかってきた。(詳細は、 $2\sim7$ 次報告書)第8次では、コの字型の堀の西南端に、南北 $5\,m\times$ 東西 $10\,m$ のグリットを設定、さらに、 $A\,N\,4$ 区として東西 $10\,m\times$ 南北 $20\,m$ を設定、また、 $A\,N\,4$ 区の20グリットの拡張区 $3\,m\times5\,m$ を設けて、堀を検討することにした。

その結果として、やはり堀は「箱型」堀であることが確認される。

- しかし、堀の構築年代を決定するきめ手がなく、第8次調査では、縄文時代の遺構を切っていることが理解された程度である。
- ・第3次発掘調査では、1号井戸を埋めた土師器を主体とする住居址を、堀が切って造られている事実を知ったが、それ以上は未だ不明である。

いまのところ、土師器を伴う住居址より新しいという事実だけで、堀の年代を知る手が かりに乏しいのが現状である。(第8次報告書より転記)

[表1] 青森県内の土器編年表(1985~1989年調査を中心に)

	時	代		型式名 代表的遺跡名
				(無 文 土 器) 大平山元(1)
	草	創	期	(隆線文系土器) 表館(1)、発茶沢(1)
				(爪形文系土器) 鴨平(2)
				日 計 根井沼
				白 浜 ・ 小 舟 渡 平 上尾駮2)A・B・C、中野平、表館1)
縄				根 井 沼 根井沼
				寺 の 沢 幸畑(7)
				物 見 台 ・ 千 歳 表館(1)
	早		期	蛍 沢 A Ⅱ 式
	4-		八八	吹切沢・早稲田1・2類 表館(1)、発茶沢(1)、幸畑(7)
				ム シ リ I 式 表館(1)、発茶沢(1)、赤御堂
				表 館 VI 群 表館(1)、発茶沢(1)、赤御堂
文				赤 御 堂 上尾駮(1)A、表館(1)
				早 稲 田 5 類 表館(1)、弥次郎窪、上尾駮(1)A
				表 館 [X 群 表館1]、
				表 館 X 群 表館1)、発茶沢(1)、幸畑(7)
				表 館 XII 群 表館(1)
				表館 雅 裁館(1)、発茶沢(1)
				長七谷地Ⅲ群 表館1)
時				表 館 · 芦 野 I 弥栄平(4)、発茶沢(1)、表館(1)
	前		期	早 稲 田 6 類 上尾駮(1)A・C、上尾駮(2)A、幸畑(7)
	133		7//1	深郷田
				円 筒 下 層 a
				円 筒 下 層 b 尾上山(3)、
				円 筒 下 層 c 上尾駮(1)C
				円 筒 下 層 d ₁ 上尾駮(1)C、館野、尾上山(3)
代				円 筒 下 層 d2 大湊近川、上尾駮(1)C、館野、富ノ沢(2)
				円 筒 上 層 a 上尾駮(1)C、館野
				円 筒 上 層 b 上尾駮(1)C、館野
				円 筒 上 層 c 上尾駮(1)C、館野、富ノ沢(2)
	中		期	円 筒 上 層 b 上尾駮(1)C、館野、富ノ沢(1)(2)、弥次郎窪
	,		, •	円 筒 上 層 e 大湊近川、上尾駮(1)C、富ノ沢(1)·(2)、弥次郎窪
				榎 林 富ノ沢(2)
				最花、中の平Ⅲ 富ノ沢(1)・(2)
<u></u>				大 木 10 大石平、富ノ沢(1)・(2)

			牛 ヶ 沢 大湊近川、大石平、上尾駮(2)B・C、弥次郎窪
			沖 附 大湊近川、大石平、上尾駮(2)B·C、弥次郎窪
VB2			弥 栄 平 大石平、上尾駮(2)A・B・C
縄			十 腰 内 I 大湊近川、大石平、上尾駮(1)C、上尾駮(2)A・B・C
	後	期	西山、弥次郎窪
			十 腰 内 Ⅱ 小田内沼(1)
文			小 腰 内 Ⅲ
			十 腰 内 Ⅳ
			十 腰 内 V 大湊近川、上尾駮(2)A・ニッ石、鬼沢猿沢
時			大 洞 B
	晚期		大 洞 BC
1 1			大 洞 C ₁ 上尾駮(1)C
代	吮	共力	大 洞 C ₂ 上尾駁(1)C
			大 洞 A 上尾駁(1)C
			大 洞 A' 一ツ石
77.	前	期	砂 沢 弥栄平(4)、砂沢
弥	ניפ	377]	五 所 ・二 枚 橋
生	中	期	宇 鉄 Ⅱ ・ 井 沢 │ 大石平
時	Т	栁	田 舎 館 上尾駐2)A、垂柳
代	後	期	念 仏 間 弥栄平(4)、上尾駮(2)A・B・C、西山
	1/2	77 73	天 王 山(鳥 海 山) 上尾駮(2)A・B・C、富ノ沢(2)
古	前	期	(塩 釜) 4 C代
墳	hii 中	期	(南 小 泉 Ⅱ)5 C代 細越館
時	後	期	(住 社) 6 C代 森ヶ沢、三日市
代	X	22/1	│ (栗 ·囲) 7 C代 │ 鹿島沢古墳群、根城東構、阿光坊古墳、田面木平(1)
	飛	鳥	8 C代 丹後平古墳、向山(4)
古	奈	良	(国 分 寺 下 層) 原古墳、李平下安原、前比良、小田内沼1)、中野平
			9 C代 熊野堂、山本、下谷地(1)、上尾駮(2)B、中野平
代	平	安	(表 杉 ノ 入)10 C代 杢沢、発茶沢
	· ^T		11C代 茶毘館、境関館
			12C代 中崎館

青森県埋蔵文化財調査センター所報 第9号より (1990.3.31)

(※註) ……=観音林 site 出土土器の編年を示す。

推定年代	区 分	土器型式	観音林第一次 S49試掘	第二次 S 5 8 予備	第三次 S 5 9 予備	第四次 S60本調査	第五次 S61本調査	第 6 次 S 6 2 本調査	第7次 S63本調査	第8次 H1本調査	第 9 次 H 2 本調査	第10次 H 3 予定	群別
	縄文時代	草創期 早期											
6 0 0 0 0	前期 円筒下層式	a 太 式 式 式 式 式 式 式 式 式 式 式	/	/	円筒下層式 a式 / d 2式	円筒下層式 a式 dı式	円筒下層式 a式 dd式	円筒下層式	円筒下層式 a式 (+)	円筒下層式 a 式 (+) (型式不明)	円筒下層式 a 式		第一群
5 0 0 0	中期円筒上層式	a 式 c 式 b 式 d 1 式 d 2 式 e 式	/	円筒上層式 b式	円筒上層式 b式	円筒上層式 b式	(+) /	円筒上層式	円筒上層式	円筒上層式 (+) (型式不明)	円筒上層式 a式 b式 d式		第二群
4 0 0 0	後期 十 腰 内 式	1式 2式 3式 4式 5式	十腰内 I 式 十腰内 II 式	十腰内 I 式 十腰内 I 式 十腰内 V 式	十腰内 I 式 十腰内 II 式	十腰内 I 式 十腰内 II 式	十腰内 I 式 (+) 十腰内 II 式	十腰内 I 式 (+) 十腰内 II 式	十腰内 I 式 (+) 十腰内 II 式 (+) /	十腰内 I 式中間型式十腰内 II 式 1 大腰内 II 式	十腰内 I 式中間型式		第四群第五群
3 0 0 0	晚期 大洞式	B式 BC式 C1式 式式 C2 A式 A式 A'式	大洞式 C 1 式 C 2 式 (C 2 - A) 式 A式	大洞式 B·C式式式式式式式式式(C2-A) A式	大洞式 B·C式式式式式式式式式式式(C2-A) A式	大洞式 B·C式式式式式式式式式(C2-A)式	大洞式 B·C式式式式式式 C2式式式 (C2-A)式	大洞式 B·C式式式式式式 C2式式 (C2-A)式	大洞式 C 1 式式 C 2 式 (C 2 - A) 式 A式	大洞式 B·C式式式式式式 C2式式 (C2-A)式	大洞BC式式式 大洞C12式 大洞C2个 大洞C2~ A式(仮称) 大洞A式		第七群 第九群
BC300 AD300	弥生時代												
1 0~1 1 世紀 C	古代中世	土師器 須恵器	土師器 須惠器	土師器 須恵器 珠 洲	土師器	土師器 須恵器 鉄器	土師器 須恵器 陶器	土師器 須恵器 鉄 器	土師器	土師器	土師器 須恵器 陶器 磁器鉄さい		第十二群第十二群

[表 3] [観音林遺跡 (第 9 次) 遺構・及びPit 内出土、土器等一覧表]

出土地区	遺物	
グリット番号	遺構	出土遺物
9	3 号住居址 Ⅱ下	晚期土器片 5 後期十腰内 [式 7 土師器 4
9	土 壙 2 号	後期 1 晩期 1
9	土 壙 3 号	晩期C ₂ 朱塗り壺 2 C ₁ 朱塗1 石器未加工1 後期片十腰内 I 式 20片以上
9	土壙 4 号	晩期C2(鉢 深鉢)多数 壺(口径部1) 後期片十腰内I~Ⅱ中間形式
9	土 壙 5 号	後期 十腰内 I 式 口縁 1 縄文前期 1 胴部小片 23
9	I 層 一 括	縄文前期 1 後期 十腰内I 6 底部 1 晩期C ₂ 鉢、台付鉢の台
9	Ⅱ 層	縄文前期A? 20
9	Pit 44 Ⅱ 層	縄文前期 3 • 土師器 2 後期十腰内 I 4
9	Pit 48	後期十腰内Ⅰ式 17
9	3 号住居址 Ⅱ層下	縄文中期 胴部片 1 後期十腰内 I 式 多数(100片以上) 晩期 C 1 式 鉢形土器片 18
13	住 居 址 I 中	晩期C ₁ 式 1 土師器底部 1 胴部 1
13	2 号住居址	土師器 坏 1 坏 3 W-1.40m L-147.0(175.7)
13	Ⅱ 層	縄文前期 1 晩期 A 式 1 土師器 2
13	Pit 2	後期 2 他 9
13	Pit 7	晩期 1 (朱塗) 後期十腰内 I 式 2 土師器片 2 須恵器 1
13	Pit 19	十腰内 【式 1
13	Pit 26	晚期 C ₂ 鉢形、(口縁部) 1 他 晚期 2 後期 2
13	Pit 41	後期十腰内Ⅰ式 11
13	土 壙 内 Ⅱ A	晩期 2 後期十腰内 I式 1 土師器片(坏 碗 5)土壙内

14	土 壙 8	晩期A式 1 十腰内 I 式 2 C 2朱塗り壺片 1
14	Pit 32	十腰内 [式 1
14	Pit 35	晩期 4 他 4 後期 2
14	Pit 39	十腰内 I 式 底部 1 胴部 2 他 7
14	Pit 55	十腰内Ⅰ式片 (底部)1 他10
14	Pit 59	石皿片(15.5×11.5×2.4) 1 晚期土器片 2
14		縄文 前期 底部 1 ケ 後期十腰内 7 (内注記4)
10		 縄文 前期 1
13	Ⅱ 層	中期 1
14	_	十腰内 I式 39
34	4 号住居址 Ⅱ 下	珠洲 3 縄文前期 1 十腰内 I式 12 (内底部 1)
34		土師器 1 須恵器片 5
36	I	土師器 1 晩期A式 口縁部 1
36		土師器片(底部 1 他 10)
38		土師器 3
38	N F	土師器 坏形土器 (復原)
39	I	土師器 10
40	Pit 内 ?	十腰内 I式 2 (内 1ケ底部)
40	一 括	石器 石弾 1 不定形削器 1 石刀 1
40	一 括	土器 (縄文 前期 底部 1) (十腰内 I 式 5) 土師器 4
41	I 層 下	晚期台付鉢 1

9 10 13 14	方形遺構内 Ⅱ 下	縄文前期 6 晩期 C ₂ . A式 10 後期 十腰内 I 式 土師器 1
10	土 壙 7	十腰内 [式 19
10	Pit 3	縄文前期 1 後期 6
10	Pit 4	後期 十腰内 I 10 晩期 C ₁ 6
10	Pit 9	石器 1 土師器 1 (底部) 十腰内 I 式 3
10	Pit 11	十腰内 I式 5 他5 石器 スクレーバー 3
10	Pit 16	十腰内 【式 3
10	Pit 17	晚期片 4
10	Pit 21	十腰内 I式 2 晚期 7 (内 1 注記)
10	Pit 22	十腰内 I式 1 晚期 1
10	Pit 25	晚期 1 後期 十腰内Ⅰ式 2
10	Pit 26	晚期 1
10	Pit 31	十腰内 【式 5
10	п 444	縄文 前期 底部 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
14	Ⅱ 一 括	後期 1
10 \$ 14	П	後期 十腰内 I式 10 晩期 1
10 \(\) 14	II 層	晩期 壺 (底部) 1 ケ 後期 十腰内 I 式 40

41	I 層 下	土師器片 14 内底部 1 他 胴部
41	Ⅰ 層 一 括	円盤状石製品 1
?	? Pit 内	須恵器 2 土師器 3
42	I	土師器、坏(底部) 他 2
42		須恵器 1 土師器 2 他 8
42	V	土師器 口縁部 6 底部 2
42	V	青磁片 1
43	井 戸 内	須恵器 2
43	1 号 井 戸	晚期A式 1 土師器底部 2
43	井戸内一括	土製装飾品 1 後期 3 須恵器 1
42 \(\) 43	中央遺構内	土師器 (甕 、坏 14) 須惠器片 20
Нх	Ш	クボミ石 1 石槍 1

	Τ						計測値				
	No.	器形	出土区・層位	現存	土器型式	精製・粗製別	口径×器高×底径×器厚	色調・胎土・焼成	施丈(縄文)	備考	(註記を含む)
	1	壺	H × 5	口縁部欠	C 2	粗	2.2×4.0×2.9×0.5	灰黄色	縄文	E ~103cm N ~160cm	E L = 176 L = 356.6
	2	"	H×5	口縁部欠	"	,	$? \times 3.8 \times 2.0 \times 0.4 \atop 0.5$	灰黄色しまっている	無文	E~41 NO~200	E L = 176 L = 339
	3	"	H×3	完	"	"	2.3×3.6×1.5×0.3	朱塗り、堅い	"	W~137 N~256	E L = 65.9 L = 178.2
(袖珍)	4	"	H 2 · 3	口唇部 欠	"	"	2.4×5.6×2.5×0.4	灰黄色	"	E~40 S~60	E L =197.3 L =220.9
	5	"	H × 5	仝 上	"	"	2.5×5.9×4.4×0.6	薄黄褐色、堅い	,,	E~45 N~26	E L = 148.2 L = 354.2
	6	"	$H \times V$	一部復原	"	"	$1.9 \times 2.7 \times 1.25 \times 0.2$	灰黄色、良	,		
	7	異 形 壺	H ₁ V	一部	"	"	?×4.8×?×0.35	灰黄色、良	,		
	1	鐸 状	H×5中	完	十腰内 I	"	口径、器高、器厚 3.3×5.5×0.3	灰黄色良	沈線文 刺突文	E~94 N~240	E L =197 L =437
(鐸状)	2	"	H×5中	完	"	"	4.1×6.3×0.4	,	平行沈線文	E~179 N~115	E L = 197 L = 379.4
(\$470)	3	"	H×5中	完	,	,	2.8×4.6×0.5	"	,	S ~190 E ~161	E L =197 L =451.4
	4	"	H ₁ -3下	完	"	,	3.0×6.3×0.6	灰色良	,,	S~190	
(耳栓)	1	耳 栓	H ₁ -3下	完	"	,,	1.3×0.95	灰色不良	"		
	1	片口付 台付鉢	H×V中	台 欠	C 2	,	$5.1 \times 2.9 \times ? \times ^{0.3}_{0.4}$	灰黄色、堅くしまる	無文		
(袖珍)	2	Ш	"	3 4	"	,	5.3×1.7×0×0.6	灰黄色、良	"	S 144 E 161	E L =197 L =454.1
	3	Ш	Н 2 Ⅲ下	 大	"	"	5.8×2.3×3.3×0.4	黒褐色、不良	"	S 185 E 147	E L = 197 L = 456.3

「Naは、整理番号であって他のものと無関係」→以下も同じ。

								1			
	4	鉢	H 2 🏻	底 部	C 2	粗	$? \times ? \times 2.9 \times 0.3$	黄褐色、堅い良	無文		
	5	"	H x V中	完	"	,	$4.5 \times 1.9 \times 0 \times 0.5$	灰黄色、良	"		
	6	ш	H x V	完	"	"	0.2 5.3×1.2×2.3× 5 0.4	灰褐色、堅い 良	"		
	7	鉢	H x 🏻	完	"	"	$4.2 \times 3.7 \times 2.2 \times {0.5 \atop 0.6}$	灰黄色、不 良	"	N302 E~133	E L =65.9 L =520
袖珍	8	ш	H x 🔟	 大	,	"	7.8×1.4×5.4×0.3	褐色、良	"	E61 S13	E L =176 L =248.2
	9	浅鉢	H x V	完	,	"	7.2×3.1×2.8×0.5	灰黒色、良	,	E103 N160	E L =176 L =356.6
	10	Ш	H x V	復原	"	"	$7.1 \times 3.1 \times 3.0 \times 0.6$	灰褐色、良	"		
	11	Ш	H x V	"	C 1	"	5.6×2.4×2.3×0.5	黄褐色、良	刺突文		
	12	台付鉢	H ₁ V	— 部	C 2	"	(台のみ) ?×1.7×2.3×0.4	灰黄色、不良	無文		
	13	鉢	H ₁ V	底 部	十 腰 内 I	"	?×1.5×2.0×0.4	灰黄色、良	"		
	1	穿孔あり	H 1 V	一部欠		"	3.9×0.4	灰褐色、良	縄文	W~150 N=13.5	E L =198.2 L =319.4
	2	"	H x V	完		"	4.9×0.7	灰黒色、良	"	W=46 N=6	E_L =198.2 L =306
	3	穿孔なし	H 1	"		"	4.3×0.8	灰褐色、良	*	E=170 N~156	E L =176 L =252.9
円盤状	4	"	H 1	"		"	4.9×0.7	灰黒色、良	無文	`	
土製品	5	"	H x V	,		"	5.3×0.6	灰黄色、良	縄文		
	6	"	H x II	,		"	5.2×0.8	灰黄色、不良	,,		
	7	"	H x V	,		"	3.7×0.4	灰黄色、良	,,		
	8	"	H x V	,		"	6.5×3.9×0.6	灰黄色、良	"		

	9	穿孔なし	H x V	完	粗	5.3×4.3×0.6	黄褐色、良好	縄文		
,	10	"	H x V	"	"	4.5×0.55	灰黒色、良好	"		
	11	"	H x V	"	"	5.7×0.9	黄褐色、良好	"		
	12	"	H x V	,	"	5.4×0.6	灰黒色、良好	"		
	13		H x V	"	"	4.8×0.7	灰黒色、良好	"		
円盤状 土製品	14	"	H 1 🏻	"	"	4.1×0.4	灰黄色、やや良	無文		
	15	"	H ₁ V	"	"	4.3×0.6	灰黄色、やや良	縄文		
	16	"	H 1 JV	"	"	4.7×0.5	灰黒色、やや良	"		
	17	"	H x V	"	"	5.0×1.0	灰黒褐色、やや良	"	E~41 N~45	E L = 153 L = 464
	18	"	H 2 ∏	"	"	4.1×0.5	灰黒褐色、やや良	"	E~112 N~204	E L = 176 L = 343
	19	,	H 1 [V	"	"	5.7×0.6	灰黒色、灰黄色、やや良	"	W~170 N~10	E L = 176 L = 227.8
	1	脚 部	H 1 [V	右脚部 の み	精	4.6	灰黄色、良好	"	計測不能	
	2	胴下半	H x V	胴下半	"	9.8	,	"		
	3	脚部	H 1 [V	右脚部 の み	,	6.2	*	"	W~80 S=158	E L=150.7 L=382.2
(土偶)	4	板状	ASC 10GII下	胴下半	"	4.8	灰黒色、良好	"		
	5	"	H x V	左 肩一部	"	10.6	,	"		
	6	動物型	H 2 Ⅲ	完	"	5.2×2.2×1.3	,	沈線文		
	7	土偶	H 1 [V	右脚部	"	10.6×7.0×1.9	灰黄色、良好	沈線文 刺突文		

蓋土器	1		H x V		精	4.5×2.5	灰褐色、良好		E~148.5 N~160	E L = 197.3 L = 411.4
	2		Н x V中		精	7.1×5.2	灰色、良好		W~75 S~12	E L = 65.6 L = 376.9
腕 輪 状土製品	1		H 1 IV	半欠	精	6.1×2.2	朱塗、良好		N~198 W~67 BM-2	E L =172 L =236.5
土 錘	1		住居東側 G40の溝	完	精	1.4×5.4×1.3	黄褐色、良好	無文	E~208 N~75	E L =144.2 L =411
装 身 具	1		Н 2 Ⅲ下	"	,	5.5×1.9	灰黒亀、良好	沈線文		
土製品	1	三角形 土製品	H 2 🎹	"	"	5.1×0.7	灰黒色、良好	刺突文	W~190 S~200	E L = 150.7 L = 390
	2	舟 形	H 1 IV	"	"	5.8×4.8×0.9	灰黄色、良好	無文	S~157 E~21	L=240

0		
	1	

P. L Na	群別	器形	出土区	・層位	P No.	現存	土器型式	精製・粗製別	実測図 №	色調・焼成・胎土	施丈 (縄文)	備	考 (2	注記を含む) (cm)
	8	鉢	Нх	Ш	1	完	C 2	粗	1	・黄褐色 やや良	無文	W226	S 270	L484 (65.9)
	3	"	Н 1	V	2	復原	十腰内I	"	2	灰黒色 やや良	"			
	4	"	H x	V	3	"	十 腰 内 I・Ⅱ中間	"	3	黄褐色 良	"			
	"	"	H x	V中	4	"	"	"	4	黄褐色 やや良	"	W119	N96.5	L341.8 (176)
	3	"	Нх	V	5	"	十腰内Ⅰ	,,	5	灰黄色 良	"			
省	,	"	Нх	V	6	"	"	"	6	灰黄色 やや良	"			
略	"	壺	H 1	V	1	口縁欠	"	"	1	黄白色 良	,			
(以下同じ)	8	/ (注口)	H x	V	2	"	C 2	"	2	灰黄色 やや良	"	E173	N120	
<u>(ئا)</u>	3	"	H 1	VI	3	復原	十腰内 ["	3	灰黒色 良	"			
	"	"	H x	V中	4	一部欠	"	"	4	黄褐色 やや良	"	E 121	N 160	L 419 (197)
	"	"	H 2	Ⅲ下	5	"	"	"	5	灰黄色 やや良	,	E193	N 38	L 442 (150.7)
	"	壺	H 2	Ш	6	復原	十腰内Ⅱ	"	6	灰色 やや良	,			
	"	台 付 鉢	H x	V	1	"	十腰内I	"	1	灰黄色 やや良	,			
	"	"	H 2	Ⅲ下	2	"	"	"	2	灰黄褐色 やや良	,			
	7	"	H x	IV	1	口縁一一部欠	C ₁	"	1	赤褐色やや良	L.R	W58	N 200	L356.5 (176)
	"	"	H x	V	2	"	"	"	2	灰黒色 良	撚糸文 (単軸)	E90	N 220	L378.5 (176)

「整理NaにつきA・P・LNaと関係なし(以下も同じ) ┛

7	台 付 鉢	H _x	V	3 ·	復原	C 1	粗	3	灰黒色 やや良	燃糸文	W84 N194 L352.4 (176)
"	"	H _x	V	4	"	"	"	4	灰黄黒色 良	L.R { {	
"	,	H x	VI	5	"	4	"	5	灰褐色 やや良	撚糸文 (単軸)	W148 N226 L333.8 (176)
"	"	H x	V中	6	"	"	"	6	黒褐色 やや良	L.R. { &	E78.5 S191 L439.9 (197.3)
"	"	H ₂ G	Ⅲ下	7	"	"	"	7	灰黒褐色 良	L.R { \(\ell_{\ell} \)	
8	"	"	Ш	8	完	C 2	"	8	灰黒褐色 良	摩滅	E176 S10 L379.2 (143.5)
10	"	H x	V上	9	復原	A	"	9	灰黄色 やや良	摩滅	
"	"	H x	V	10	完	"	"	10	黒褐色 赤褐色 やや良	L.R	W141 N135 (176)
"	"	H _x	V中	11	復原	"	,	11	灰黒褐色 やや良	L.R { { { }	W114.5 S155 L434.8 (196.8)
7	"	H _x	V	12	完	C 1	"	12	黒褐色 良	L.R { { { { { { { { { { { { { { { { { { {	E76 N135 L348.2 (176)
"	"	H _x	V上	13	"	C 1	"	13	黒褐色 不良	L.R { { { { { { { { { { { { { { { { { { {	
9	"	H _x	V中	14	台 欠	C 2 A	精	14	黒茶褐色 良	$R.L \begin{cases} r \\ r \\ r \end{cases}$	S198 E107 L439.1 (197.3)
7	"	H x	V	15	復原	Сı	粗	15	黒褐色やや良	L.R { { { { { { { { { { { { { { { { { { {	,
"	ш	H 2	Ш	1	"	"	"	1	黄褐色 良		
"	"	H x	V	2	"	"	精	2	良	L.R { { { { { { { { { { { { { { { { { { {	
8	"	H x	V.	3	"	C 2	粗	3	/ やや良	無文	
"	"	H x	V	4	"	"	,	4	<i>か</i> や良	摩滅	
"	"	Нх	V	5	完	"	精(朱塗痕)	5	ッ やや良	無文	W213 N123 L338.8 (176)

8	Ш	Нх	V	6	完	C 2	精(朱塗)	6	黄赤色 やや良	無文	
"	"	H 2	Ш	7	復原	"	"	7	黄赤色 やや良	"	
"	"	H x	V	8	"	"	粗	8	赤褐色やや良	"	
"	"	H ₂ G	Ⅲ上	9	完	"	精	9	灰黄色 やや良	L.R { { { { { { { } } { { } { } { } { } {	W110 S190 L353.7 (153.6)
7~10	碗	H ₃₈	N上	1	"	c ₂ -A?	粗	1	黄褐色 やや良	無文	N180 E75
"	"	H _x	V	2	"	C 2	"	2	黄褐色 良	$L . R \left\{ egin{array}{l} \ell \\ \ell \end{array} ight.$	E164 N130 L314 (176)
"	"	H _x	V上	3	"	$C_2 - A$?	"	3	褐色 良	無文	W103 N46 L322.5 (198)
"	"	H x	V中	4	"	"	"	4	褐色 良	"	
"	"	H 1	VI	5	"	"	"	5	黄赤色 良	"	W33 S29 L444 (153)
7	鉢	H 1	V	1	復原	C 1	"	1	灰褐色 やや良	$L.R$ $\left\{ egin{array}{l} \ell \\ \ell \end{array} \right.$	
3	,	H x	V	2	完	十腰内Ⅰ	"	2	黒褐色やや良	無文	
8	"	H x	VI	3	"	C 2	"	3	褐色 (煮沸痕) 良	L.R { &	W105 S 285 L 347.75 (175)
"	"	Нх	V中	4	復原	"	"	4	黄褐色 良	L.L {r r	
"	"	H 1	V上	5	"	"	"	5	褐色 良	$L.R$ $\left\{ egin{aligned} \ell \\ \ell \end{aligned} \right\}$	
"	片口	H _x	V	6	完	"	"	6	黒褐色 (煮沸痕) やや良	撚糸文	W118 N109 L338 (176)
"	鉢	H x		7	"	"	再生 粗	7	黒灰黄色 やや良	L.L { \(\ell_{\ell} \)	W104 N207 L371 (176)
"	"	H 2	■下	8	"	"	粗	8	赤黒色 良	L.R { \(\ell_{\ell} \)	E116 L433.8 (150.83)
"	"	H x	V	9	復原	"	"	9	黒褐色 良	撚糸文	

8	鉢	H _x	IV	10	復原	C 2	再 生 粗	10	褐色 良	無文	
"	"	H 1	IV	11	"	"	"	11	黒褐色やや良	燃糸文	
10	"	H _x	V	12	完	A	,	12	黒褐色 (煮沸痕) 良	L.R { \(\ext{\vertice} \)	E82 N230 L366.5 (176)
"	"	H _x	Ш	13	完	"	精	13	黒褐色 良	L.R { &	W244 S 225 L 528
7	"	H _x	V	14	復原	C 1	粗	14	黒褐色やや良	撚糸文	
"	"	H 2	Ⅲ下	15	"	"	"	15	灰褐色 不良	無文	
"	"	H 2 G	Ш	16	"	"	"	16	灰黄色 良	L.R { &	
"	"	"	Ш	17	"	"	"	17	黒褐色 不良	羽状縄文	
8	"	"	Ш	18	"	"	"	18	黒褐色 不良	$R.L \begin{cases} r \\ r \\ r \end{cases}$	E176 S10 L379.2 (143.5)
7	壺	H x	V中	1	口縁欠	C 2	"	1	灰褐色 良	無文	S164 N110 L441.4 (197)
"	"	H 1	V	2	"	C 1	精(朱塗)	2	黒褐色 良	"	E75 S85 L298.2 (198.2)
"	"	H _x	V中	3	復原	"	粗	3	灰黄色 良	,	S136 W157 L446.2 (196.8)
"	"	H x	V	4	"	"	精(朱 塗)	4	朱塗 良	"	W70 N185 L361 (176)
8	"	H 1	VI	5	完	"	精(朱塗)	5	灰褐色 良	,	E85 S60 L315.4 (198)
"	"	H x	VI	6	"	"	粗	6	灰褐色 良	L.R { { { { { { { { { { { { { { { { { { {	W50 S 287 L 355 (176)
"	"	H x	V	7	"	C 2	"	7	灰褐色 良	L.R { {	W183 N123 L323.3 (176)
"	"	H x	VI	8	"	"	"	8	黒色 やや良	L.R	W167 S 260 L 376.4 (176)
"	"	H x	V	9	口縁欠	"	,	9	褐黒色 良	L. R { { e	E90 N220 L358 (176)

8	壺	H 1	V	10	一部欠	C 2	精(朱塗)	10	赤褐色 やや良	無文	E152 S80 L305.5 (198.2)
"	"	Нх	V中	11	完	"	粗	11	灰黄色 やや良	L.R	W31 S116 L428 (196.8)
"	"	Нх	V中	12	完	"	精(朱塗)	12	赤黄色 やや良	無文	W141.S162 L424.1 (196.8)
"	"	H 1	VI	13	口縁欠	"	"	13	赤褐色やや良	,	W50 N100 L357 (198)
"	"	Нх	V中	14	完	"	粗	14	黄褐色 良	$L.R$ $\left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right\}$	E68 S180 L429 (197.3)
,	"	Нх	V	15	"	"	"	15	灰黒色 良	L. R { \(\ell_{\ell} \)	E204 N215 L336.3 (176)
"	"	H 2	Ⅲ上	16	底部欠	"	"	16		L.R { { { { { { { { { { { { } } } } } } }	W162 N59 L421 (150.7)
"	"	H x	V中	17	一部欠	"	"	17	灰黄、灰黒色 良	撚糸文	
"	"	H x	VI	18	復原	"	"	18	灰黄色 良	無文	W176 S 260 L 366 (196)
"	"	H x	Иф	19	"	"	"	19	灰黄、灰黒色 良	撚糸文	
"	"	H x	V中	20	"	"	"	20	灰黄色 良	無文	
"	"	H x	V中	21	"	"	"	21	灰赤色 良	$R.L \begin{cases} r \\ r \\ r \end{cases}$	W131 S149 L426.2 (196.8)
"	"	H x	V中	22	"	"	"	22	灰褐色 良	沈線文	S139 W149 L416.2 (196.8)
"	"	H x	VI	23	"	"	"	23	灰褐色 良	無文	W165 N224 L357.3 (176)
"	"	H _x	V	24	"	"	"	24	褐色 良	$L.R$ $\begin{cases} \ell \\ \ell \end{cases}$	W 0 N135 L345.4 (176)
"	"	H x	V	25	"	"	精	25	朱塗 良	$R.R \begin{cases} r \\ r \\ r \end{cases}$	
"	"	H x	V	26	口縁欠	"	精(朱 塗)	26	朱塗(灰黒色) やや良	無文	
"	"	H x	V中	27	完	"	粗	27	灰褐色 やや良	L.R { \(\ext{\ell} \)	E142 S130 L414.5 (197,3)
	*		 " Hx 	" " Hx V 中 " " Hx V 中 " " Hx V 中 " " Hx V " " Hx V 中 " " Hx V " " " Hx V	* * Hx V中 11 * * Hx V中 12 * * H1 VI 13 * * Hx V中 14 * * Hx V中 15 * * H2 Ⅲ上 16 * * Hx V中 17 * * Hx V中 19 * * Hx V中 20 * * Hx V中 21 * * Hx V中 22 * * Hx V 23 * * * Hx V 24 * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * *	 パ パ Hx V中 11 完 パ 州x V中 12 完 パ 州 1 VI 13 口縁欠 パ 州x V中 14 完 パ 州x V中 14 完 パ 州x V中 15 パ パ 州x V中 17 一部欠 パ 州x V中 17 一部欠 パ Hx VI 18 復原 パ 州x V中 19 パ パ Hx V中 20 パ パ Hx V中 21 パ パ 州x V中 21 パ パ 州x V中 22 パ パ 州x V中 23 パ パ 州x V 24 パ パ 州x V 25 パ パ 州x V 26 口縁欠 		() 日x () 日x <td> ***</td> <td># 日 V 日 V中 日</td> <td>8 金 H1 V 10 一部 C2 相(木塗) 10</td>	***	# 日 V 日 V中 日	8 金 H1 V 10 一部 C2 相(木塗) 10

	8	壺	H _x	V	38	完	C 2	精	38	朱塗 不良	$R.L \left\{ \begin{array}{l} r \\ r \\ r \end{array} \right\}$	N167 W22	L342 (176)
	"	"	H _x	V	39	"	"	"	39	朱塗 不良	無文	E80 N230	L366.5 (176)
	"	"	H 1	V上	40	"	"	"	40	朱塗 良	"	E109 S10	L327 (198)
	"	,,	H 2	G∭	41	"	"	"	41	黄褐色 良	撚糸文	W120 E 60	L397.5 (150.3)
	9	"	H x	V上	42	"	C 2 A	"	42	朱塗 やや良	刻目文、曲線文 矢羽根状文	E50 N70	L340.2 (198)
Ī	8	"	H _x	V (?)	43	復元	C 2	精(朱塗)	43	朱塗 不良	摩滅		
	10	"	H x	VI	28	"	A	粗	28	灰黄黒色 良	無文		
	"	"	H x	V中	29	口縁欠	"	"	29	灰褐色 良	"	W81 S158	L430.8 (196.8)
	"	"	H x	V	30	口 縁 一部欠	<i>y</i> ·	"	30	灰黒褐色 良	撚糸文	W72 N197	L359.7 (176)
	"	"	H 2	Ш	31	完	"	"	31	灰黒褐色 良	$R.L \left\{ egin{matrix} r \\ r \\ r \end{array} \right.$	W118 S39	L432 (150.3)
	"	"	H 2	Ш	32	復元	"	"	32	灰黄色 やや良	無文		
	"	"	H x	V	33	"	"	"	33	灰褐色 良	$L.R$ $\left\{ egin{aligned} \ell \\ \ell \end{aligned} \right\}$		
	"	"	H _x	V	34	完	"	"	34	灰褐色 良	無文	E86 N224	L378.5 (176)
	"	"	Нх	V	35	"	"	"	35	灰黒褐色 良	$L.R$ $\left\{ egin{aligned} \ell \\ \ell \end{aligned} \right\}$	E115 N180	L377.4 (176)
	"	"	H x	V	36	"	"	精	36	赤褐色 良	$L.R$ $\left\{ egin{aligned} \ell \\ \ell \end{aligned} \right\}$	W65 N68	L325.5 (198)
	"	"	H x	V	37	U :	"	"	37	灰黄色 良	$L.R$ $\left\{ egin{aligned} \ell \\ \ell \end{aligned} \right\}$	N 220 W 0	L349.2 (176)
	"	注口	H 1	IV	1	一部欠	C 2	"	1	黒褐色 良	刻目、線刻	E55 S87	L489 (153)
	"	"	H x	V	2	復元	"	"	2	黒褐色 やや良	L.R { {	E159 N17	L336.9 (196.8)
	"	坏	Нх	VI中	1	"	土師器	粗	1	褐色 良	無文		

〔表	6]		1	(第1 ⁻	~第9	次発	屈調查	検出	遺構〕		<u> </u>	
	0)		1975	1983	1984	1985	1986	87	1988	1989	1990	
遺	構	名次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合 計
①住	居	址			1 -	- 1 -	-1.1 2.	3.	5.	7	5	23
②土		壙	1.	9			5.	23		3	9	50
③小	士	塁			1.							1
④#		戸				1.		1			1.	3
5	溝						3.	1	7		3	14
⑥ カ	マト	、址			1 -	- 1 1.	1.		4.		1	7
⑦地	床	炉	2.	2.	4.				5.			13
8	堀		1							1		1
9柱		穴	0		0	, 0	0	0	0	0	250	250+ α
10異	形遺	建 構		0							1	ĺ

0=多数ありの意である。

観音林遺跡出土、石器・石製品等一覧表(第9次調査) 〔表7〕

種別	類別	S.P.L,Na	No	計 測 値 (長径×最大巾×器厚)cm	重量 (g)	石 質	Ì	出土	区・原	層位
			1	2.0×1.3×0.4	0.5	珪 質 頁	岩	H 1	E135 S 60	IV
	:		2	2.8×2.4×0.55	2.0	"		H 1	W20 S 260	V
石 鏃			3	$2.5 \times 1.4 \times 0.5$	1.0	"		H 1	E16 S90	IV
<u>(</u> 1	1		4	2.7×1.4×0.4	1.0	"		H 2 G		Ш
(三角鏃)	1		5	1.9×1.1×0.3	0.5	玉	髄	H 1	E 170 N 156	IV
鏃			6	2.3×1.3×0.5	1.0	珪 質 頁	岩	H 1		IV
			7	$2.6 \times 1.2 \times 0.2$	0.5	"		Н		?
l			8	3.3×1.4×0.5	1.0	"				表採
			1	$2.4 \times 0.85 \times 0.4$	0.5	"		H 1	S 80 W170	IV
			2	$2.6 \times 1.5 \times 0.5$	1.0	黒 曜	石	H ₂ G	E 184	Ш
			3	$2.5 \times 1.1 \times 0.4$	0.5	珪 質 頁	岩	H 1	S 157 E 107	IV
			4	$3.9 \times 1.5 \times 0.6$	2.0	"		Нх	E170 N170	V
			5	$2.8 \times 1.25 \times 0.35$	0.8	"		H ₂ G	W200	Ⅲ下
			6	3.2×1.8×0.5	1.5	"		H 1	E 50 S 78	N
			7	3.7×1.5×0.5	1.0	"		H 1	E 187 S 168	IV
		1	8	3.2×1.3×0.6	2.0	"		H 1	E73 S139	IV
		:	9	3.2×1.3×0.5	1.0	"		Н	W67 N115	V中
石 鏃			10	$2.9 \times 1.4 \times 0.45$	1.0	"		H ₁	E 161 S 210	V
<u> </u>			11	5.2×1.5×0.5	3.0	"		H 1	S74 E102	IV
(二等辺三角鏃)	2		12	4.4×1.4×0.7	3.0	"		H 1	E 186 S 90	IV
三五			13	2.8×1.0×0.5	1.0	"		H ₂ G	W150 S134	?
鏃			14	3.8×1.3×0.5	2.0	"		Н		?
			15	$3.4 \times 0.9 \times 0.5$	2.0	,		Н		?
			16	2.8×0.9×0.4	0.5	"		Н		?
			17	2.4×1.3×0.6	1.0	"		Н		?
			18	3.7×1.2×0.5	2.0	"		Нх		Ш
			19	$3.5 \times 1.4 \times 0.45$	2.0	"				表採
			20	2.5×1.4×0.4	1.0	"				表採
			21	3.2×1.4×0.65	2.0	"		H ₂ G		Ш
			22	2.5×1.5×0.4 一部欠	1.0	"		H ₂ G		Ш
			23	3.4×1.3×0.5	1.0	"				表採

				24	4.7×1.1×0.85	3.0	珪	質	頁	岩			表採
	2			25	5.3×1.6×1.0	6.0		4	,				表採
			Ī	1	4.9×7.5×1.5	33.0		,	,		Hx	W60 N10	Ш
				2	4.7×5.6×1.3	22.0		4	,		Hx	W102 N7	V
				3	4.6×7.1×1.0	33.0		, 1	,		H 1	E154 S146	IV
				4	5.5×7.9×1.3	42.0		4	,		Hx	E 149 N 74	V
				5	6.0×5.8×1.1	28.0		4	,		Нx	W118 N109	V
				6	4.8×6.4×1.3	28.0			>		Hx	E 162 N 87	V
				7	6.2×7.1×0.7	26.0		4	,		Hx	E115 N85	₩上
				8	6.2×8.4×1.6	58.0		4	,		Hx	E 176 N 162	V
				9	$3.8 \times 4.8 \times 0.9$	14.0	頁			岩	H ₁ G	W57 N30	Ⅲ下
◆井 Ⅲ◇水川 卯巳	2			10	5.8×3.0×0.8	12.0	珪	質	頁	岩	H ₁ G	W57 N30	Ⅲ下
横形削器	2			11	4.5×7.1×1.2	22.0		,	,		H ₂ G	W180 S52.5	Ш
				12	3.0×5.8×1.0	13.0	頁			岩	H 2 G	W180 S52.5	Ш
				13	$3.5 \times 5.1 \times 0.8$	13.0	珪	質	頁	岩	H 2 G	W180 S 52.5	Ш
		1		14	$3.5\times4.2\times0.6$	6.0			,		H 1	E162 S167	IV
			表	15	$5.3 \times 5.2 \times 0.9$	20.0		,	,		H ₂ G		Ш
			示せ	. 16	3.5×4.1×1.1	10.0		,	,		H ₂ G		Ш
			ず	17	3.2×4.3×1.1	13.0	頁			岩	H 2 G		Ш
				18	$2.6 \times 5.3 \times 0.6$	6.0	珪	質	頁	岩	H 2 G		Ш
				19	$2.4 \times 3.4 \times 0.9$	6.0	玉			髄	Hx	E115 N85	N上
				20	4.6×8.8×0.6	39.0		,	,				表採
				1	4.6×3.8×0.5	11.0	珪	質	頁	岩	H 2 G	W200 S 60	Ⅲ下
			Ī	2	4.2×2.2×1.1	9.0		,	,		Hx	W79 N110	V中
			Ī	3	6.1×2.8×1.0	16.0	頁			岩	36G		?
			Ī	4	$3.7 \times 2.6 \times 0.95$	10.0	珪	質	頁	岩	H 1	S 52 E 155	IV
縦形削器	1		Ī	5	$5.6 \times 1.9 \times 0.4$	4.0		,	,				表採
				6	7.7×5.1×1.3	48.0	頁	.,.		岩	H 2 G		Ш
				7	6.8×4.0×1.5	26.0	珪	質	頁	岩	Hx	E 143 N 95	V中
				8	$8.8 \times 2.9 \times 0.8$	24.0	頁			岩			表採
				9	$10.5 \times 5.2 \times 1.3$	71.0	珪	質	頁	岩			表採
				1	$3.6 \times 2.3 \times 1.1$	6.0		,	,		H 1	W165 S103	IV
不定形 制器			Ì	2	$7.6 \times 3.6 \times 1.0$	25.0		,	,		H 1	W165 S103	IV
110 HH				3	$3.6 \times 2.6 \times 1.1$	10.0		,	,		H 1	W165 S103	IV

			4	6.1×7.4×1.2	43.0	珪	質	頁	岩	G 9	N 206北 W 250西	Ⅱ下
			5	6.9×4.5×1.9	50.0			"	-	H ₂ G	W200西 S43.5南	ⅰⅢ下
			6	3.7×3.0×1.0	15.0		,	"		"		"
			7	3.1×5.7×1.0	18.0			"		"		"
			8	4.2×3.9×1.2	20.0			"		"		"
			9	4.7×4.8×1.3	20.0			"		Hx		V
			10	$3.7 \times 5.4 \times 0.8$	16.0			"		H ₂ G	S 200 E 43.5	Ⅲ下
			11	8.9×5.2×1.9	92.0			"		H 2 G	S 200 E 43.5	Ⅱ下
			12	$6.9 \times 9.2 \times 2.2$	122.0	流	á	汶	岩	Hx		V
			13	5.0×7.5×1.3	45.0	珪	質	頁	岩	Н		IV
			14	4.1×5.4×1.1	23.0			"				表採
不 定 形 削 器	3		15	3.8×3.0×1.0	9.0			"				表採
133 100			16	3.6×5.3×1.4	23.0			"		Hx		V
			17	6.6×4.7×0.6	28.0			"		14G		I
			18	$3.9 \times 4.7 \times 0.9$	16.0			"		Hx		N
			19	$7.6 \times 9.5 \times 2.3$	147.0			"		Н		IV
			20	6.1×2.8×1.0	17.0			"		G10		Ⅱ下
		2	21	6.6×2.8×1.0	18.0			"		Hx		V中
			22	6.2×3.9×1.1	23.0	,	,	"		Hx	W84 S 211	Vψ
			23	5.3×3.2×0.75	10.0			"		Hx	W93 N 67	V
			24	5.6×3.2×1.1	17.0			"		Hx	W93 N 67	V
			25	4.7×3.8×1.15	19.0			"				表採
			26	5.6×5.8×1.1	34.0			"				表採
LLI AKARII BO			1	5.2×3.7×0.85	18.0			"				表採
円形削器	4		2	$3.4 \times 2.75 \times 0.9$	8.0	玉			髄	Нх	W93 N67	V
			1	4.1×1.75×0.65	4.0	珪	質	頁	岩	H 1	W24 N10	V
			2	$3.8 \times 2.1 \times 0.8$	6.0			"		Нх	W163 N192	IV
			3	4.6×3.0×1.0	14.0			"		Нx	W163 N192	IV
			4	6.5×2.4×1.2	20.0			"		H 2 G	S5 E117	Ш
搔 器	1		5	$7.3\times2.7\times1.8$	42.0			"		H ₂ G	S 88 W 56	Ш
			6	$9.9 \times 5.0 \times 2.5$	115.0			"		H ₂ G	N 134 S 109	Ш
			7	5.5×3.15×1.2	22.0			"		H 1	E77 S113	IV
			8	4.7×4.5×1.2 一部欠	32.0			"		Hx	E 103 N 148	V中
			9	6.6×4.0×1.6	42.0			"		H 1	E 128 N 160	IV

				10	4.3×2.6×1.1	11.0	珪 質 頁 岩		表採
				11	4.8×3.9×1.3	16.0	"	G13 N228 W225	
				12	3.8×5.1×0.95 先のみ	14.0	"		表採
				13	4.7×2.6×1.7	18.0	めのう		表採
				1	$2.95 \times 1.85 \times 0.6$	3.0	珪 質 頁 岩	8 G	∏ b
				2	$3.9 \times 2.4 \times 0.9$	7.0	"	E 80 N 172	Ш
				3	$4.5 \times 2.65 \times 0.75$	8.0	"		表採
石 槍				4	6.4×2.3×0.7	10.0	黒 曜 石	Hx	V上
(point)				5	$3.5 \times 2.9 \times 0.9$	9.5	珪 質 頁 岩		表採
				6	1.8×1.7×0.5 一部欠	1.0	"		表採
				7	2.6×1.6×0.85	3.0	"		表採
				8	3.3×1.9×1.1	6.0	"		表採
				1	$3.9 \times 3.5 \times 1.6$	38.0	ホルンフェルス	H 2 G W162 S 156	Ш
			Ī	2	4.5×3.3×1.4	26.0	頁 岩	"	"
				3	$3.9 \times 3.8 \times 2.8$	74.0	花崗閃緑岩	"	"
				4	4.2×3.0×1.7	30.0	ホルンフェルス	Hx	V
	1	3		5	4.7×3.8×1.3	35.0	"		表採
- w				6	5.6×2.8×1.0	23.0	"		"
石 斧				7	5.2×2.7×1.2	23.0	"		"
				8	$7.0 \times 4.2 \times 2.7$	122.0	角 閃 玢 岩	Hx	Ш
				9	$7.1 \times 3.8 \times 2.6$	115.0	花崗閃緑岩	Hx E77	V中
				10	$8.6 \times 4.1 \times 2.5$	125.0	閃 緑 玢 岩		表採
·				11	$10.8 \times 6.0 \times 2.9$	319.0	ホルンフェルス		表採
				12	2.7×4.7×1.2 一部欠	16.0	n'		表採
				1	$3.3 \times 0.7 \times 0.5$	0.5	珪 質 頁 岩	H ₁	IV
				2	$2.7 \times 0.6 \times 0.4$	0.2	"	H ₁ G ^{S93} _{E190}	IV
石 錐 (dril)				3	6.0×1.6×0.5	2.0	玉 髄	H 1	V
(drii)				4	$5.0 \times 2.7 \times 0.95$	4.0	珪 質 頁 岩	H ₁ E ₄₂ S ₈₀	V
				5	$5.3 \times 4.2 \times 0.6$	7.0	"	H 2 G	Ш
			Ť	1	15.2×1.4×1.3	54.0	粘 板 岩	H ₁ W143 N120	IV
				2	6.5×2.1×1.3	22.0	千 枚 岩	H 1	V
石 棒		4		3	17 5×4.4×1.4	164.0	"	Hx W146	IV
			1	4	8.5×2.8×2.3 \接	57.0	粘 板 岩	Hx N64	V
				5	10.0×2.8×2.4 合	83.0	"	H _X E ₁₁₁ N ₆₄	V

	T	6	6.5×2.6×1.4	38.0	粘 板	岩	Нх		V
	4	1	14.5×5.5×2.9	196.0	"		Hx		V中
石刀		2	13.9×4.0×1.3	116.0	"		Hx	W52 N104.5	V
線刻石		1	9.0×4.6×1.4	40.0	泥	岩	H ₁ G	S 0 E 157	Ⅲ下
/82	5	1	113.0×7.1×2.7	189.0	頁	岩	36	N 110 W25	I下
岩 偶		2	$8.7 \times 9.5 \times 3.3$	205.0	"		Hx	E 55 N 105	V中
穿孔のある		1	4.4×4.5×1.4	22.0	細粒凝灰	岩	H 1	E 167 N 133	IV
石製品	4	2	4.6×3.6×2.0	24.0	頁	岩	14	W345 N 30	I
(自然石)		3	$4.9 \times 4.1 \times 3.1$	26.0	泥	岩	Hx	E 176 N 40	Vф
大形石棒		1	22.3×9.9×8.2	2,770	熔結凝灰	岩	H 1	W115 N 50	VI
		1	$7.2 \times 5.6 \times 2.0$	93.0	"				表採
		2	8.9×7.5×1.5	146.0	流紋	岩	H ₁		N
		3	6.6×6.4×1.4	63.0	頁	岩	H 1		IV
		4	$8.7 \times 5.9 \times 3.1$	250.0	玉	髄	H 1		V
円盤状	6	5	7.0×5.9×1.5	80.0	流紋	岩	Hx		IV
石製品		6	$9.7 \times 8.9 \times 4.3$	395.0	熔結凝灰	岩	H ₁		V
		7	$5.0\times4.4\times2.2$	69.0	"		Hx		Ш
		8	6.5×5.6×2.0	69.0	"		H ₁		V
		9	$10.4 \times 9.6 \times 2.7$	234.0	粗粒凝灰	岩	Н		IV
		10	8.8×8.1×3.6	307.0	熔結凝灰	岩	H ₁		·V
		1	$1.4 \times 1.2 \times 0.7$	0.2	細粒凝灰	石	H ₂ G	E197 S10	Ш
		2	$0.8 \times 0.8 \times 0.45$	0.1	"		Hx		IV
穿孔小玉		3	$0.9 \times 0.9 \times 0.45$	0.1	"		Hx		IV
	7	4	$0.8 \times 0.8 \times 0.6$	0.1 以下	"		H ₁	E124 S48	V上
	7	5	$0.7 \times 0.7 \times 0.35$	0.1 以下	"		Hx	E78.5 S191	V中
		1	$1.6 \times 0.9 \times 0.9$	1.0	碧	玉	H 2 G		Ш
小 玉		2	1.2×1.0×0.75	0.5	細粒凝灰	石	H ₂ G	W191 S150	Ш
		3	$1.1 \times 0.8 \times 0.6$	0.1	"		Hx	E146 N13	IV
		1	$9.7 \times 7.7 \times 4.7$	575.0	花崗閃緑	岩	Hx		IV
- AE		2	$9.7 \times 6.9 \times 2.9$	196.0	熔結凝灰	岩	H 1		V
石 錘		3	6.1×4.0×1.8	65.0	安 山	岩	H ₂ G	W77 S87	Ⅲ上
	8	4	$9.3 \times 6.5 \times 4.5$	394.0	花崗閃緑	岩	X 2		?
半円形		1	10.0×8.8×1.8	190.0	熔結凝灰	岩	Hx		IV
打製扁平 器		2	11.3×9.5×1.4	134.0	頁	岩	Нх		IV

			3	14.2×8.8×5.1	650.0	ホルンフェルス	G10·14	П.
			4	11.8×10.6×3.5	494.0	熔結凝灰岩		
			1	5.7×2.8×1.0	22.0	頁 岩	H ₁	Ш
			2	8.7×5.4×1.5	115.0	"	H ₁	IV
			3	7.2×4.8×1.8	80.0	珪 質 頁 岩	Hx	V
			4	7.3×4.9×1.3	82.0	頁 岩	H 1	IV
			5	4.0×3.1×1.1	17.0	"	Hx	V
			6	7.4×5.2×1.3	62.0	"	Hx	V
		8	7	$7.0 \times 4.8 \times 1.2$	60.0	"	H ₁	IV
			8	6.5×4.6×1.3	57.0	"	Hx	V
			9	8.6×6.1×1.7	133.0	"	H ₁	N
擦痕の			10	5.4×3.9×1.1	37.0	"	Hx	V
ある扁平			11	6.7×3.5×1.2	43.0	"	Hx	V
石 器			12	$6.2 \times 4.2 \times 1.0$	40.0	"	H 1	V
			13	5.6×4.4×1.4	58.0	"	H 1	IV
			14	$5.2 \times 4.4 \times 1.1$	22.0	泥岩	H 1	IV
			15	$9.7 \times 3.6 \times 1.4$	77.0	流 紋 岩	Hx	Ш
			16	$7.7 \times 3.0 \times 1.2$	43.0	"	Hx	Ш
			17	$9.2 \times 4.9 \times 2.1$	128.0	珪 質 頁 岩	Hx	V
			18	11.0×5.4×1.6	138.0	チャート	H 1	IV.
			19	8.8×5.5×1.9	144.0	砂岩	Hx	IV
		13	20	$8.6 \times 5.7 \times 1.4$	107.0	頁 岩	Hx	Ш
		13	21	8.4×5.0×1.9	120.0	流 紋 岩	H ₁	V
			22	$11.2\times5.5\times2.4$	253.0	頁 岩	38 G	?
			23	6.2×5.5×1.5	62.0	砂岩	38G	?
			24	$4.7 \times 2.5 \times 0.7$	12.0	頁 岩		表採
			25	$5.7 \times 3.9 \times 1.65$	50.0	流 紋 岩	Hx	V
			1	$6.7 \times 7.6 \times 1.9$	33.0	浮 石	H 2 G W1	80西 Ⅲ下 7南
			2	$7.6 \times 6.8 \times 4.2$	52.0	"	H 1	IV
			3	$12.6 \times 8.9 \times 4.3$	148.0	"	H 1	V
浮 石	3	3	4	$6.7 \times 4.7 \times 2.2$	15.0	"	H 1	V
			5	6.0×4.3×1.9	15.0	"	H 1	V
			6	8.4×5.3×3.4	30.0	"	H ₁	V
			7	9.8×6.0×1.6	33.0	"	H 2 G	?

			8	13.0×9.6×4.4	120.0	浮 石	H 1 IV
			9	8.2×6.8×2.3	29.0	"	H _X
		10	6.0×4.7×1.7	9.0	"	表採	
			11	$9.5 \times 6.2 \times 4.2$	44.0	"	"
			12	$9.2 \times 5.5 \times 2.6$	40.0	" .	"
			13	$10.4 \times 8.5 \times 4.0$	73.0	"	"
			14	$7.1 \times 4.9 \times 2.1$	10.0	"	"
浮 石	,	0	15	15.7×8.1×6.2	216.0	"	"
浮 石	3	9	16	13.8×8.8×5.0	127.0	"	"
			17	$9.4 \times 9.3 \times 3.9$	52.0	"	"
			18	$13.0 \times 5.8 \times 4.3$	70.0	"	"
			19	$8.0 \times 5.8 \times 3.4$	48.0	"	"
			20	$7.6 \times 4.6 \times 1.9$	18.0	"	"
			21	8.8×3.7×3.3	30.0	"	"
			22	6.3×4.8×1.8	30.0	"	"
		(表示せず)*	23	$9.6 \times 7.7 \times 1.4$	21.0	"	H 2 III
			1	$7.4 \times 6.5 \times 3.8$	246.0	流 紋 岩	H 1 V
			2	8.4×7.4×4.7	407.0	花崗閃緑岩	H _X
			3	6.4×5.3×2.4	117.0	"	H ₁ IV
			4	$7.0 \times 6.7 \times 4.1$	280.0	"	H ₂ G ?
			5	8.2×7.8×6.1	532.0	チャート	H _X IV
			6	6.9×5.9×5.4 朱塗	312.0	熔結凝灰岩	M14 I 中
			7	10.9×6.3×3.6	381.0	花崗閃緑岩	H ₁ V
			8	$7.0 \times 4.8 \times 2.3$	89.0	熔結凝灰岩	H 1 V
タタキ石		10	9	$8.8 \times 6.4 \times 4.7$	358.0	頁 岩	H _X
		10	10	$8.9 \times 6.5 \times 3.7$	313.0	熔結凝灰岩	H _X
			11	6.4×7.8×2.7	152.0	流 紋 岩	H 1 IV
			12	$7.3 \times 7.0 \times 4.2$	296.0	花崗閃緑岩	H 2 G
			13	11.3×8.0×2.4	345.0	安 山 岩	H _X
			14	$7.4 \times 6.5 \times 2.8$	200.0	花崗閃緑岩	表採
			15	$8.0 \times 3.9 \times 2.2$	102.0	珪 質 頁 岩	H 1 IV
			16	8.2×6.7×4.2	337.0	安 山 岩	表採
			17	$8.6 \times 5.1 \times 2.9$	203.0	流 紋 岩	"
			18	4.4×3.6×2.9	58.0	珪 質 頁 岩	"

		10	C CYE EVO 4	100 0	法 始 山	ц т
		19	6.6×5.5×3.4	180.0		H IV
	10	20	10.8×7.4×3.9	472.0		表採
		21	7.4×6.3×3.7	236.0		H _X IV
		22	$9.2 \times 8.8 \times 6.3$	735.0		H _X
タタキ石		23	$6.5 \times 5.6 \times 2.3$	128.0	"	10
		24	$114.\times8.7\times5.6$	880.0	"	H IV
		25	9.3×7.8×7.1	770.0	"	H 1 V
		26	$12.6 \times 9.1 \times 4.9$	890.0	"	H 1 IV
		27	$12.9 \times 7.1 \times 3.0$	456.0	"	表採
		28	$18.0 \times 9.6 \times 5.1$	683.0	熔結凝灰岩	H 1 IV
		1	14.1×7.1×2.8 ft	218.0	シ ル ト 岩	?
		2	11.2×5.3×4.1 "	254.0	熔結凝灰岩	H ₁ IV
	11	3	11.8×9.7×4.0 "	496.0	粗粒凝灰岩	H 2 G
		4	8.5×6.5×2.2 "	89.0	頁 岩	H 2 G
		5	11.9×10.1×3.5 *	278.0	細粒凝灰岩	H ₁ V
		6	12.0×6.6×2.7 "	212.0	"	H 2 G E 184 II
		7	9.6×7.9×5.2 "	595.0	閃 緑 玢 岩	H _X IV
		8	9.4×8.6×6.1 "	345.0	泥岩	H 2 G
		9	11.7×9.9×5.5 "	608.0	熔結凝灰岩	表採
		10	9.7×8.7×4.8 "	282.0	泥岩	H ₁ IV
		11	16.0×8.1×4.3 *	397.0	"	表採
		12	12.6×7.0×4.9 "	256.0	"	H IV
クボミ石		13	12.2×9.1×6.3 *	603.0	熔結凝灰岩	H 2 G
		14	12.5×6.3×4.5 *	380.0	頁 岩	H _X IV
		15	9.1×6.3×4.8 *	225.0	"	H 1 V
		16	11.7×9.5×6.9 *	558.0	泥岩	H 1 V
		17	9.6×7.1×5.1 "	115.0		H 1 V
		18	12.6×8.4×4.1 "	311.0		H ₂ G
	12	19	11.9×6.8×4.1	282.0		H _X V
		20	8.8×5.4×3.0 "	120.0		H ₂ G
		21	15.0×7.6×4.4 "	408.0		H ₂ G
		22	*		//	
				92.0		
		23	9.7×4.9×2.8 "	115.0		H ₁ V
		24	8.8×5.1×2.2 "	50.0	泥岩	H 1 N

		25	13.1×8.6×6.1 pit	345.0	泥岩	H 2 G
		26	10.5×7.1×4.4 "	363.0		H ₁ IV
クボミ石	12	27	11.0×6.4×3.0 "		熔結凝灰岩	H ₂ G
		28	9.4×6.1×4.2 *	88.0	泥岩	H ₁ V
		29	19.9×13.4×6.9 *	1,720	熔結凝灰岩	H 1 IV
		1	5.0×4.4×3.6	108.0	チャート	H _X IV
		2	$6.9 \times 7.6 \times 6.2$	487.0	珪 質 頁 岩	H 1 IV
		3	$5.3 \times 4.9 \times 4.0$	148.0	"	H 2 G
		4	6.0×5.8×4.9	141.0	細粒凝灰岩	H ₁ V
石弾	6	5	$5.2\times4.5\times2.7$	90.0	チャート	H ₁ V
		6	5.5×4.8×4.3	144.0	熔結凝灰岩	表採
		7	5.6×5.3×3.8	63.0	泥岩	表採
		8	$5.0 \times 4.9 \times 3.4$	70.0	細粒凝灰岩	H 2 G
		9	8.0×7.8×6.9	361.0	粗粒凝灰岩	40 N130 ?
		1	2.4×1.6×1.2	4.0	碧 玉	表採
		2	$2.7 \times 2.4 \times 1.5$	12.0	"	"
		3	$3.1 \times 2.5 \times 1.9$	12.0	"	"
		4	$3.0 \times 2.7 \times 1.9$	13.0	"	"
		5	$2.5 \times 1.9 \times 1.3$	6.0	"	"
		6	2.8×2.4×1.8	7.0	"	"
		7	3.0×1.3×1.1	4.0	"	"
		8	2.7×1.8×1.0	3.0	"	"
		9	$3.3 \times 2.9 \times 1.4$	12.0	"	"
9.4.6. 7	4	10	$4.6 \times 2.7 \times 2.1$	24.0	"	"
緑色原石		11	6.4×4.8×1.5	24.0	"	"
		12	$3.5 \times 2.5 \times 2.6$	20.0	"	"
		13	4.3×3.3×2.3	25.0	"	"
		14	5.4×3.5×1.5	20.0	細粒凝灰岩	H ₁ V
		15	$4.9 \times 3.9 \times 2.85$	39.0	碧 玉	表採
		16	6.8×4.6×2.8	66.0	"	"
		17	4.9×4.3×2.4	39.0	"	"
		18	6.0×4.7×2.2	56.0	"	"
		19	$5.9 \times 4.9 \times 3.6$	83.0	細粒凝灰岩	"
		20	$5.9 \times 5.5 \times 4.1$	97.0	"	H 2 G

			21	$8.2 \times 4.4 \times 2.7$	89.0	碧 玉	H ₂ G	Ш
			22	7.5×5.8×3.7	120.0	"	H ₁	v
63.6 FF		_	23	8.2×5.4×4.7	158.0	細粒凝灰岩	"	"
緑色原石 		7	24	$9.9 \times 8.4 \times 4.8$	340.0	碧 玉	" E131 S101	"
			25	11.2×7.4×4.7	321.0	, "		表採
			26	$12.4 \times 6.6 \times 2.35$	128.0	細粒凝灰岩	Hx	Ш
			1	$13.5 \times 12.3 \times 4.0$	795.0	"	H ₁	Ш
		13	2	$13.6 \times 13.0 \times 5.5$	935.0	安 山 岩	H 2 G	Ш
			3	11.0×8.0×2.3	169.0	細粒凝灰岩	Н	IV
			4	$12.0 \times 10.1 \times 4.4$	648.0	安 山 岩	Hx	V
石 皿			5	11.5×8.9×6.1	655.0	流 紋 岩	H 2 G	Ш
			6	$10.9 \times 7.9 \times 2.3$	196.0	細粒凝灰岩	H 2 G	Ш
			7	8.8×7.7×2.9	245.0	熔結凝灰岩	H ₁	IV
			8	$7.7 \times 6.6 \times 3.7$	232.0	頁 岩	G10·14	П
			9	$10.0 \times 8.4 \times 3.7$	363.0	粗粒凝灰岩	H ₁	V
鉄 製 品			1	5.4×5.0×4.6	190.0		10	I
Δ4 3±		10	1	$6.6 \times 6.4 \times 2.2$	62.0		Hx E93	?
鉄		2	$5.4 \times 4.7 \times 2.4$	41.0			表採	

[表8] 観音林遺跡(第9次)出土石器総活表(総計295)

①石鏃	33 個	11.19 %	⑪石製品	3	1.02
② 削器	57	19.32	12)円盤状石器	10	3.39
③ 搔器	13	4.41	①3小玉類	8	2.71
④ 石槍	8	2.71	14半円形扁平石器	4	1.36
⑤石斧	12	4.07	①擦痕のある扁平石器	25	8.48
6 石錐	9	3.05	16タタキ石	28	9.49
⑦石棒	7	2.37	⑪クボミ石	29	9.83
8石刀	2	0.68	18石弾	9	3.05
9線刻石	1	0.34	19緑色原石	26	8.81
⑩岩偶	2	0.68	20石皿	9	3.05

[表9] 観音林遺跡(第9次)出土岩質総活表

①珪質頁岩	107	36.27	② めのう	1	0.34
②玉髄	6	2.03	13砂岩	2	0.68
③ホルンフェルス	8	2.71	14シルト岩	1	0.34
④花崗閃緑岩	18	6.10	15碧玉	22	7.46
⑤ 泥岩	16	5.42	16熔結凝灰岩	23	7.80
⑥干枚岩	2	0.68	①粗粒凝灰岩	4	1.36
⑦粘枚岩	6	2.03	18黒曜石	2	0.68
8細粒凝灰岩	20	6.78	19チャート	4	1.36
9流紋岩	12	4.07	20閃緑玢岩	2	0.68
10頁岩	33	11.19	②角閃玢岩	1	0.34
⑪安山岩	5	1.70			

☆観音林遺物出土、陶磁器等一覧表(第 9 次調査) 〔表 $\frac{1}{1}$ 〕

種 別	類別	P.L,Na	No.	計 測 値 (長径×最大巾×器厚) cm	重 量 (g)	石質	出土区・層位
陶磁器	陶器	5	1				G13. Ⅲ
			2				G40. I
	染付	5	1				G10. I
			2				G10. I
	青磁		1				G43.井戸 L-246.5 (169)

「観音林遺跡」出土・骨類調査表

〔表10〕

		[観音林遺跡] 出土	・肯類調査表	[表10]
(第9次)			[調査者]	金 子 浩 昌]
資料 No.	出土区・層	記録	出土状況	備考
1)	層 G H ₃ . Ⅲ	火葬人骨(指骨)	①は、晩期の土器(C ₁ ~A式)、 十腰内 I・II式と混在して出 土。	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2	G ₁₃ . [獣骨細片(焼骨)	②は、2~3.5mの小形住居址の 床面出土・土師器を伴う。	・出土、土器は、「十腰 内 I ・ II 式」「大洞C ₁ ~ A 式」 が混在する。
3	$GH_1 \sim H_2. \cdot H_x$ V	獣骨細片・鳥骨〈種不明〉片 (焼骨)	③は、GH ₁ ・H ₂ ・H _x の各グリットのV層に散布。	・出土状況は、まとま りがなく点在して出 土。
4	G ₄₂ . I V下	中型獣 焼骨 獣骨細片(切断されたような痕跡がある)	④は、土師器・須恵器に伴出。 土壙の床面より出土。	・カマドを備えた土師器の住居址 に伴う、土壙内より単独出土。
(5)	/ G ₁₃ . Ⅱ a (土壙内)	頭蓋小片 2 (多分猷骨・焼骨)	⑤は、土師器と伴出。 館址内の(土壙)	・堀をまわした館址内の径70cmの 小土壙内より出土。
6	$GH_1 \cdot H_2 \cdot H_x$ V	イノシシ、中節骨、他に骨器の一部ではない と思われる小片あり。イタチ尺骨(左)片。 カエル類腰骨片、焼骨	⑥は、晩期の土器(C ₁ ・C ₂ ・ C ₂ ~A・A式土器に伴出散布	•①~③に同じ。

(b) 第9次発掘調査で検出した遺構(第8~18図)

第9次発掘調査では、次の遺構が検出された。住居跡5基、カマド跡1基、土壙9基、溝3基、異形遺構1基、ピット250、井戸1基で、表6の通りであるが、この順に各遺構について述べることにする。

1)住居跡(第8~18図)

第9次発掘調査では、検出順に、1号・2号・3号・4号・5号とした住居跡を検出した。

これらの住居跡は、いずれもベースであるV層を掘り込んだ状況で検出されたものであるが、このうち、2号・3号は、第8次発掘調査で、6号・7号として、完掘せず第9次発掘に残したものである。

1号住居址(第8・9・10図)

この住居址は、AC-F区、36グリットを中心にして、35・39・40・40・5・22の各グリットのV層上面で検出した。

なお、第8次発掘調査で、⑤グリットで1号住居址の一部を検出していたものである。 この住居址は、長径8.60m、短径7.0m、深さ約20cm前後の円形に近く、南西側に出入口を備えたプランである。

床面、壁面は黄褐色または赤褐色の粘土質ロームで、乾燥するとかたく、ぼろぼろになり検出に苦労した。壁は緩い傾斜をもって立ちあがっている。炉、かマド、周溝は検出されなかった。大形の住居址でありながら、柱穴としてのピットの確認はむずかしいが、一応ピット②を中心にピット⑤・①・③・②を対応させてみた。この住居址の年代を決定する資料の出土はなかったが、覆土中からは土師器、須恵器、縄文前期、後期(十腰内 I 式)・晩期(C 2 式)等の出土がみられ(B・P・L 4 ※13~25参照)、プランが円形であること、「十腰内 I 式」土器が覆土中から多く出土していること等から、縄文時代後期の住居址と推定したい。

2 号住居址(第16・17図)

この住居址は、AS-C区、グリット®と、西側に1m拡張した®拡で、第8次発掘調査でプランを確認していたものを、今年度改めて、V層上面で検出したものである。この

プランは、長軸、短軸共に約2.6m の方形で、北西側角が長円とそれからつき出している 舌状の落ち込みによってけずられている。

深さは10~25cmで床面は平担である。壁は殆んど垂直か、ゆるい立ちあがりである。ピット⑦・⑨とピット③・⑭に挟まれる位置に焼土が3か所第17図の範囲内で確認される。 住居址に伴うピットとして①・⑨・③が中心柱穴で、④・⑥・⑪・⑦等がそれに付随し

住居址の年代は、縄文前期、後期(十腰内 I 式)、晩期、土師器、須恵器と覆土中の出土 遺物は種類が多くみられるが、住居址の南隅より復元可能の土師器、(坏形土器)が床面 から出土しているので、平安後代後葉のものと考えてよいのではないかと思われる。

なお、住居址の北西側の長径1.55m、短径1.10mの長円の上面に、地床炉と思われる焼土が、舌状に突き出ている溝の上にまたがって分布していた。この地床炉の下に長円と舌状の溝が検出されたもので、住居址との関係は、住居址の角をけずって掘り込まれたものである。したがって、住居址よりは、新しい年代の遺構と考えられる。

(B·P·L2 ※19~23参照)

3号住居址(第16・18図)

ているものと推察される。

この住居址は、2号住居址と同じく、第8次発掘調査で未完掘で、第9次に精査を延ば したもので、AS-C区、グリット9のV層上面で確認、検出したものである。

長径2.60m、短径2.40mの方形で、深さは35cm前後、床面は平坦である。壁はゆるやかな立ちあがりをみせている。周溝、カマド、住居址内のピット等は検出されなかった。

この住居址の年代である覆土中より、縄文中期、後期(十腰内 I 式)、晩期(大洞C 1 、C 2 式)、土師器片の出土がみられ(B・P・L 5、※18~33参照)断定できないが、プランと土師器(甕)出土がみられることから、2号住居址と同じく平安時代後葉のものと思われる。

付属するものとして、住居址の北西隅に2号土壙が接続している。

さらに、3・4・5号の土壙が西側に位置している。住居址との関係は、はっきりしない。

4 号住居址(第8・13図)

この住居址は、AC-F区のグリット③・③のV層上面で検出した。西側が発掘調査区域外のため全体のプランは確認できなかったが、不整な形をしている。深さは15~20cmで、床は平坦ではあるが、南側の方に傾斜して下がり気味である。(第6図、④・⑤G、西壁セクション参照)

壁はゆるいたちあがりを示している。周溝、柱穴等は検出されなかった。

未調査の区域を調査しなければ断言できないが、床面を共通にした二重住居址ではなかったかと推定している。

年代は、はっきりしないが、覆土中より縄文中期、後期、須恵器の出土がみられるので、(B・P・L 5 ※13~17参照)、平安時代後葉の住居址ではないかと考えられる。

• 5 号住居址 (第12·13図)

この住居址は、AC-F区、グリット①・②のV層上面で検出したものである。全体プランは検出できず、わずかに住居址と判断できる周溝の一部と、並列しているピットが確認できたのみである。

検出した周溝から、方形の住居址と思われるが、壁は全く検出されなかった。床面は粘土質ロームで固くしまっている。この地区は、Ⅲ・Ⅳを欠き、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ層の層序となっているが、Ⅱ層中より土師器(环)、須恵器片(甕)が、V層直上より土師器、須恵器片が出土しているので、この住居址の年代は、平安時代後葉に位置づけてもよいのではないかと推定される。

2) カマド跡 (第14図)

このカマドは、第8次発掘調査の⑥・⑦、今年度の⑫・⑬グリットの境界の標式抗の直下、Ⅱ層下から検出したもので、昨年度の2号住居址に付属して検出された、⑦グリット南東角の2号カマド址に隣接している。

長軸、短軸ともに1.10m、厚さ約20cmの規模で、北と南側に木灰が堆積されている。 焚口は北側で、燃焼部は、径約30cmで南側の煙出しへと続いている。

カマドに付属する支脚等は検出されなかった。

煙道部も、木炭・焼土の混合層によって確認できた。このことから、このカマドは、長期に使用されたものでなく、臨時的に構築されて使われたものと思われる。

このカマドは、ぽつんと独立した存在で検出され、どの住居址に付属するものか、また、 構築年代についても不明である。

3) 土壙

土壙は、全部で9基検出した。AC-F区で2基、AS-C区で7基である。

• 1 号土壙 (第 6 · 15図)

この土壙は、ACーF区のグリット③・⑩のV層上面で検出したが、東側が調査区域外に延びているため、全体プランは不明だが、検出したプランでは、落ち込みが三段にわたっている方形の土壙と推定される。

この土壙の南東壁の覆土の堆積状況は、第6図のセクション図のように、単純に2層に分類できることから、人工的に埋められたと考えられる。長軸で4.80m以上計測され、床は、3段に分れている。上段の浅い所で23cm、中段で38cm、下段の深い所で95cmと計測される。床は粘土質ロームの地山で、それぞれ平坦で、壁も緩い立ちあがりである。

下段の床面に接して、長さ85cm、幅18cmの炭化材と($30 \times 20 \times 6$)cmの礫が出土した。 さらに炭化材の隣の隅よりピットが検出された。

遺構内からの出土物で、年代を確定するものは出土していない。

この1号土壙は、土壙としては大形であるため、住居址の可能性もあるが、検出された ピットが僅かに1つのみ、それに東側が未調査のため、今次は一応、土壙としたが、この ことについては今後さらに追求したいものと思う。

• 2 号土壙 (第18図)

この土壙は、AS-C区、グリット⑨のV層上面、3号住居址に接続して検出した。

全体プランは、北側が未調査区域で検出できなかったが、方形をなしている。南北に約1.0m(さらに拡張の可能性あり)東西幅約1.0m、深さ51cm前後、壁はゆるい傾斜で立ちあがっていて、床は平坦で、粘土質ロームの地山である。

この土壙より、縄文後期(十腰内 I 式)、晩期(大洞C 2 式)の土器片が出土しているが、 年代の決め手にはたらない。

土壙を、住居址が切り込んでいるので、土壙の方が、3号住居跡よりも古いと言える。

• 3 号土壙 (第18図)

この土壙は、AS-C区、グリット⑨のV層上面、3号住居址から約1m離れた南西で検出された。長径約2m、短径約1mの長円をしており、深さは $11\sim12cm$ と浅く、地山を掘り込んで造られている。

出土遺物は、縄文時代後期(十腰内 I 式)、晩期(大洞C 1、C 2 式それぞれ朱塗り土器)、石器未完成品一点、と特に後期の遺物が多く出土した。

住居址との付属関係、構築年代についてははっきりしない。

出土物については、(B・P・L 4の1~12) を参照されたい。

• 4 号土壙 (第18図)

長径78cm、短径66cmの不整円で深さは、31cmと23cmの2つの底面をもち、丸底でロームの地山を掘り込んだものである。

この土壙の覆土内より、縄文後期(十腰内 I ~ II 式の中間型式)、晩期(大洞C 1 、C 2 A 式) 土器の出土がみられた。(B・P・L 12~23参照)

住居址との関係、構築年代等については不明である。

• 5 号土壙 (第18図)

この土壙も、AS-C区、グリット⑨のV層上面、3号・4号土壙のほぼ中間で検出された。長径70cm、短径56cmの楕円形プランで、深さは29cmのフラスコ状遺構で、地山を掘り込んでいる。

覆土より、縄文後期(十腰内 I 式、十腰内 I ~ II 式の中間型式)、晩期等の土器片が出土 している。住居址との関係、構築年代等については不明である。

6・7号土壙(第18図)

この両土壙は、AS-C区、グリット⑩のV層上面で検出された。

6 号は、長径66cm、短径60cmの円形で、深さは15cm、ロームの地山を掘り込んだものである。出土遺物はない。

7号は、長頚約75cm、短径46cmの隅丸方形で、深さは約20cm、ロームの地山を掘り込ん

だものである。覆土内より、縄文後期(十腰内 [式)の土器19片の出土があった。

• 8 号土壙 (第16図)

この土壙は、AS-C区、グリットWV層上面で検出されたものである。

西側が発掘調査区域外になっているため、全体プランは検出できなかったが、径約1mの土壙に接して、小形の土壙が接続している。

小形の土壙を切って大形土壙が構築されているので、大形の土壙が新しいと言える。 大形土壙内覆土より、縄文時代後期(十腰内 I 式)、晩期一(大洞 C 2 式朱塗り壺、大洞 A式土器)等の土器片が出土している。

覆土は、堆積状況から判断して、何らかの理由によって一挙に埋めもどしたものと観察した。構築年代については不明である。

• 9 号土壙 (第15図)

この土壙は、ACーF区のグリット38のV層上面、1号土壙のやや南側で検出された。 長径96cm、短径32cmの不整ひょうたん形のプランで、深さはそれぞれ10cmである。地山の ロームを掘り込んでおり、出土遺物はない。また構築年代も不明である。

4) 溝状遺構(第8·9·15·14図)

☆1号溝状遺構(第9図)

この溝状遺構は、グリット $\hat{\mathbf{1}}$ $\mathbf{1}$ $\mathbf{1}$

☆2号溝状遺構(第15図)

この溝状遺構は、グリット38・39 V層上面で検出された。最大幅40cm、最小幅約20cm、深さ3~8 cmと一定しないが、グリット38の北側隅から北へ1.80m、右折して西側へまがり1号土壙へと接続している。

☆3号溝状遺構(第14図)

この溝状遺構は、北側が、1号異形遺構に接し、南側は発掘調査区域外のため、全体プ

ランを検出できなかったが、グリット $rac{1}{2}$ V 層上面で検出された。溝の幅は $16 \sim 20$ cm で、深 さ、 $4 \sim 9$ cm と計測された。

北側寄りにピット④が掘り込まれている。この溝も、北側より南側へと傾斜しているのが確認される。

5) 異形遺構(第14図)

この異形遺構は、本年度検出したカマド址の下層より、グリット42・43の両方にまたがって検出されたものである。長径3.50m、短径1.9mの不整長円のプランである。

深さは25cm前後で、床面は地山を掘り下げていて平坦で、固くしまっている。遺構の北側にピット②・③、南側にピット①が掘り込まれている。床面には、こぶし大のものから径25cm前後の角礫19個、縄文時代晩期(大洞C1式)の土器、土師器、須恵器片等が出土した。(B・P・L2、12~18参照)

この遺構を、異形遺構としたのは、土壙に比して、平面形からみて深さがなく、底が平 坦であること、礫および土器片の出土が多いことから判断したものである。用途について は、目下不明である。

6) ピット(柱穴) (表3)

ピットについては、発掘調査区域内より250個の多くを検出した。 一覧表にして表示すると次のようになる。

各ピット内の覆土から出土した遺物は、土器型式が判明するものを $(B \cdot P \cdot L \ 1 \sim 5)$ 示すと次のとおりである。

ピット数	関 連 遺 構	グリットNo	$B \cdot P \cdot L$
56	住居址-3号・4号 土壙-2・3・4・5号	9 • 13	$1 - \cancel{\Rightarrow} 14 \cdot 15 \cdot 18 \cdot 19 \cdot 25 \cdot 26$ $2 - \cancel{\Rightarrow} 1 \cdot 4 \cdot 7 \cdot 10$ $4 - \cancel{\Rightarrow} 28 \cdot 37 \cdot 30 \cdot 35 \cdot 31$
64	土壙-6・7・8号	10 · 14	$ \begin{array}{c} 1 - \cancel{>} 1 \sim 11 \\ & \cancel{>} 13 \cdot 17 \cdot 21 \cdot 24 \\ 2 - \cancel{>} 2 \cdot 5 \cdot 8 \cdot 11 \\ 4 - \cancel{>} 26 \cdot 27 \cdot 32 \cdot 38 \cdot 39 \\ & 29 \cdot 34 \cdot 40 \cdot 31 \cdot 36 \cdot 42 \end{array} $

7	1 号異形遺構	42 · 43
19	1 号土壙	38 • 39 • 40
13	5 号住居址	41 · 42
31	4 号住居址	34 · 35
60	1 号住居址	36·35·39·40 41·5·X 2
250	計	

7) 1 号井戸(第8·11図)

この遺構は、AC~F区、グリット④V層上面、グリットの北東隅にて検出された。長径1.6m、短径1.3mの丸形で、深さは、確認面より2.6mを計測した。覆土は、確認面より80cm位までは精査が不能(I~V層上面まで)だったが、V層中位からは掘り下げながらの計測であることをことわっておきたい。VI層とW層には、木炭の混入が多くみられる。底面は、にぶい粗粒砂で、水分を含むが、水はけは良好であると判断した。

出土遺物は、確認面より約80cmの壁に密着した青磁片が1ケ出土した。

さらに覆土からは、縄文時代後期(十腰内 I 式)、晩期(大洞A 式)、土師器、須恵器の土器片が検出された。

井戸の構築年代は、はっきり断定できないが、第8次発掘調査で検出された、2号・3号・4号住居址との関連があるのではないかと考えられる。

(B · P · L 3、☆24 · 25 · 27 · 28 · 30 · 31参照)

[V] 出土遺物

*第9次発掘調査では、遺物が最も多く出土したグリットは、A地区のHXグリットである。次に多く出土したグリットは、H1グリットで、H2グリットは前者に比べるとやや少ない状況であった。それは、H2グリットは、第8次発掘調査で3層の一部を発掘していたこと、また、H1グリットでは、4層から発掘を開始した理由によること、さらに、HXグリットは、第9次発掘で新しく設定したグリットであることが理由と思われる。

出土した遺物の総量は、(60×28×15cm) の平箱で、100箱の出土であるが、そのうち、約70箱が、A地区のH1、H2、Hxの出土である。なお、このうちの約40箱は、Hxグリットの出土である。

その他の約30箱は、次の各区で出土したものである。即ち、AC~F区では、約15箱、AS~C区では、約15箱の出土であった。この2区で、出土量が少ないのは、遺構(住居跡、土壙、柱穴)等が多く検出されたためと考えられる。

以上、遺物の出土状況について簡単に述べた。次に、出土した遺物について述べる。

出土した遺物を分類すると、次のように分けられる。1) 土器 土製品 2) 石器 石製品 3) 土師器 須恵器 4) 陶磁器 5) 骨類 6) 鉄製品等に分けられる。以下、この順序で述べることにする。

(1) 土器 土製品 (表1~5参照)

*出土した土器は、(表1、表2)に示したとおり、型式別に分けると次のようになる。

第1群土器-円筒下層式土器 (縄文時代前期)

第2群土器-円筒上層式土器(縄文時代中期)

第3群土器−十腰内Ⅰ式土器(縄文時代後期)

第4群土器−十腰内Ⅰ式と同Ⅱ式の中間型式- (後期)

第5群土器-十腰内Ⅱ式土器- (後期)

第6群土器-大洞B·C式土器(縄文時代晩期)

第7群土器-大洞C1式土器(縄文時代晚期)

第8群土器-大洞C2式土器(縄文時代晚期)

第9群土器-大洞C2~A式土器(仮称)- (縄文時代晚期)

第10群土器-大洞A式土器(縄文時代晚期)

第11群土器-土師器(平安時代)

第12群土器-須恵器(平安時代)

第13群-陶磁器

以上のように、出土した土器及び陶磁器を含めて、13群に分類したが、これらの出土土 器について、次に述べる。

- *第1群土器と第2群土器は、僅か数片の出土であって、本遺跡の主体的な土器ではないように認められる。
- *第3群土器は、出土数も多く、この土器を伴う遺構も検出されるので、一時期ではあるが、人々の生活があったものと認められる。(但し、第4、第5群土器の出土数は、少なく、特に、第5群土器は数片のみで、やはり主体的な土器とは考えられないところである)

第6群土器(大洞B・C式)も、出土があるが、極く少数であった、また第1~8次の発掘調査でもやはり少数である。

第7群土器及び第8群土器、第10群土器は、第1~第9次発掘調査にわたって、多量に出土している。

- *即ち、第3群土器と第7群、第8群、第10群土器の時期に、本遺跡が当時の人々の生活 舞台であったものと考えることができる。
- *土器型式で、多く出土したものは、大洞C1、大洞C2式、及び、大洞A式土器の各土器型式で、第3群土器は約40パーセント、晩期の土器は、約60パーセントの出土である。
- *なお、出土した個々の土器については、出土グリット、層位、土器型式、等々、 $A \cdot P$ ・ $L \cdot 1 \sim 88$ 、 $B \cdot P \cdot L \cdot 1 \sim 17$ 、 $X \cdot P \cdot L \cdot 1 \sim 40$ に示しているので、これによって承知されたい。また、表 $1 \sim 5$ 、も合わせて参照されたい。
- *土製品(表4、A·R·L1~3)
- (1) 土偶 *大洞C2式土器に伴ったもの 1ケ

*板状土偶—十腰内 I 式 G10、Ⅱ a

*土偶 腰~脚部(左脚欠損)—十腰内Ⅰ式 H X V

*土偶脚部--十腰内 I 式 H 1 V

*土偶脚部 H 14 Ⅳ 以上7ケ。

(2) 鐸状土器 *施文のあるもの 2ケ。十腰内 I 式

*施文のないもの 2ケ。十腰内I式 以上4ケともHxV出土

(3) 三角形土製品 1ケ。十腰内Ⅰ式 H2Ⅲ出土。

(4) 垂飾品 1 ケ。十腰内 [式 H 2 Ⅲ出土。(横、縦位の沈線文あり。)

1 ケ。土師器 G40 V 出土。 (5) 土錘

(6) 腕輪状土製品 1ケ。十腰内Ⅰ式 H1Ⅳ。(沈線による渦状文あり。)

(7) 耳栓 1ケ。十腰内Ⅰ式 H1Ⅲ出土。

(8) 円盤状土製品 *円形の穿孔があるもの 2ケ。

*****縄文のあるもの

2 ケ。(後期、晩期。)

*穿孔のないもので、沈線文のあるもの 9ケ。十腰内 I式。

*無文のもの

2ケ。後期、晩期。

*縄文のあるもの 6 ケ。晩期。

* 毒形 (後期 3、 晩期 6) (9) 袖珍土器

*鉢形 (後期2、晩期3)

*****皿形 (晚期3)

*片口付台付鉢(晚期)

*台付台部(晚期2、後期2)

(10) 楕円形土器 H1Ⅳ出土 晩期、欠損のため型式名不明。 以上の各土製品が出土した。

(2) 石器 石製品 (表7~9)

*出土した石器、石製品は、全部で、295点であるが、これ等の出土した石器、石製品は、層位的にとらえることが、遺跡の性格上不可能であった。即ち、遺跡は、館跡であること、そのために、削平されていたこと、出土した土器群を検討すると、古い土器が上層で出土し、新しい型式の土器群が下層から出土しており、地層が逆転していることが、確認される状況であった。そのためどの型式の土器に伴って出土するのか明確にはできなかったのである。これらの、石器、石製品は、(表2)の編年表に示した出土土器及び、多量に出土した土器群からすれば、石器の大部分は、縄文時代の後期初頭(十腰内 I 式)及び、縄文時代晩期の石器群と考えられるところである。

*出土した石器は、その器種別に分類すると、(表 8)の石器総括表に示したとおりである。また、石器に使用されている岩質については、(表 9)の岩質分類表に示したとおりである。また、個々の石器については、(表 7)の一覧表に、計測値、重量、石質、及び出土区、層位等を示してあるので省略したい。但し、縄文人は、その経験によって岩石の特質を理解していたのではないかと考えさせられるところである。

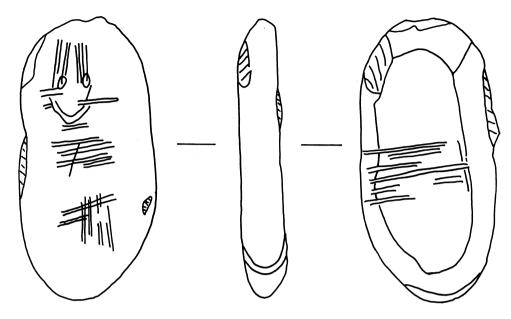
*石製品

出土した石製品は、次のとおりである。

1) 岩偶 2) 線刻石 3) 穿孔石(自然石) 4) 小玉(a 穿孔のあるもの、b 未穿孔、または、擦痕のあるもの、c 緑色原石)

*これらの石製品が出土したが、岩偶については、どの土器に伴うものか不明であった。次の2)線刻石は、十腰内I式土器に伴って出土した。3)穿孔石は、1個は自然石で、穿孔は人工的なものとは考えられず、1個だけは、人工のものと認められる。4)とした小玉は、装飾品またはアクセサリーとして使用されたものであろうか、縄文時代晩期の土器にともなって出土している。この小玉等(a・b)については、本遺跡では、第1~第9次発掘にわたって、総ての調査において出土している。

[線刻石実測図]



{☆計測値その他は、(表7)参照}

(3) 土師器、須恵器について

*出土した土師器は、極く少数であるが、分類すると、杯形と甕形に分けられる。出土した土師器は、「東北北部の土師器型式」第2型式のうち、新しいもので、ほぼ11世紀頃のものと考えられる。また、須恵器は、分類すると、長頚(細口)壺と甕形に分けられる。須恵器の出土は極く少数であるが、一応、10~11世紀のものと考えられる。

(4) 陶器、磁器について

*出土した陶磁器は、わずか数片であるが、分類すると次のように分けられる。即ち、 青磁、産地不詳陶器、及び染付け磁器等に分けられる。

青磁は、15世紀後半~16世紀前半のものである。また、産地不詳の陶器は、年代不明である。染付け磁器は、新しいものであるが、17~18世紀のものとみられる。

(5)骨類(表10、bp11)

*出土した骨類は、(表10) に示したとおりであるが、出土した骨類は、焼けているものが多く認められる。このことはどのように考えればよいのか、疑問が残るのであるが、単

純に考えて、食料にしたものと考えることが自然ではないだろうかと思うところである。

- *参考までに、第1~第8次発掘調査までに出土した骨類を以下に示すことにする。なお、本遺跡から出土した骨類については、一貫して早稲田大学金子浩昌氏に調査をお願いしているのであるが、資料が徴細なので調査にご苦労をおかけしたものと考えている。心から感謝申し上げる次第である。
- 1) シカ 2) イノシシ 3) イヌ 4) タヌキ 5) キツネ 6) イルカ 7) アシカ 8) ノウサギ 9) 魚骨 10) 鳥骨 11) テン 12) ネズミサメ 13) ウマ 14) 大形獣 15) 中形獣 16) 人骨?
- *以上の16種となっている。これらの骨類から、縄文時代の後期、十腰内 I 式土器を使用した人々の時代及び縄文時代晩期の大洞B・C 式~大洞A式土器を使用した人々が住んでいた時代の動物相が次第にわかってきたのである。

[VI] 考察

(1) 観音林遺跡の地形、層序等については、第1~第8次発掘調査報告書において既に述べてきたのであるが、この項では、再度述べることにする。

本遺跡は、年代不明の館跡内に遺跡の中心があるが、現在までに9年に渡って、国の補助を受けながら、五所川原市教育委員会が発掘を実施してきた遺跡である。

即ち、年代不明ではあるが、遺跡の立地する地点は、館跡内であると言うことである。 この点を先ず理解しないと次に述べる各事項について十分理解できない点があるので最初 にお断りしておきたいと思う。

(2) 層序について

層序については、 $\{3\}$ Fig 4、Fig 5に述べたように、埋積層、盛土層、原黒土層となっており、(D地区)。A地区では、表土、混合黒色土、(Fig 5) で分かるとおり、過去において土が移動していることが理解できる。

(3)検出した遺構について

遺構については、第1~第9次発掘調査にわたって、遺構が検出されているのであるが、総て、第5層上面で検出されている。遺構は、住居跡、土壙、柱穴、溝、井戸、そして、堀、等であるが、その中には、縄文時代後期、及び、晩期のものが含まれているが、総て、第5層とした黄褐色粘土質ロームの上層で確認している。即ち、土師器、須恵器の使用時期のもの、縄文時代後期、晩期のものも同じ層で検出されているのである。言葉をかえると、各時期の遺構の所在する第5層は、各期の生活面であったと言うことができる。

(4) 出土、土器について

出土した土器、土製品については、 $A \cdot P \cdot L$ 、 $B \cdot P \cdot L$ 、 $X \cdot P \cdot L$ で示した。また、第1~9次で出土した土器群の編年表は、(表2)に示した通りである。

この編年表を見るとわかるように、本遺跡で出土した土器群は、縄文時代の前期、中期、 後期、晩期、土師器、須恵器、陶磁器、および鉄器、植物、(稗、炭化米)、骨類、等である。 この出土品のうち、土器について、注目したいものは、次の型式の土器群である。

1) 大洞C2~A式(暇称) 2) 十腰内 I 式と同Ⅱ式の中間型式の土器。

以上の土器群である。第9次の発掘調査に於いてもこの2群の土器の出土があったのであるが、以下此の土器について述べる。

1) 大洞C 2 ~ A式 (仮称) 土器について-この土器群については、別名 聖山式土器 と呼称する研究者もいるのであるが、筆者は、大洞式土器文化の流れの中の土器として把握した。そして、大洞C 2 式土器と大洞A式土器の文様要素の両方を持つ土器群として、

大洞B、B・C、C1、C2、C2~A、A式土器の編年案を考えているところである。 しかし、研究者によっては、大洞C2式と同じ時期、或いは、大洞A式と同じ時期、及び 大洞A式よりも新しい可能性もある、と言う考えもあるようである。しかし筆者は、文様 要素の分析から、表記の仮称としたが、今後留意していきたい土器である。

2) 十腰内Ⅰ式土器と同Ⅱ式土器との中間型式の土器について

観音林遺跡の出土、土器のうち、縄文時代後期の土器群は、十腰内Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅴ式等の出土土器があって、このうち、Ⅰ式、Ⅱ式のいずれにも属さない土器群が、第2~9次発掘調査で出土しており、復原~完形土器、及び、その破片も蓄積されてきたので、今後とも留意していきたいと考えて、以下に述べることにする。

筆者は、この土器群を、十腰内 I 式と同 II 式の中間型式として位置づけを与えている。 その特徴の一端を述べると、次のようになる。

- (1) 施文-重山型文、重波状文、(口頚部)
- (2) 無文帯-口頚部、胴部下半(幅の広い無文帯)
- (3) 器形-口頚部が広く外反する。肩部が丸くふくらむ。胴下半は、円筒形である。 (但し、深鉢~鉢)
- (4) 十腰内 I 式~ II 式土器に無い器形の土器がある。(例、鉢形土器を上に乗せた形の 壺形土器等)
 - (5) 胎土、焼成-極めて良い。色調-黄褐色で明るいものもある。

以上 諸特徴を列記したが、詳しい説明はスペースの関係で省略したい。この中間型式とした土器群は、まだ、不明な点が多く、北海道松前町教育委員会「白坂」に類例が報告されているが、土器の組成等更に検討したい土器群であると考えている。

(5) 石器、石製品について

出土した石器、石製品については、表7及びS・P・L1~13で示してあるので省略して、この項では、「線刻石」について、述べることにする。観音林遺跡では、発掘のたびに、「線刻石」の出土はあるが、第9次においても出土した。 このことについては、実測図に示しているので、省略するが、縄文人は、絵を書くことも好んでいたものか、考えさせられるところである。

(6) 土師器、須恵器について

出土した土師器は、「東北北部の土師器型式」第2形式のものである。また、須恵器は、 市内の前田野目窯跡のものと同様であって、土師器、須恵器ともほぼ、10~11世紀のもの と考えられる。

(7) 陶磁器について

出土したものは、陶器と磁器に分けられるが、出土数は、数片である。このうち、青磁が1こで、15世紀後半~16世紀前半のものである。ほかのものは、和製で、肥前陶器、染付け磁器で、多分17世紀以降のものであろう。

(8)骨類

出土した骨類は、シャレイで5個ほどであるが、その調査は、早稲田大学 金子浩昌氏に依頼した。その結果については、表10に示しているとおりであるが、既に述べたように、多くの骨は焼けていることに留意したい。これ等の骨類は、縄文時代後期・晩期の土器に伴って出土している。この骨類の調査から、観音林遺跡の動物相が次第に明らかになりつつある。 (文責 新谷)

*参考文献

1) 観音林遺跡 第1~8次発掘調査報告書 五所川原市教育委員会

2) 五月女萢遺跡 (1983) 市浦村教育委員会

3) 亀ヶ岡式土器 (1984) 村越 潔 ニューサイエンス社

4) 「白坂」 (1983) 北海道松前町教育委員会

5) 北奥古代文化(1975) 平山久夫編 学生社

6) 撚糸文 (1986) 青森山田高等学校 考古学研究部

7) 北海道における縄文時代後期中葉の土器編年について(1977)

鷹野光行 考古学雑誌第63巻第4号

8) 石器時代の日本 (1960) 芹沢長介 築地書館

9) 津軽・前田野目窯跡(1968) 坂詰秀一 五所川原市教育委員会

10) 撚糸文 第16号 (1988) 「十腰内 I 式土器文化の研究 (3)」

青森山田高等学校 考古学研究部

*出土資料

• A · P · L 1 ~ 3 袖珍土器等

• A · P · L 4 ~88 完形・復原土器

B・P・L1~B・P・L5(遺構に伴って出土した土器)

B・P・L 6~B・P・L17 (後期の土器)

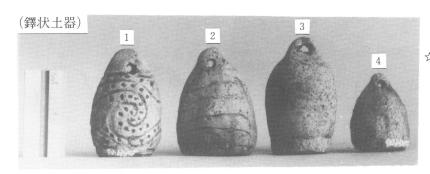
X · P · L 1 ~ X · P · L 40 (晩期の土器)

• S • P • L 1 ~13

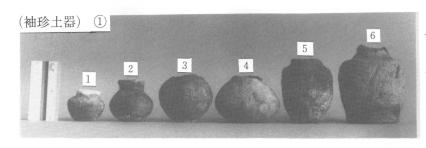
• b · P · L 1 (骨類)

[鐸状・袖珍・鉢・皿・台付片口土器]

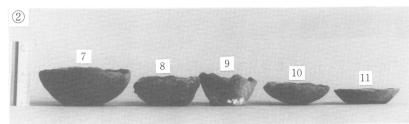
A.P.L1



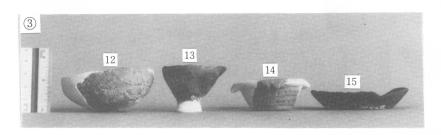
☆ (1~4) →第3群土器(十腰内Ⅰ式) に伴出



☆ (1~4)→第8群土器 (大洞C2式)に伴出☆ (5・6)→第3群土器 (十腰内I式)に伴出☆器形→壺形

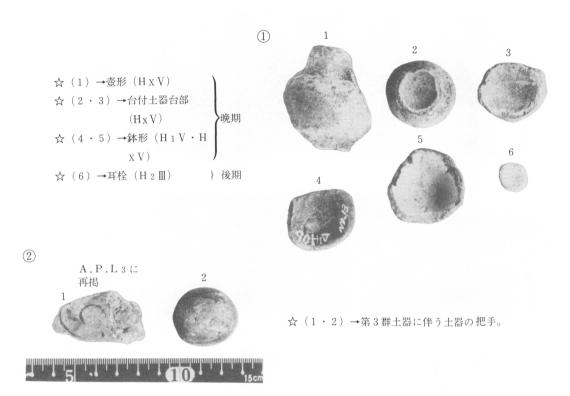


☆ (7~11) →第8群土器 (大洞C2式) に伴出 ☆器形→ (7~9) →鉢形 → (10·11) →皿形

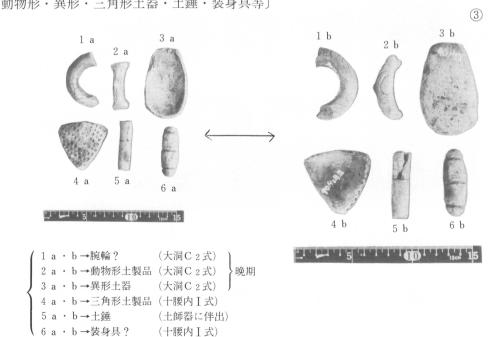


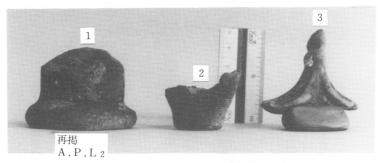
☆ (12~15) →第8群土器 (大洞C2式) に伴出 (12) →鉢形

※ (14) → (大洞C1式)







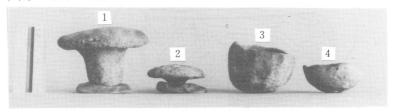


- ☆ (1) →把手(十腰内Ⅱ式?)
- ☆ (2) →土器底部 (後期)
- ☆(3)→土器(鉢形)の突起

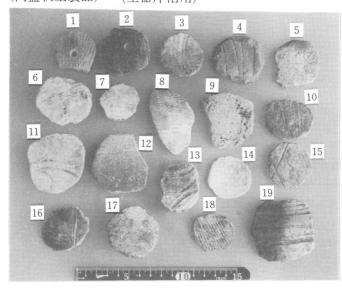
(第10群土器-大洞A式) ?

(茸形・袖珍土器)

☆ (1 · 2) → 茸形土製品☆ (3 · 4) → 鉢形



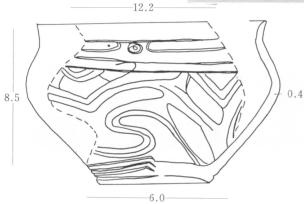
(円盤状土製品) (土器片活用)



- ☆ (1 · 2) →中央に「円形」孔のある もの。
- ☆ (3~19) →無孔のもの。
- ☆ (3・4・6・7・10・11・13・15・ 16・19) →第3群土器 (十腰内 I 式) を活用したもの。
- ☆ (1 · 2 · 5 · 8 · 9 · 12 · 14 · 17 ·18) →晩期の土器片を活用したもの。

1 HXV

(鉢形土器)



[鉢形土器] -1

☆ (1) は、A地区H X グリットV 層出土の第3群土器(十腰内I 式)である。

- 器形は、高台状の底部を有し、肩部がまるくふくらむもので、口頚部が外反するものである。また、底面径に対して、口縁径が大きい。この器形は、当地方では最も典型的なタイプである。
- 施文も、実測図に示すとおり、最もノーマルなパターンのもので、沈線文が底部直上 まで施文されている。
- 色調は、灰黄褐色、一部灰黒色を呈し、内面は灰黒色で、胎土・焼成とも良い。

(註) {① H x = グリット名 V = V層の意…出土グリット・層を示す。
 ② 胎土・焼成について→最良・良・やや良・不良と区分して述べる。
 ③ 石膏のあるものは、すべて「図上復原」である。
 ── 以下も同様とする。

(台付鉢形土器)

12.6

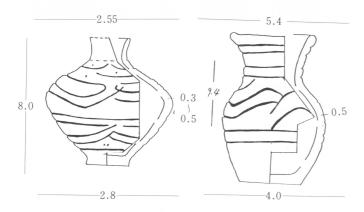
〔台付鉢形土器〕 - 2

☆ (2) は、A地区H2グリットⅢ層出土の第3群土器(十腰内I式)である。

- このものの器形も第3群土器特有の器形をなすものであるが、台付のものは出土数は 少ない。すなわち、口頚部がゆるやかに外反し、胴部下半がふくらむ器形である。
- 施文の詳細は不明であるが、平行沈線が3条程口径~肩部上にめぐり、胴部の施文も あるもののようである。
- 色調は、外面淡赤褐色、内面灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良いものである。

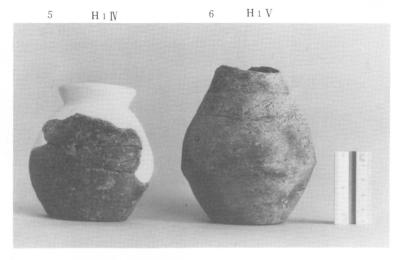
3 H X V 中 4 H 2 II 下

(壺形土器)

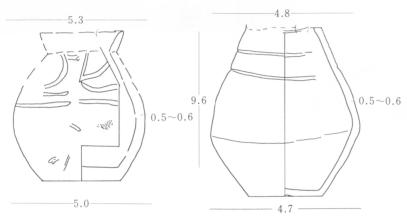


〔壺形土器〕 - 3 ・ 4

- ☆ (3・4) は、両者とも、それぞれHxV・H₂Ⅲ出土の第3群土器(十腰内Ⅰ式)であるが、十腰内Ⅰ式でも新しいもののようである。(後述する第4群土器に近いものらしい。)
- ☆ 器形→ (3) としたものは、口頚が小さく、肩部が張り、高台が付く器形である。 (4) は、口縁に突起を一個持ち、頚部が長く直立するもので、肩部がまるくふくらむ 器形である。
- ☆ 施文→ (3) には、やや不整な文様が沈線文によって施文され、円形文も認められる。 強く張る肩部下には、2条の沈線文が波状に施文されるものである。すなわち、肩部上 の施文は、第3群土器の特徴をもつ施文で、肩部下の施文は、「重波状文」の特徴をもつ ものである。(4) の施文をみると、このものの肩部~胴部上半には、やはり「重波状 文」が施文されるもので、一部に「重山形文」の施文される部位も認められる。また、 磨消手法が用いられ、0段多条のL・R縄文が施文されている。
- ☆ 色調→ (3) は、灰赤褐色、内面灰褐色、(4)は、外面灰黒色、内面黒褐色を呈する。 胎土・焼成ともやや良である。

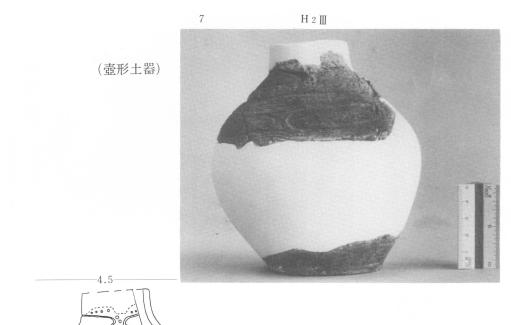


(壺形土器)



[壺形土器] -5・6

- ☆ (5) は、A地区H 1 IV出土の第 3 群土器 (十腰内 I 式) である。また、(6)は、A 地区H 1 V出土の第 4 群土器 (十腰内 I・II 式の中間型式) であろう。
- ☆ 器形→ (5) は、口縁~肩部は不明であるが、肩部が張らず、胴部は球形に近いまる みをもつもので、底面は平底を呈する。(6)は、口縁部が欠失して不明であるが、胴部 下半の下部まで末広がりにひろがるもので、段があってしぼまる器形で、底面は平底で ある。
- ☆ 施文→ (5) の施文は、胴部中央上に2条の沈線文がめぐるものらしい。肩部との間に施文帯があるらしく、沈線文が認められる。(詳細は不明) (6) には、不整な沈線文が、2~3条めぐるもののようであるが詳細は不明である。
- ☆ 色調→ (5) は、外面暗灰黒色、内面黄褐色、(6)は、外面明黄褐色、一部灰黒色、 内面黄褐色である。胎土・焼成 (5) は良で堅緻なもの、(6)は、細砂を含みザラザラ するが、焼成は良い。



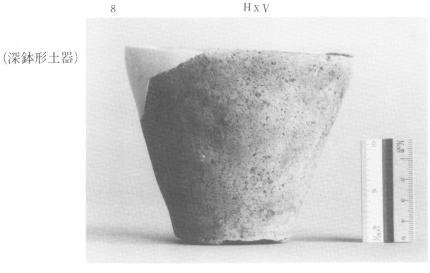
13.7

〔壺型土器〕 - 7

- ☆ (7) は、H2Ⅲ層出土の第5群土器(十腰内Ⅱ式)である。
- ☆ 器形→このものの器形は、口縁径が小さく、下ぶくれのする器形で底面は「上げ底」 を呈する。

0.4

- ☆ 施文→ 口縁から肩部へは、隆起線文と円形刺突文が施文され、肩部下には、刷毛目 状文と円文を中心とした沈線文があり、胴部中央上には、刷毛目状文が施文されるが、 胴下半の施文は、欠損のため不明である。底面直上および胴部下位には、平行する2条 の沈線文があり、磨消帯をなすものである。
- ☆ 色調→暗黒褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土・焼成は良く、堅緻である。

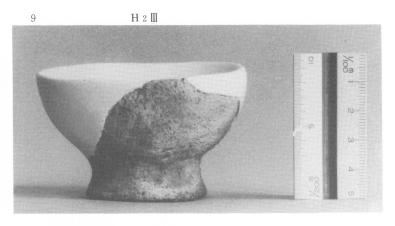


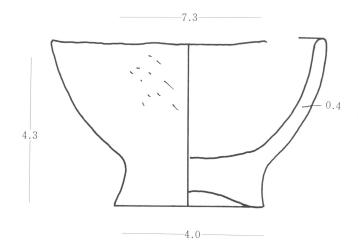
9.3

[深鉢形土器] -8

- ☆ (8) は、H2 V出土の第4群土器(十腰内I・II式の中間型式)である。
- ☆ 器形→実測図に示したとおり、口縁から底部へかけて、ストレートにしぼまるもので、 平縁をなすものである。また、底面は、剝離しているが平底のものと考えられる。
- ☆ 施文→施文はないものであるが、この(中間型式)の土器群には、無文帯をもつタイプが多い。
- ☆ 色調は、明赤褐色 (内・外面とも)、胎土に細砂を含むが焼成は良く堅緻である。

(台付鉢形土器)



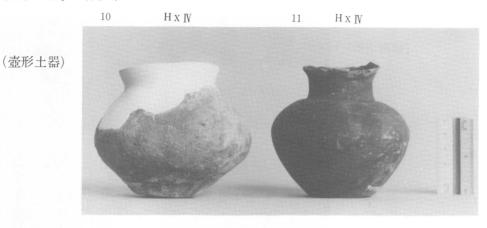


〔台付鉢形土器〕 - 9

- ☆ (9) は、H2Ⅲ出土の第3群土器(十腰内I式)である。
- ☆ 器形→平縁で、口縁から胴部へかけてまるく内湾する鉢形に台部が付くもので、やや 器厚が厚く、持ち重りのするものである。
- ☆ 施文はないもので、色調は、暗褐色(内外面とも)で、一部灰黒色を呈する。胎土に 細砂を含みザラザラするが、焼成は良く堅いものである。

[各地区出土、土器] (晚期)

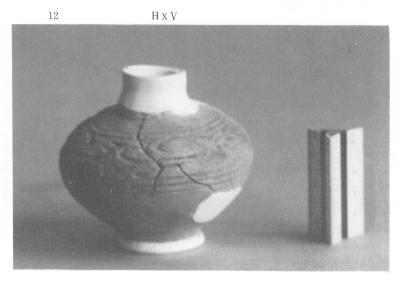
A.P.L11



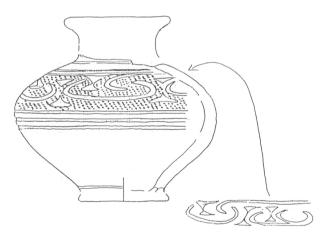
8.2 0.4~0.6 9.0 0.2~0.3

「壺形土器」 $-10 \cdot 11$) (粗製・精製)

- ☆ (10·11) は、ともにHx N層出土の第8群土器 (大洞C2式) である。
- ☆ 器形→ (10) は、口頚部が欠失しているもので不明なるも平縁のものと思われる。このものは、胴部中央下に最大幅をもつもので、肩部が張らず、底面は平底のものである。
 - (11) は、口縁は平縁で頚部は外反し、肩部がまるく張る器形である。このものは大洞 C 2 式後半のものであろう。両者とも底面は平底である。
- ☆ 施文→ $(10\cdot11)$ とも無文であるが、頚部と肩部の境に、1 条の沈線文がめぐるものである。
- ☆ 色調→ (10) は、明黄褐色、(11)は灰黒色、胎土・焼成は、(10)はやや不良、(11)は 良である。

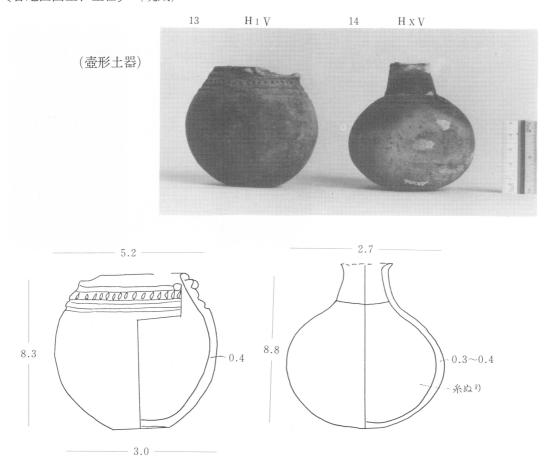


(壺形土器)



〔壺形土器〕 -12 (精製)

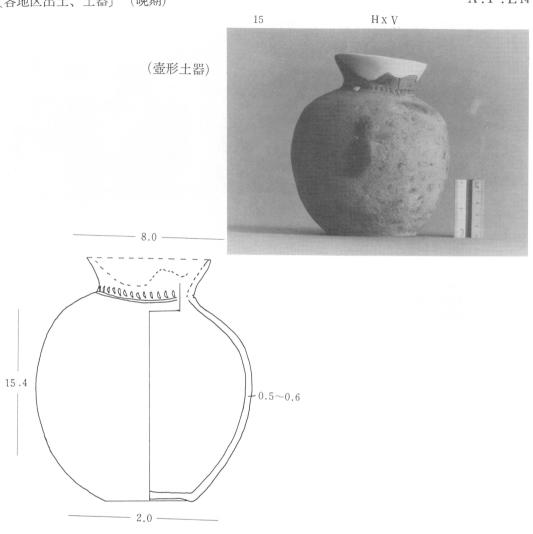
- ☆ (12) は、H x V 出土の第8群土器 (大洞C 2 式) である。
- ☆ 器形→このものは、口頚部が小さく、直立した頚部をもつもので、最大幅は、胴部中央上にあって、まるく内湾し底部に接するものであるが、底部には、高台状の底部が付くものである。
- ☆ 施文→肩部下より胴部上半には、施文帯を有し、その施文帯を2~3条の平行沈線文で区画し、施文帯には、「χ字文」や「曲線文」がある。また、浮彫り面には、0段多条のL・R縄文が施文されるものである。無文帯は、研磨され平滑面をなしている。
- ☆ 色調は、明赤褐色、胎土に微量の細砂を含むが、胎土・焼成とも最良である。



〔壺形土器〕 -13・14 (精製)

- ☆ (13) は、H 1 V出土の第7群土器 (大洞C 1 式)、 (14) は、H x V出土の第10群土器 (大洞A式) である。
- ☆ 器形→ (13) は、口頚部が欠失しているため不明、胴部は球形を呈し、底面はやや「上 げ底」のものである。(14)は、口縁が欠失しているが、頚部は細く、末広がりの形態で、 胴部は球形、底面はやや平底である。
- ☆ 施文→ (13) は頚部下に太い沈線文と粘土粒を付し、刺突文がめぐるもので、さらに 2条の沈線文が肩部下に施文される。胴部は無文で研磨されている。(14)は、口縁直下 と肩部上に沈線文がめぐるが、他は無文である。
- ☆ 色調は、(13)は黒色、(14)は灰黒色、一部黄褐色で、両者とも朱ぬり土器である。胎 土・焼成ともに良く、特に(13)は良い。

[各地区出土、土器] (晚期)



[壺形土器] -15 (粗製)

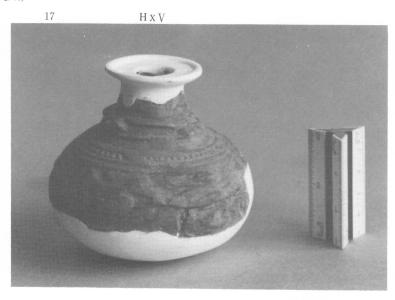
- ☆ (15) は、H x V 出土の第7群土器 (大洞C 1 式) である。
- ☆ 器形→この土器の口縁は、欠失しているが、平縁の口縁と思われる。口頚部は外反するもので、肩部は、まるくふくらむものである。胴部もふくらみのある器形で、底面は強い「上げ底」である。
- ☆ 施文→頚部と肩部の境に、刺突文がめぐり、その下位に1条の沈線文がめぐる。胴部 は無文である。
- ☆ 色調は、外面明黄褐色、灰黒色の斑点あり、胎土・焼成は良いが軟質に焼成されている。

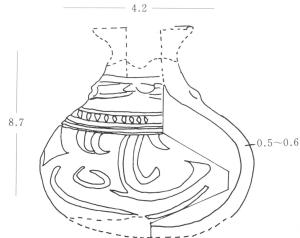


〔壺形土器-注口付〕-16 (精製)

- ☆ (16) は、H x V の第10群土器-注口付(大洞 A 式)である。
- ☆ 器形→このものの口縁部は、欠失しているため不明であるが、肩部がまるみを持ってゆるく張る器形で、底面は不整な「上げ底」ぎみのものである。
- ☆ 施文→頚部と肩部との境に2条の沈線文がめぐり、注口部は一段高く、その左・右には2本の隆起線文に囲まれた短沈線がある。また、隆起線文の末端には、二叉にわかれた粘土粒が付くものである。その他、胴部は無文である。
- ☆ 色調は、明黄褐色 (内外とも)、胎土に細砂を含むが良好で、焼成も良い。但し、軟質 に焼成されている。
- ※ このものの注口部は特異であって、第10群土器としたのは、隆起線文と短沈線文が(大洞A式) 土器の特徴を認めたからである。当遺跡を含めて、小生の発掘した各遺跡では、 (大洞A式) の時期では、注口土器の出土は稀少である。

(壺形土器)





[壺形土器] -17 (精製)

- ☆ (17) は、H x V の第 7 群土器 (大洞 C 1 式) である。
- ☆ 器形→このものは、口縁が開き、頚部が末広がりのもので、胴部の最大幅は、胴部下 半にある器形のものである。
- ☆ 施文→全体に朱ぬり土器で、頚部の下端には、太い沈線文がめぐり、4対の粘土粒を付している。肩部には、刺突文と沈線文があって、上部文様帯を区画し、下部文様帯には、浮彫りの「χ字文」を主体とする文様が施文される。
- ☆ 色調は、暗赤黒色で、胎土・焼成とも最良なるも、軟質である。

18 HxV

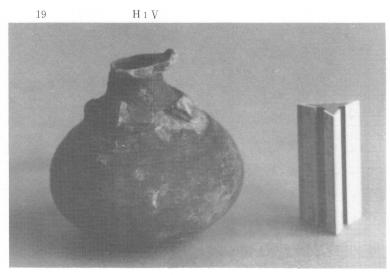
(壺形土器)



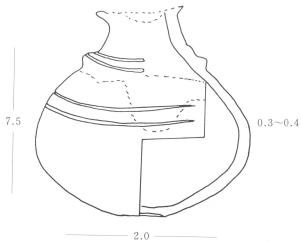


[壺形土器] -18 (精製)

- ☆ (18) は、H x V 出土の第8群土器 (大洞C 2 式) である。
- ☆ 器形→口頚部が強く外反するもので、肩部が張らず、最大幅部は胴部下半にある器形 で底面は「上げ底」である。
- ☆ 施文→口縁直下に沈線文が1条めぐり、頚部下には、2条の平行沈線文が施文される。 また、胴部の最大幅部には、3条の平行沈線文があって、上部文様帯と下部文様帯を区 画している。上部・下部文様帯には、縦位の沈線が3~4本施文され、斜行する沈線に なって三角形の文様がある。
- ☆ 色調は、暗赤褐色 (内外面とも)、胎土・焼成は最良である。



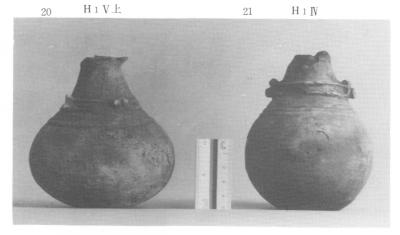
(壺形土器)

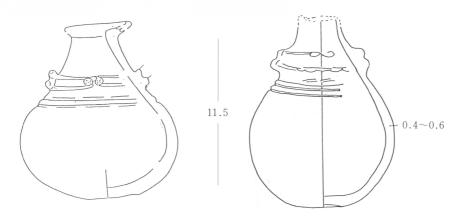


〔壺形土器〕 -19 (精製)

- ☆ (19) は、H 1 V出土の第8群土器 (大洞C 2 式) である。
- ☆ 器形→この土器も朱ぬり土器で、口縁部が開き、頚部は末広がりに開くもので、頚部 下端には隆起線がめぐるため、高くなっており、縦位の粘土粒が付される。胴部の最大 幅は、胴下半にある。底面は「上げ底」を呈する。
- ☆ 施文→頚部下の隆起線文には沈線文があって、粘土粒を連結しており、肩部下には、 2条の平行沈線文が施文されている。胴部は朱ぬりの他は、無文帯をなしている。
- ☆ 色調は、暗黒色を呈し、胎土・焼成とも最良であるが、剝離痕があって、焼成は軟質である。

(壺形土器)

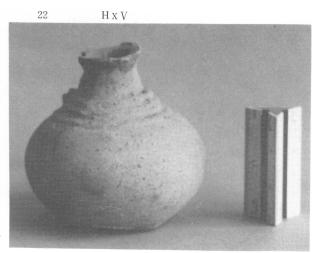




[壺形土器] -20・21 (精製)

- ☆ (20) は、H₁ V出土の第8群土器 (大洞C₂式)、(21) は、H₁ IV出土の第8群土器 (大洞C₂式) である。
- ☆ 器形・施文→ (20) は、口縁部が開き、頚部が末広がりのもので、頚部下より肩部へかけては、やや細い粘土ひもを隆起線文状に上下に付し、その間には縦位・横位の粘土粒が交互に付され、さらに隆起線をはさんで平行沈線文が2条施文される。胴部は無文帯をなすもので、底面は中高のものである。
 - (21) も (20) と同様のパターンであるが、(21)は、横位に付される粘土粒は、2段に付されるもので、その点が(20)と異なる。
- ☆ 両者の違いは、その器形にあって(20)は、最大幅部は胴部下半にあるが、(21)は、典型的な洋梨状の器形である。
- ☆ 色調は、(20)は、明赤黄色、(21)は灰赤黒色で、胎土・焼成とも最良なるも軟質である。



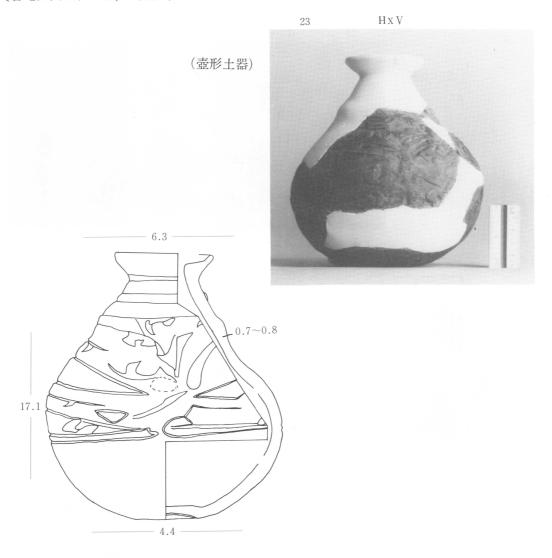


8.0

3.4

〔壺形土器〕 -22 (精製)

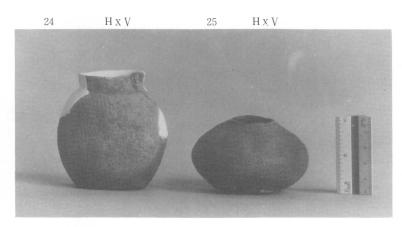
- ☆ (22) は、H x V 出土の第8群土器 (大洞C 2 式) である。
- ☆ 器形→口縁部は、一部欠失しているが開くもので、頚部は末広がりの器形で、最大幅 部は、胴部下半にある器形である。また、この土器には、4個の脚が付く形状のもので ある。
- ☆ 施文→口縁下より頚部までは、無文、頚部下に隆起線文2条と、沈線文があり、縦位 の粘土粒4対を連結している。さらに、その下部に2条の沈線文がめぐるものである。 胴部は無文帯をなし、底部には円形文を有し、底面は中高である。
- ☆ 色調は、内外面とも明黄褐色で、胎土・焼成とも最良であるが、軟質である。

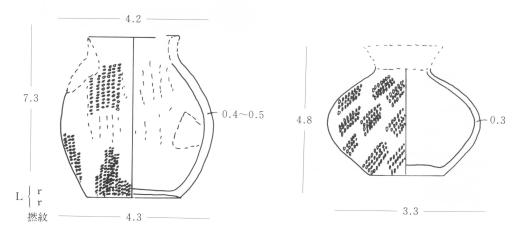


〔壺形土器〕 -23 (精製)

- ☆ (23) は、H x V 出土の第7群土器 (大洞C 1 式) である。
- ☆ 器形→この土器は、口頚部等が欠失しているが、口縁が開き、頚部が末広がりの壺形 タイプのものである。肩部上には、隆起線文がめぐり、沈線文によって粘土粒を連結す るものと推定される。胴部の中央下に最大幅部をもつ器形のものである。
- ☆ 施文→復原土器のため、詳しい施文の状態は不明であるが、「 χ 字状文」が施文されているものである。
- ☆ 色調は、暗赤黒色、胎土・焼成とも最良であるが、焼成は軟質のものである。

(壺形土器)





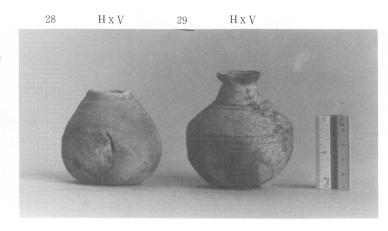
[壺形土器] -24・25 (粗製)

- ☆ (24) は、H x V 出土の第10群土器 (大洞A式)、(25) は、H x V 出土の第8群土器 (大洞C 2 式) である。
- ☆ 器形→ (24) は、口頚部はやや外反するが、直立に近く、しかも頚部は短いものである。また胴部は、まるく内湾する、長胴気味のもので、底面は「上げ底」である。(25) は、口頚部が欠失したもので、肩部は張らず、最大幅部は胴下半にある器形である。(なお、底面は上げ底である。)
- ☆ 施文→ (24) は、肩部より底部まで縄文が施文されるが、口頚部は無文である。(25) は、肩部下より縄文が施文される。
- ☆ 色調は、(24)は、黄褐色、一部灰黒色、(25)は、赤褐色、一部黒色で、(24)は胎土・ 焼成ともやや不良、(25)は、胎土・焼成とも良い。

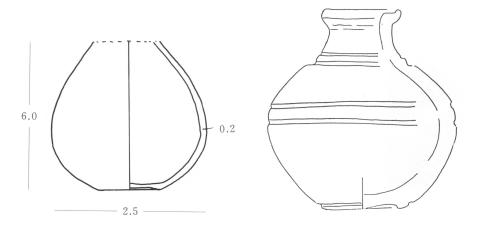
26 HxW 27 HxV
(産形土器)
(産形土器)
10.5
11 4
4.6

〔壺形土器〕 -26・27 (粗製・精製)

- ☆ (26) は、Hx N出土の第8群土器 (大洞C2式)、(27) は、Hx V出土の第10群土器 (大洞A式) である。
- ☆ 器形→ (26) は、口頚部がゆるやかに外反し、肩部が張らないもので、胴部の最大幅 部は、中央下にある器形で、底面は「上げ底」のものである。
 - (27) は、口縁は外反し、やや末広がりな長い頚部のもので、胴部中央やや下に最大幅をもつふくらみのある器形で、底面は「丸底」である。
- ☆ 施文→ (26) は、口頚部が無文で肩部より底部まで左下がりの縄文が付されるものである。(27)は、頚部下端に沈線文が1条めぐるが、他は無文で、朱ぬり痕があるものである。
- ☆ 色調は、(26)は、内外面とも黄褐色、(27)は、明赤黄色を呈する。胎土・焼成とも良い。

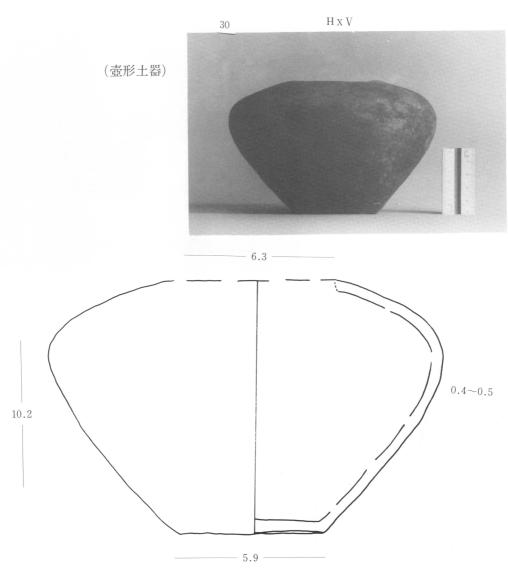


(壺形土器)



〔壺形土器〕 -28・29 (精製)

- ☆ (28·29) は、ともにH x V 出土の第8群土器 (大洞 C 2 式) である。
- ☆ 器形→ (28) は、口縁部が欠失しているが、洋梨状の器形で底面は平底である。(29) は、口縁部が外反し、頚部が末広がりのもので、最大幅部は、胴部中央にある器形で、 底面は平底のものである。
- ☆ 施文→ (28) は、無文土器、(29)は、肩部上端に平行沈線文が2条、胴部中央に2条 の沈線文がめぐるもので、他は無文であるが、朱ぬり土器である。
- ☆ 色調は、(28)は、明黄褐色、(29)は、外面灰褐色、内面暗褐色を呈する。(28・29)と もに胎土・焼成は良いが軟質で(29)は剝離痕がある。

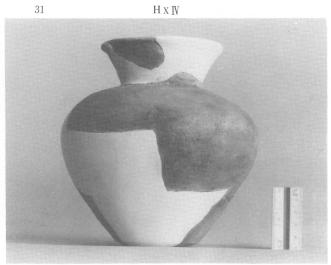


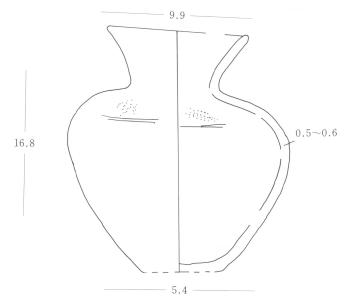
[壺形土器] -30 (精製)

- ☆ (30) は、H x V 出土の第8群土器 (大洞C 2 式) である。
- ☆ 器形→この土器の口頚部は、欠失しているが、口頚部が外反する(31)のタイプと同様のものと推定される。肩部が強く張る器形で、底面は不整な平底を呈する。
- ☆ 施文→頚部の下端に、1条の沈線文がめぐるのみで、他は無文である。
- ☆ 色調は、外面灰黒色、内面明黄褐色で、胎土・焼成は良い。

〔各地区出土、土器〕 (晚期)

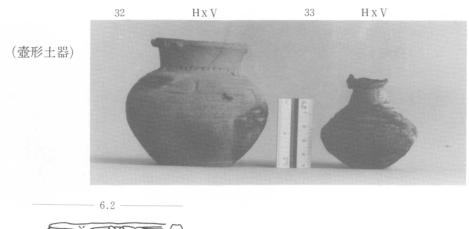
(壺形土器)

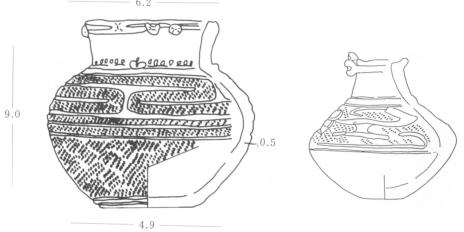




[壺形土器] -31 (精製)

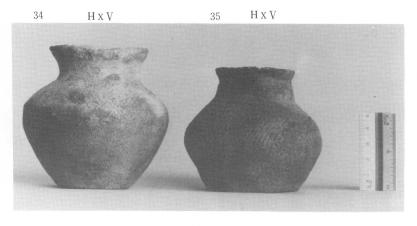
- ☆ (31) は、H x N出土の第8群土器 (大洞C2式) である。
- ☆ 器形→口頚部が外反し、口縁が開くもので、肩部に最大幅部がある器形で、底面は剝離しているため不明である。
- ☆ 施文→この土器は、無文である。
- ☆ 色調は、暗褐色、内面は灰黒色で、胎土・焼成は最良で、器表面は研磨され平滑面を 持つ土器である。



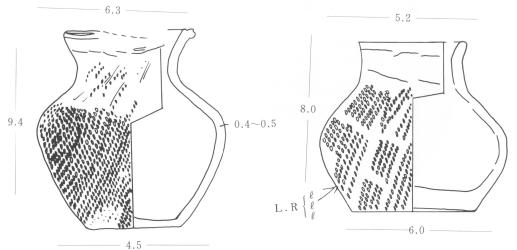


「壺形土器」-32·33 (精製)

- ☆ (32·33) は、両者ともH x V 出土の第10群土器 (大洞A式) である。
- ☆ 器形→ (32) は、口径・底径とも大きく、口径は強く外反し、頚部は直立したもので、 肩部は張らず、最大幅は胴部中央にある器形で、底面は「上げ底」である。(33)は、口 縁に突起をもつもので、頚部は末広がりで、肩部が張らず、最大幅部は胴部中央にある。 また、底頚は小さく「上げ底」である。
- ☆ 施文→ (32) は、口唇部に1条の沈線文、口縁直下にも1条の沈線文と、横に突出する突起が4対あって、頚部下端には刺突文がめぐるが、その下方に3対の粘土粒を付したものである。胴部には平行沈線文が2条施文され、文様帯には「入り組み工字文」があって、縄文も施文されるものである。
 - (33) は、朱ぬり土器で、胴部の最大幅部に平行沈線文、頚部下端にも2条の沈線文がめぐり、施文帯には、「矢羽根状文」の祖形とみられる文様が浮き彫りに施文され、その上面にはR・L縄文がある。なお、胴部下半は無文である。
- ☆ 色調は、(32)は、明赤黄色、(33)は、暗黄色を呈する。胎土・焼成は、(32)は最良、 (33)は良いが軟質の焼成である。



(壺形土器)



〔壺形土器〕 -34・35 (粗製)

- ☆ (34) は、H x V 出土の第 8 群土器 (大洞 C 2 式)、 (35) は、H x V 出土の第 8 群土器 (大洞 C 2 式) である。
- ☆ 器形→ (34) は、口頚部が外反し、肩部が張らず、最大幅部は胴部の中央上にある器形で、底面は平底を呈する。(35)は、口縁が外反し、頚部はやや末広がり気味のもので、最大幅部は胴部の中央にあるもので底面径が大きく、やや「上げ底」である。
- ☆ 施文→ (34) は、口唇部に1条の沈線文があり、口縁直下に粘土粒を付すもので、おそらく突起のあるものと推定される。口頚部は無文で、肩部下には縄文が施文されたものである。(35)は、口縁〜頚部は無文で、肩部下には縄文が付けられている。
- ☆ 色調は、(34)は、灰黄色、(35)は、黒褐色を呈する。胎土・焼成は、(34)は、胎土に 砂粒を含むが焼成は堅い。(35)は、黒褐色、(内面黄褐色)、胎土・焼成は良い。